

第1章・発掘調査決定に至る道

▶ 平成28年～令和2年 ◀

1.「荒木山の古墳を顕彰する会」誕生

平成28年（2016年）2月12日、「荒木山の古墳を顕彰する会」の設立準備会が北房文化センターで開催され、役員、会則等が決定した。「荒木山の古墳を顕彰する会」（以下、顕彰する会）の発足である。4月2日に総会、同月17日には役員会を開催し、古墳の清掃、講演会の開催等、28年度の活動計画を決めた。

真庭市北房地域には3世紀末の古墳時代前期から7世紀の終末期（飛鳥時代）までの250基を超える古墳がある。その中で荒木山東塚古墳は真庭市で最も古い古墳に位置付けられ、続いて西塚古墳が築かれている。この記念すべき古墳を守り、広く知っ



北房文化センター

てもらいたいと久松秀雄氏が地域住民に呼びかけ、趣旨に賛同する20名の計21名で顕彰する会が発足した。

〔目 的〕 荒木山東塚・西塚古墳を顕彰する。学術調査を関係機関へ要望し、その実現を図る。

〔活動方針〕 目的を達成するため、地元関係者はもとより、ボランティアなど広く市民の理解と参加を得て、真庭市など関係機関と連携した活動を展開する。

〔役 員〕 ○代表／久松秀雄 ○副代表／南條保之 ○顧問／西谷寛・戸村彰孝
○事務局／宮田美輝・畦田正博・（会計）奥田健治
○幹事／難波正夫他（7名） ○監事／天野光暉他（2名）



古墳の外周測量（平成28年11月24日）

発足当時、荒木山の古墳は真庭市の文化財に指定されていたが、雑木や笹などが生い茂っている状態だった。顕彰する会では墳丘や周辺の掃除（柴掻きや草刈り・雑木の伐採）を春4回、秋1回行い、見学しやすいように登山道の整備（土嚢を積んで階段を設置）などを行った。顕彰活動として、総社市埋蔵文化財学習の館館長平井典子氏による講演会「荒木山の古墳と古備」



見学路整備・清掃作業（平成29年11月10日）

6月には墳丘の測量調査を真庭市教育員会（以下、市教委）に要望し、前向きに検討したいとの回答を得た。また、会員研修として、勉強会や真庭市歴史講演会への参加、視察（^{ひるぜん}蒜山の四ツ塚古墳、総社市の^{つくりやま}江崎古墳や作山古墳、倉敷市の^{たてつきふんきゆうぼ}楯築墳丘墓など）を行った。同年12月には、「古墳を含めて北房の古代についてもっと知って欲しい、そして会の活動を多くの人たちに知ってもらいたい」との願いから広報紙「荒木山通信」を発刊した（会員や地権者・関係機関等への配布、北房地内自治会への回覧、文化センターなどでの閲覧など。

300部印刷）。以来、年3回（4・8・12月）発行している。令和7年（2025年）12月現在、第25号まで発行（600部印刷）している。

平成30年（2018年）は、春3回、秋1回の計4回の掃除。4月には前出の平井典子氏による講演会「大谷1号墳とその時代」を開催。5月からは市教委が主催する北房公民館講座「まに大附属ふるさと研究所」（後述）に参加した。

【畦田正博】

を開催し、講演後は聴講者を荒木山へ案内した。また、研修活動としては、北房地域の史跡巡り、総社方面への視察を行った。そして10月から11月にかけての5日間で荒木山の西塚・東塚古墳の外周の測量を行った。

平成29年（2017年）は、春・秋各2回の掃除を実施。同志社大学准教授津村宏臣氏による講演会「文化遺産を活用した人づくり・地域づくり」に参加した。



雑木を伐採し、古墳を手入れする会のメンバー

この日は、会員11人が東塚古墳で作業し、チェーンソーや草刈り機、鋸、鎌を使って雑木の枝を切ったり、倒した木の片付けを行った。

昨年2月に、古墳の整備や保存を目的に会を設立し、メンバーらが木々の伐採や見学路の整備を春と秋に行っている。

この日は、会員11人が東塚古墳で作業し、チェーンソーや草刈り機、鋸、鎌を使って雑木の枝を切ったり、倒した木の片付けを行った。

昨年2月に、古墳の整備や保存を目的に会を設立し、メンバーらが木々の伐採や見学路の整備を春と秋に行っている。

この日は、会員11人が東塚古墳で作業し、チェーンソーや草刈り機、鋸、鎌を使って雑木の枝を切ったり、倒した木の片付けを行った。

北房 古墳の見学路整備 荒木山の古墳を顕彰する会

北房上水田地内の荒木山に残る真庭市指定文化財の古墳「荒木山木山」と「東塚」と「荒木山西塚」

北房地域には約250基の古墳が残っており、代表の久松秀雄さん（76）＝真庭市宮地Ⅱは「古墳は貴重なもの、放置しておいてはいけません。現在、市に古墳の測量や調査を依頼しており、今後、子どもやお年寄りでも歩けるように見学路を整備し、保存していきたい」と話している。

●ほっておけんぞ！ 荒木山

保存会名誉顧問・初代会長 久松秀雄

「あそこには卑弥呼の鏡があるかも知れない。』『北房町史通史編上』の「原始古代の社会と文化」を執筆した平井勝さん（P4注記参照）が言ったことがあります。私が「発掘をして下さいよ。」と言うと「近藤先生も狙っていますよ。」と笑いました。平井さんは中国自動車道建設に伴う遺跡の調査当時から大谷1号墳の発掘調査までを手掛け、北房の古代に精通した方でした。荒木山東塚古墳に卑弥呼の銅鏡「三角縁神獣鏡」が副葬されているかもしれない



北房小学校6年生古墳学習会（令和元年6月11日）
大谷1号墳石室前における出前授業風景

との話に、倭国の古代が身近に立ち上がった感じがして、ときめいたことを思い出しています。

さて、北房の終末期古墳は「大谷・定古墳群」(国指定史跡)が定説となっており、それ以前の首長墳についてもおよその築造時期も想定されています。古墳時代、北房で最初に築かれたのが荒木山に眠る2基の古墳です。振り返ってみると大谷1号墳は「その古墳を調査しないと北房の古代は書けない。」との平井さんの熱意で発掘調査が実現し、それに続く形で岡山大学考古学研究室が学術調査で定北古墳、続いて定東塚・西塚古墳を調査しました。そして真庭市教育委員会が4号墳・5号墳を調査し、それぞれ貴重な成果を得て完了しています。

荒木山は北房の盆地で最も広い^{かみみずた}上水田地区の南側の山裾に在る比高20mの低丘陵です。私は役所を退職してからも荒木山を「ほっておけばただの山、なんとかせねば！」との思いで眺めていました。

そして、平成28年（2016年）の年明けから地域内の親しい友人20名に呼びかけ、荒木山の掃除を始めることとしました。早速、関係地権者(8名)へ活動の趣旨、活動内容を説明し、現場への立入りの承諾



を得ました。また、雑木の伐採、草刈りなどについても承諾を得、現地での清掃活動を開始しました。2月12日「荒木山の古墳を顕彰する会」の設立準備会、4月2日に第1回総会(18名出席)を開催し、活動を始めることができました。平成28年(2016年)から令和4年(2022年)までの会員の活動は「資料編」資料2のとおりで、併せて114回(延べ1103人)で、これらは会員のみの活動状況です。

荒木山東塚古墳(前方後方墳)については磁気探査で金属反応があり、前述の鏡の可能性がります。また西塚古墳では墳頂に^{たてあな}竪穴式石室が一部露出しており放置できません。これらについては大谷・定古墳群の先例にならい、引き続き関係機関に調査を要望し、実態解明を実現したいものです。

私たちが目下推進している「西の明日香村づくり」が住民に十分理解され、支持されることを切に願っています。

最後になりましたが、広報紙「荒木山通信」は平成29年(2017年)創刊以来、本会の活動報告のみならず、幅広い教養を提供し、多くの読者を得てきたことを思い、編集にあたられた畦田正博会長の熱意とご苦勞に対し、感謝と敬意を表し、引き続いての活躍を期待いたします。



ミニドローン体験
(荒木山の非破壊調査時)

【参考】

荒木山の古墳を顕彰する会設立趣旨

北房には、約250基の古墳が在り、その中にはこの地域の首長の墳墓が継続的に築造されています。最初に築かれたのが全長45mの前方後方墳「荒木山東塚古墳」で、続いて全長63mの前方後円墳「荒木山西塚古墳」が築かれています。特に「荒木山東塚古墳」は、3世紀から4世紀にかけて築かれたとされ、岡山県下でも最古級の一つに数えられるとされています。

その後、前方後円墳の「そふづぶろ」や「立1号」、円墳の「下村1号」などの古墳が次々と築かれています。そして、7世紀に築かれた首長墳「定古墳群」を最後に、この地域の古墳は無くなります。そのころ、古代寺院「英賀寺」や郡役所である「英賀郡衙(推定地)」も建てられています。北房地域は、古代の地域社会を偲ばせるジオラマと言ってもいいかもしれません。

本会は、この地域の古墳のルーツである荒木山の古墳の顕彰活動を展開するとともに、学術調査を関係機関に要望して参ります。本会の活動は、地域住民の熱意によるボランティアを基盤としつつ、真庭市の指導助言を得るなど、関係機関と密接な連携のもとに取組むこととします。そして、何よりも地権者の方々の理解と、地元のみなさんの協力を戴くことを最優先に進めることとします。

注記：平井勝氏略歴

昭和22年(1947年)岡山市に生まれる。立正大学文学部史学科を卒業後、岡山県教育委員会に入庁。県内各地の遺跡調査に携わる。平成12年(2000年)逝去。

北房地域の遺跡調査は以下のとおり。

谷尻遺跡発掘調査、桃山遺跡発掘調査、土井2号墳発掘調査、荒木山西塚古墳測量調査、小殿遺跡・英賀廃寺発掘調査、小田鼻古墳測量調査、定古墳測量調査、大谷1号墳発掘調査、そふづぶろ古墳測量調査

2. 古墳の測量・物理探査決定

平成29年（2017年）6月29日、顕彰する会の久松代表、南條副代表ら6名が真庭市庁舎を訪ね、荒木山東塚・西塚古墳の測量調査の要望書を真庭市教育長に手渡した。真庭市は太田市長、三ツ教育長ら6名が対応し、前向きに検討したいとの回答があった。

平成29年 6月29日

真庭市教育長 三ツ宗宏様

荒木山の古墳を顕彰する会
代表 久松 秀雄

古墳の墳丘測定についての要望書

万緑の候、貴職にはますますご壮健でご活躍のことと存じます。

さて、ご承知のように、北房には、飛鳥時代（7世紀）に築かれた6基の古墳があり、平成20年（2008年）に「大谷・定古墳群」として、国の史跡に指定されました。

一方で、3世紀の終わりから4世紀にかけて築かれた、古墳時代初期の古墳があります。それが、真庭市指定史跡「荒木山東塚・西塚古墳」です。

高さ20mの小高い丘の頂上に、並んで築かれた2基の首長墳です。最初に築かれた東塚は、全長45mの前方後方墳、続いて全長63mの前方後円墳である西塚が築かれています。

特に、東塚は当時の古備の中にあつて、最も初期の古墳の一つとされ、極めて貴重な古墳です。私たちは、北房に古墳時代の始まりを告げたこれらの首長墳を顕彰するため、昨年2月に会を結成し、土地所有者の理解を得て、雑木の伐採、雑草の刈り払い、見学路の整備等を行い、昨年末には墳丘外周の測量を実施しました。

そして、ゆくゆくは学術調査により、古墳の実像が解明されることを望んでおりますが、当面、墳丘の形状を明らかにするための詳細測量を行っていただきたく要望致します。

財政事情が厳しい中とは存じますが、格別のご理解、ご尽力を戴き実現できますよう、切にお願い申し上げます。

その後の経緯は、真庭市埋蔵文化財調査報告書9『荒木山 真庭市史跡「荒木山西塚・東塚古墳」測量・探査調査報告』（令和3年3月）に概要が記されているので引用する。

「北房地域は、大谷1号墳や定東塚古墳など6基の終末期古墳から成る国史跡「大谷・定古墳群」をはじめ、完結的な小盆地の中に、古墳時代を通じて首長墓が継続して築かれたことで知られている。真庭市あるいは備中北部、いずれの点からみても、他の地域には見られない事象であり、これらの古墳や地域の歴史を生かした町づくりが以前より進められてきた。このため、市内においても、古墳や遺跡の存在を身近に感じる住民が多い地域である。

北房地域に築かれた首長墓のうち、前期古墳である荒木山西塚古墳及び荒木山東塚古墳（以下、両古墳を総称し、「荒木山西塚・東塚古墳」と呼ぶ。）は、地域を代表する古墳として、北房町史跡に指定され、真庭市になっても市の史跡として引き継がれていたが、古墳が所在する山林は荒廃するままで、見学もままならない状態にあった。そこで、地域の住民有志が、その顕彰を図るため、2016年（平成28年）2月に「荒木山の古墳を顕彰する会」（以下、「顕彰会」と呼ぶ。）を結成し（現在は「北房文化遺産保存会」に名称変更）、荒木山西塚・東塚古墳とその周辺の環境整備を行っていた。一定の整備が進んだ後、2017年（平成29年）に、今後の活用を考える中で、2基の古墳について詳細な現況が把握できるよう、顕彰会から真庭市教育委員会（以下、「市教委」と呼ぶ。）等に対して、2基の古墳の測量調査実施の要望があった。

市教委では、荒木山西塚・東塚古墳の重要性を考慮し、今後の保存活用に必要となる墳丘等の詳細なデータを収集するため、測量調査は意義ある取組と判断し、その実施方法について検討を行った。その中で、北房地域に縁のある同志社大学の津村宏臣氏に調査協力を依頼したところ、津村氏より、地域の住民参加による測量に物理探査を加えた非破壊調査の提案があった。折しも、市教委では、文化財の将来にわたる保存伝承や、文化財活用に向けた担い手育成が喫緊の課題となっていたところであり、担い手育成事業の一環として、古墳の調査を行う形で準備を進めることとなった。

そして、2018年度（平成30年度）から2020年度（令和2年度）にかけて、担い手育成講座として「まに大附属ふるさと研究所」を北房公民館に開設し、荒木山西塚・東塚古墳については、最初の2カ年度で、測量・物理探査による現地調査を行い、最終年度に調査報告書を刊行することとなった。」

以上の経緯の後、「まに大附属ふるさと研究所」の第1回講座が、平成30年5月26日に開催されることになった。

【平城 元】

3. 北房公民館講座「まに大附属ふるさと研究所」

平成29年(2017年)から同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター（research Center for Knowledge Science in Cultural Heritage 以下：CKSCH）と真庭市および北房地域での連携「^{きょういく}郷育」事業について報告する。その中でも、「まに大附属ふるさと研究所」事業、「真庭市立北房小学校・北房中学校郷育」事業については、その詳細を整理し、「北房モデル」とも言うべき地域創生のモデル化を目指した背景と実践をまとめる。

ここでは、「まに大附属ふるさと研究所」について詳述し、地域と大学、産官学民連携、そうした地域創生事業の理論的背景と“北房モデル”の全容を、実践記録を通じてまとめる。

(1) 連携事業の始まり

本連携事業は、平成29年7月の1本の電話から始まる。CKSCHは、平成21年（2009年）から香川県小豆島町において、特に東海岸の複数の石切丁場遺跡で、地域住民と連携した学術調査、NPO法人が主体となった体験イベント、民間メディアを通じた情報公開などを実施していた。一方、そうした盛り上がりを前提に、当時小豆島町では、政策的に日本遺産登録を目指す事業化を開始（令和4年に日本遺産登録という形で結実）した。ただ、CKSCHとしては、地域住民が主体となった動きとは異なる文化行政としての「登録」の動きに早くから疑義を呈し、町事業と離別、新たに小豆島町福田の有志と、あるべき産官学民連携の模索を続けていたのが、平成29年だった。市教委から、そうした活動、つまり地域住民

が地域の文化遺産を社会資源化する実践を北房でできないか、と言うのが電話の内容であった。

市教委の担当者（新谷氏）はセンター長（津村）の大学時代の後輩であり、ともに学生時代、旧北房町中津井での発掘調査を経験していた。また後に、その担当者は「大谷・定古墳群」として、追加調査と遺産の社会化を実現していた。丁度、岡山からのフェリーで小豆島の調査に向かう途中であったため、「時間がない」と断ったが、「フェリーの間の時間で良いから」ということで、結局、往復のフェリーで話をした。そこで現在につながる「郷育」の外枠が固められていく。その時、明確にした点は、以下の三点であった。

- ①古墳の調査や研究のためなら真庭には入らない。それは、中津井の国指定史跡「大谷・定古墳群」を「活用する」という意味での失敗を繰り返すだけだから。
- ②地域住民が主体となる事業化の手伝いなら大学として関わる価値がある。手当たり次第の地域イベントや地域創生では地域のレジリエンスを保証できない。
- ③したがって、手あたり次第の全方位展開ではなく、まず地域の中核的テーマを絞り込み、そのテーマ活動を通じて、あるいはその活動成果を例示しながら、多方面への展開を目指す。

二ヶ月後の9月、CKSCHは、北房振興局（以下、振興局）において顕彰する会のメンバー、振興局、市教委で話し合いの機会を得た。久しぶりに訪れた北房は、当時と比べるとかなり人口も減少しているようで、それに伴う活力の低下も感じられた。改めて、③が不可避な戦術になることを確認した。その後、11月にセンター長として、講演会を実施することがその場で決まった。

(2) 真庭市歴史郷育講座「文化遺産を活用した人づくり・地域づくり」

以下、平成29年（2017年）11月の講演内容を整理する。講演は2時間に及び、真庭いきいきテレビ（ケーブルテレビ局）で市内に生放送された（「資料編」資料3）。

文化遺産は何を保存しているのか。この問いに対して、一般的には過去の建造物や景観、技術や伝統といった物理的あるいは歴史的実体を想定する。しかし、文化遺産が保存しているのは単なる過去ではない。それは現代社会が過去をどのように理解し、どのように未来へ接続しようとしているかという「社会的構造」である。文化遺産は物理的対象であると同時に、社会的意味の凝縮体である。この講演では、この文化遺産の社会的構造を理論的に再検討し、世界遺産制度、無形文化遺産、地域教育実践を横断的に分析することによって、文化遺産を媒介とした地域形成理論を構築することを目的とする。

世界遺産制度はしばしば観光振興政策として理解される。登録は国際的評価を意味し、観光客増加や経済効果が期待される。しかし制度の本質は観光政策ではなく、「顕著な普遍的価値（Outstanding Universal Value）」の認定である。この価値は地域内部から自然発生的に形成されるものではなく、国際社会という外部制度によって認定される概念である。したがって世界遺産登録は、外部評価の導入であり、地域社会の内発的価値体系とは必ずしも一致しない。この構造的緊張が、登録後の地域社会における主体性の低下や、期待と失望の循環を生み出す要因となる。

文化遺産の社会的機能を理解するためには、三層構造を想定する必要がある。第一に物理的実体としての文化遺産、第二に制度的評価としての法制度や登録制度、第三に社会的意味づけとしての住民意識や教育実践である。従来の文化財行政や研究は第一層と第二層に重点を置いてきた。建築史や保存科学、法制度研究が中心であった。しかし地域社会との関係を論じるためには第三層、すなわち文化遺産がどのように社会的に再解釈され、どのような実践に結びついているかを分析する必要がある。

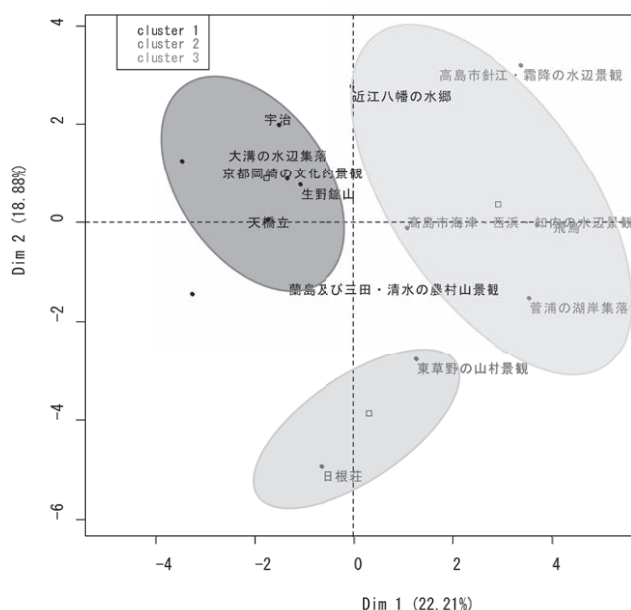
ここで参照すべき理論がピエール・ブルデューの文化資本論である。ブルデューは文化資本を、制度化された文化資本、客体化された文化資本、身体化された文化資本に区分した。文化遺産はこの三類型

すべてと関係する。世界遺産登録は制度化された文化資本であり、建造物や景観は客体化された文化資本であり、地域住民の歴史意識や誇りは身体化された文化資本である。しかし制度化された文化資本が必ずしも身体化された文化資本へと転化するわけではない。制度的評価が付与されても、それが住民の実践に内面化されなければ、地域の主体性は形成されない。この転化過程こそが本講演の中心課題である。

一方、ジョン・デューイの経験主義教育論は、文化遺産と教育を接続する理論的基盤を提供する。デューイは教育を「経験の再構成」と定義した。学習は固定的知識の伝達ではなく、経験の再編成である。文化遺産が教育実践に組み込まれるとき、それは単なる知識対象ではなく、経験の媒介となる。すなわち文化遺産は、地域社会における経験の再構成を促す装置となる可能性を持つ。

以上の理論枠組みを踏まえ、この講演では日本国の文化財、重要文化的景観における住民意識調査について分析とその結果を報告する。近畿地方13地点で実施したアンケート調査（有効回答311件）では、世界遺産登録に「賛成」と回答した割合は56.1%、「どちらかといえば賛成」を含めると74.5%に達した。しかし推進活動への「積極的参加」は13.0%にとどまり、「どちらでもない」が32.6%、「参加したくない」が11.1%であった。登録賛成度と参加意欲の相関係数は $r=0.21$ （確率値 $p<0.05$ ）であり、弱い正の相関にとどまる。これは制度的評価への支持が、主体的行動へと強く結びついていないことを示す。

さらに主成分分析¹（Principal Component Analysis：PCA）を実施した結果、第一主成分（固有値²2.48、寄与率³31.2%）は「経済的期待軸」、第二主成分（固有値1.71、寄与率21.4%）は「生活影響懸念軸」と解釈された。登録賛成者のうち経済期待得点が高い群は、参加意欲が相対的に低い傾向を示した（ $t=2.13$, $p<0.05$ ）。経済的メリットを期待する層ほど主体的関与が弱いという逆説的傾向が確認された。この結果は、制度化された文化資本が身体化された文化資本へと転化していないことを示唆する。文化行政、文化財行政の現状はここにある。



1 多くの変数を持つデータを集約して主成分（データの特徴を表す要素。第一主成分、第二主成分・・・という形で表す）を作成する統計的分析手法。

2 元のデータをどの程度説明できているかを示す指標。基本的には1以上なら十分に説明できていると判断する。

3 その主成分がデータ全体を何%説明しているかを示すもので、その主成分の重要度が分かる。

この講演の後、12月に市教委とCKSCHで協議をすすめた。次年度から3年計画で公民館講座を実施し、まずは地域の文化遺産の創造から具体的実践を開始することとした。その際、象徴的でかつメディアに取り上げてもらえることも前提し、これを「まに大付属ふるさと学研究所」と名付け、受講生を大^{だい}楽^{がく}生^{せい}として、楽^{がく}位^い（伯^{はく}士^し、秀^{しゅう}士^し、楽^{がく}士^し）を授与することとした。また、同時並行で学校現場との連携を模索し、郷育を教育現場で展開する準備も進めた。

(3)平成30年度 「第Ⅰ期 まに大付属ふるさと研究所」

平成30年（2018年）5月26日に第1回が開催された「まに大付属ふるさと研究所（以下、まに大）」は、平成30年度～令和2年度の3カ年、各年4～5回実施する公民館講座として設計された。その中で、いかに郷育モデルとしての“北房モデル”を構築できるか、実践的設計が必要となった。CKSCHでは、次の考え方を3年間で具体化することを10項目で整理し、各回の講座を準備した。その考え方とは、

- 1) 遺産は創造される。
- 2) 地域は連結である。
- 3) 連結は可視化される。
- 4) 可視化は資源化につながる。
- 5) 資源は経営しなければ社会化されない。
- 6) 経営は制度と組織を必要とする。
- 7) 制度の背後には歴史観がある。
- 8) 観光拡張主義では地方は救えない。
- 9) 文化の意味構造の再編だけが解である。
- そして、10) 活用を伴わない調査は倫理的に許されない。

いずれも、文化財保護法ならびに、現在の文化財行政の現場では「改めて指摘するまでもない」内容ばかりである。だが、その体系的実践の機会はそう多くない。それは、先の講演からもわかるように、世界遺産や指定史跡ですら不十分な現状から明らかだろう。まずは、「発掘して珍しい遺物、最大の遺跡で町おこし」の前世紀的思考からの脱却が急務といえた。

第2回（平成30年7月21日）：温故知新の遺産学 過去を学ぶと未来が作れる

今回の主題は、特定の遺跡や文化財の価値を説明することではない。「まに大」という試みを通して、「地域をいかに学び、いかに創造するか」という根本問題を考えることにある。

「地域には資源があるのか」という問いはしばしば発せられる。しかし、この問い自体が的を外している。地域は特定の資源によって成立するのではない。そこに生きる人々の行為、記憶、関係性の総体こそが地域を形づくる。研究所が掲げる「^{けんきゆう}圏究」という概念も、この発想に基づく。エリア（^{きわ}圏）を究めるとは、地理的範囲を限定することではない。その空間に存在するあらゆる行動、形あるもの、形のないものを統合的に把握することにほかならない。遺産は、有形、無形で分けるのではなく、それらを横断する生活の総体を対象とする視点であり、この立場に立てば、「地域には何もない」という言説は成り立たない。欠けているのは資源ではなく、それを遺産として位置づける枠組みなのだろう。

ここで改めて問われるのは、遺産とは何かという問題である。一般に遺産は過去から受け継がれたものと理解される。しかし、ヴィルヘルム・ヴィンデルバンドが述べたように、歴史は一回的な出来事であり、個性的選択によって意味づけられる。歴史の意味は普遍的に定まるものではなく、誰がどのような立場で振り返るかによって変わる。ある遺跡が「日本で何番目に古いか」という事実だけでは、その

地域の意味は決まらない。重要なのは、地域の人々がそれをどう位置づけるかである。この点で、ジョージ・オーウェルの「過去を支配するものが未来を支配する」という言葉は示唆的で、過去の解釈は未来の方向性を規定する。つまり遺産は発見されるものではなく、創造されることになる。正しさは外部から与えられるのではない。説明可能性と自信、そして誇りの中で形成される。人が自らの地域を語れるとき、その語りが遺産を生み出すことになる。

この発想は、前述の講演で話したブルデューの文化資本論とも接続できる。地域の文化資源が客体として存在していても、それが身体化されなければ地域の力にはならない。文化資本は制度化されるだけでは不十分であり、ハビトゥス⁹として内面化されてはじめて意味を持つ。郷育とは、この内面化の過程を設計する教育実践である。さらに、デューイの経験論教育は重要な示唆を与える。教育とは知識の伝達ではなく、経験の再構成である。地域を学ぶとは、情報を覚えることではなく、自らの経験を地域との関係の中で再構成する営みと考えるべきだろう。そのため今回の講座では、講義に加え、マインドマップ¹⁰による可視化を行う。地域知を一方的に教えるのではなく、参加者の内にある知を引き出し、構造化する。この作業そのものが遺産創造の実践となる。

副題の温故知新とは、単に古きを温^{たず}ねることではない。「地域には何も無い」という言説を退け、過去を再解釈し、未来を構想することを指す。遺産学とは遺跡の学問ではなく、遺産を創造する学問である。文化遺産は保存対象ではなく、地域の自己理解を形成する社会装置と捉え直すべきだろう。郷育とは、その装置を教育の場に組み込み、身体化された文化資本を育てる実践である。地域は特定の資源によって成立するのではなく、語りと構造化の営みによって成立する。真に文化遺産を生み、育て、守る主体は、行政でも観光産業でもく、自らの地域を語れる人が増えたとき、地域は持続可能な力を持つだろう。遺産とは、過去にあるものではない。未来を形づくるための、現在の選択なのである。



講座の参加者とマインドマップ作成による
遺産の創造と可視化

第3回（平成30年9月23日）：地域史研究の視点 地域視、地域詞、そして地域誌へ

今回の主題は、地域史を事実として整理することではなく、地域を見る視点、地域を語る言葉、そしてそれらが編まれていく地域誌の構造を考えることである。地域は出来事の集積ではなく、出来事と出来事の関係や編成、その構造こそが地域といえる。関係の構造が立ち上がると、地域は「ただの場所」から「意味を持つ時空」へと転換する。

前回の講義で作成したマインドマップは、その構造を可視化する試みだった。付箋に書かれた情報量の多さに圧倒されたが、重要なのは量ではなく、何が中心に置かれ、何が周縁に配置されているのか、という“位置づけ”である。どの知が他の知と結びつきやすいのか。配置と接続のかたちこそ、マインドマップの鍵になる。

ここで文化財指定制度や文化財行政でおこなわれる「文化財マップ」と比較すると違いは明確になる。国や行政は物件を指定し、個別の対象に価値を付与、その場所をマッピングしている。つまり、その分

9 日常経験において蓄積されていくが、個人にそれと自覚されない知覚・思考・行為を生み出す性向

10 アイデアや考えを1枚の紙に“枝分かれ”させながら整理する図

布の背景にあるのは“物件の属性”であり、時代や種別という“属性の連結”しか示さない。一方マインドマップでは、生活に密着した無形の知が密集している。指定制度が属性を強調するのに対し、地域知は線と面で広がる。どちらが優れているかという問題ではないが、遺産として創造されるべきはどちらかなのは、明らかに後者なのは言をまたないだろう。

作成したマインドマップ、付箋を貼り、位置を貼り替え、関連項目を近づけていく過程は、単なる整理ではなく、受講生の知識の中にある対象の関係を生成する作業である。「近くにある」項目同士は関連しているという直感は、空間的距離を通じて関係性を可視化する試みといえ、そこから距離を測ると

中心性				
1	山菜	妙源寺	ホタル祭り	墳丘墓は近いうちに発見されるだろう
2	鯖寿司	高岡神社	大師巡り	弥生墳丘墓 発見 テーマ
3	神菜	金毘羅神社	大師構	竹林化した丸山三号墳
4	おぞうに	伊勢亀山陣屋・門	荒神	中山遺跡 特殊器台
5	わらびぜんまいさんしょう	大杉	郡神社の火祭り	大谷一号墳
6	秋まつり	奉納刀	ブリ市	定東塚・西塚
7	しばもち	亀山藩	田植え祭り	姿の美しい古墳
8	丸餅雑煮	三尾寺	鯉市	荒木山西塚
9	けんぴき焼き	V字回復	美作8カ所	西の明日香村
10	出合い祭り日咩坂神社と八幡神社 御輿	ぶり市	谷尻青年百八灯	谷尻遺跡 (弥生最後の首長墓)

左から郷土料理、寺・神社、行事、古墳、各班の中心性上位10位

いう発想が生まれる。では、貼り出された知の属性の関係を評価してみる。講座では、任意で、古墳班、郷土料理班、寺・神社班、行事班となっているので、そのマインドマップの中心性の高い項目を整理する。総当たりで距離を計測すると、中心に近い項目が浮かび上がる。例えば、古墳班のマインドマップでは、発掘そのものや専門家の名よりも、「発見」や「体験」「テーマ」など概念が中心性や接続性を示している点で、そのほかの項目とは異なった特徴を持つことは理解できる。知が地物の集積ではなく、経験の構造として編まれていることが見えてくる。

地域詞とは、地域を語る言葉である。地域視だけでは足りない。見たものをどの言葉で結び、どのような理由で接続するのか。その言語化が地域誌を形成する。前回のマインドマップが不完全だったのは、距離は示されても、その距離の理由が十分に言語化されていなかったからだ。関係性を持つ地域誌を編むには、理由を語る言葉が必要になる。ここで再びブルデューの理論が有効となる。文化資本とは単なる知識量ではなく、関係を構造として把握する能力である。ハビトゥスとは、その関係を自然に捉える感覚だ。マインドマップの分析は、このハビトゥスを可視化する試みでもある。誰がどの項目を中心に置くかは、その人の経験構造を映し出している。

次回の講座で、言葉を通じた接続の可視化を実践する。そのために、各班で貼りだした項目相互の関係性について、数字で評価をしてほしい。例えば、○○と▼▼の関係性は、○○と■よりも遠い、という風に、相互に相対得点化をしておくような宿題を設定した。言葉を通じた接続の可視化には、講座での実習中のすべての会話をテキスト化したデータを用いる。

第4回（平成30年10月9日）：新たな学問“文化資源学” 真庭を郷育のメッカに

前回までの講義では、地域視・地域詞・地域誌という三つの段階を通じて、地域は情報の集合ではなく関係の構造であることを確認した。しかし関係が見えるだけでは不十分である。関係を可視化し、共有可能にし、再利用できる形式へと変換する必要がある。前回のマッピングでは、言葉、項目の配置は

見えたが、接続の理由は見えなかった。しかし、実習中の受講生相互の会話は、何をどの位置に配置するか、という“知”の体系のアウトプットであり、その可視化と分析は具体的な接続の構造を明らかにする。

まずは、郷土料理班の会話内容を形態素^{けいたいそ}に分解し、共起分析した結果から見てみよう。

共起ネットワークの中心には「柏餅」と「関係」が位置しており、柏餅が単なる食品ではなく、人と人とを結ぶ媒介として語られていることがわかる。周辺には「粉」「季節」「材料」「一緒」などが結びつき、食そのものよりも、作る過程や共有の場といった生活文脈が強調されている。また「山菜」「地酒」「柿」「酒」などの語も比較的高い中心性を持ち、歴史的事実よりも日常的な経験や地域生活が構造の核を形成している点が特徴的である。一方で動詞は少なく、行為や体験を想起させる語りは弱い。さらに「無関係」という語が一定の存在感を示しており、語りの統一性が十分に確立されていないこともうかがえる。全体として、本構造は制度的価値よりも生活的関係性に基^{もと}づいて編まれており、地域が「物」ではなく「関係」によって成立していることを示していると読めるだろう。

次に寺・神社の共起ネットワークを見てみる。この共起ネットワークでは、「神社」「寺」「妙源寺」「荒神」「関連」といった語が高い中心性を持ち、地域の語りが施設とその関係性を軸に構造化されていることが読み取れる。特に「神社」と「寺」は複数の語と接続し、単体の施設や宗派・宗旨という属性よりも、人や行事、感情と結びつく結節点として機能していると言える。一方で「人」「お宮」「神主」「神様」「祝詞^{のりと}」などの語も密に連なり、信仰が制度としてではなく、人の営みや実践の中で理解されていることが示唆される。また「時代」「名前」など歴史的・系譜的の語も接続しており、時間軸を含んだ構造が形成されている点も特徴的である。全体として、個別の寺社の価値よりも、それらを媒介とした人間関係や記憶の連鎖が重視されており、地域は施設の集合ではなく、信仰を通じた関係構造として語られていることが明らかである。

同じように、行事の共起ネットワークを見てみる。この共起ネットワークでは、「話」と「関係」が高い中心性を持ち、地域の語りが出来事そのものよりも“語る行為”と“つながり”を軸に構造化されていることが読み取れる。「行事」「祭り」「神社」「秋祭り」などの語が大きな塊を形成し、地域の中心が祭礼や年中行事にあることが示されているが、それらは単独で存在するのではなく、「学校」「先生」「イベント」「ホテル」「お祭り」などと結びつき、生活のさまざまな場面へと広がっている点が特徴的である。また「子ども」「亥」「コスモス」などの語も一定の接続を持ち、世代や自然環境といった要素が行事と絡み合っていることがうかがえる。一方で歴史的語や地名は周辺に位置し、制度的・客観的価値よりも、経験や共有の場としての意味が強調されている。全体として、地域は固定的な資源の集合ではなく、語りと行事を通じて関係が編み直される構造として立ち上がっていることが読み取れるだろう。

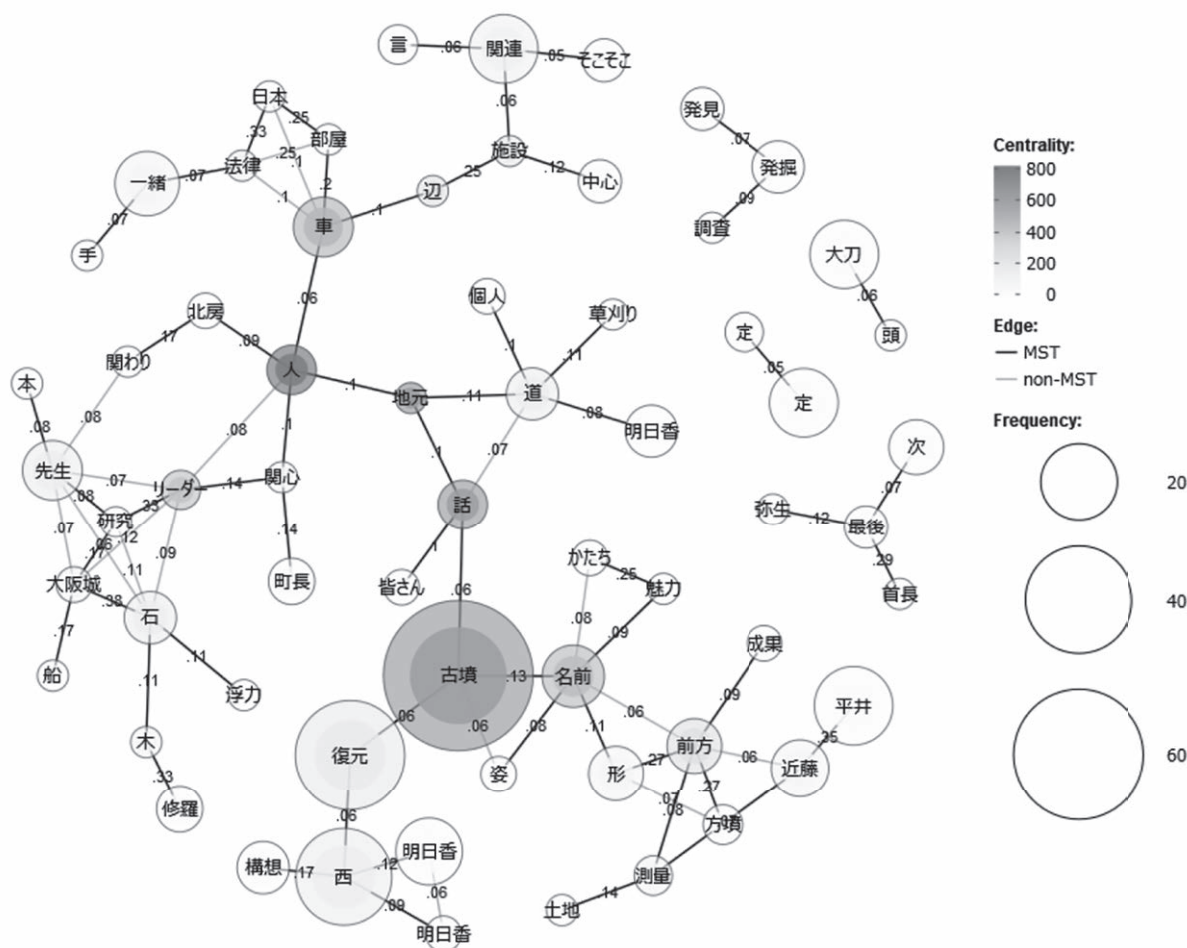
最後に、古墳の共起ネットワークを見てみよう。この共起ネットワークでは、「古墳」が最も高い中心性を持ち、「復元」「名前」「前方」「方墳」「測量」「石」「西」などの語と結びつきながら構造を形成している。ここでは、食や祭礼のような生活実践ではなく、形態や構造、位置関係といった対象の客観的特徴に関わる語が多く、古墳が「物」として把握されている傾向が強い。また「人」「話」「地元」「道」などの語も一定の接続を持つが、それらは中心というより、古墳をめぐる説明や理解の文脈に位置づいている。さらに「発掘」「調査」「発見」といった調査語は独立した小クラスターを形成し、学術的視点が別系統で存在していることも特徴的である。

これは、先の郷土料理の共起が生活経験や共有の場を中心に編まれていたのとは対照的である。郷土料理では「関係」「一緒」「季節」などが核となり、関係性の網の目^{あみ}が前面に出ていた。また寺社の共起では「神社」「寺」と「人」「行事」が結びつき、信仰が人間関係の中で語られていた。さらに行事の共起では「話」「関係」「祭り」が中心となり、語りと実践が構造を形づくっていた。

それに対し古墳の共起ネットワークでは、関係や行為よりも対象の形態・名称・復元といった記述的

語彙が目立つ。つまり古墳は「関係を媒介する装置」としてよりも、「説明される対象」として位置づけられている。生活的ネットワークというより、認識的ネットワークが形成されていると言えるだろう。地域の中に存在してはいるが、まだ生活や感情と強く連結しているとは言い難い。この違いは、古墳が制度的・学術的価値として把握されやすく、経験や共有の文脈に十分接続されていないことを示唆している。

ではなぜ真庭市は、CKSCHと顕彰する会のメンバー、振興局、市教委で話し合いの機会をつくり、平成29年11月に講演会を実施し、さらにこの講座を開設して、郷育モデルとしての“北房モデル”を実践的に設計させようとしているのか、という点に疑問がわく。つまり、古墳はそのほかの有形・無形の文化財よりも、「関係を媒介する装置」として弱いことが明らかになっているのに、なぜ、関係構造がより明確な行事や寺・神社や郷土料理よりも地域創生の鍵にしようとするのか、という問題である。旧北房町時代、約30年近く前に古墳の里を整備する計画を立て、現在も顕彰する会が奮闘している背景とは何なのか。



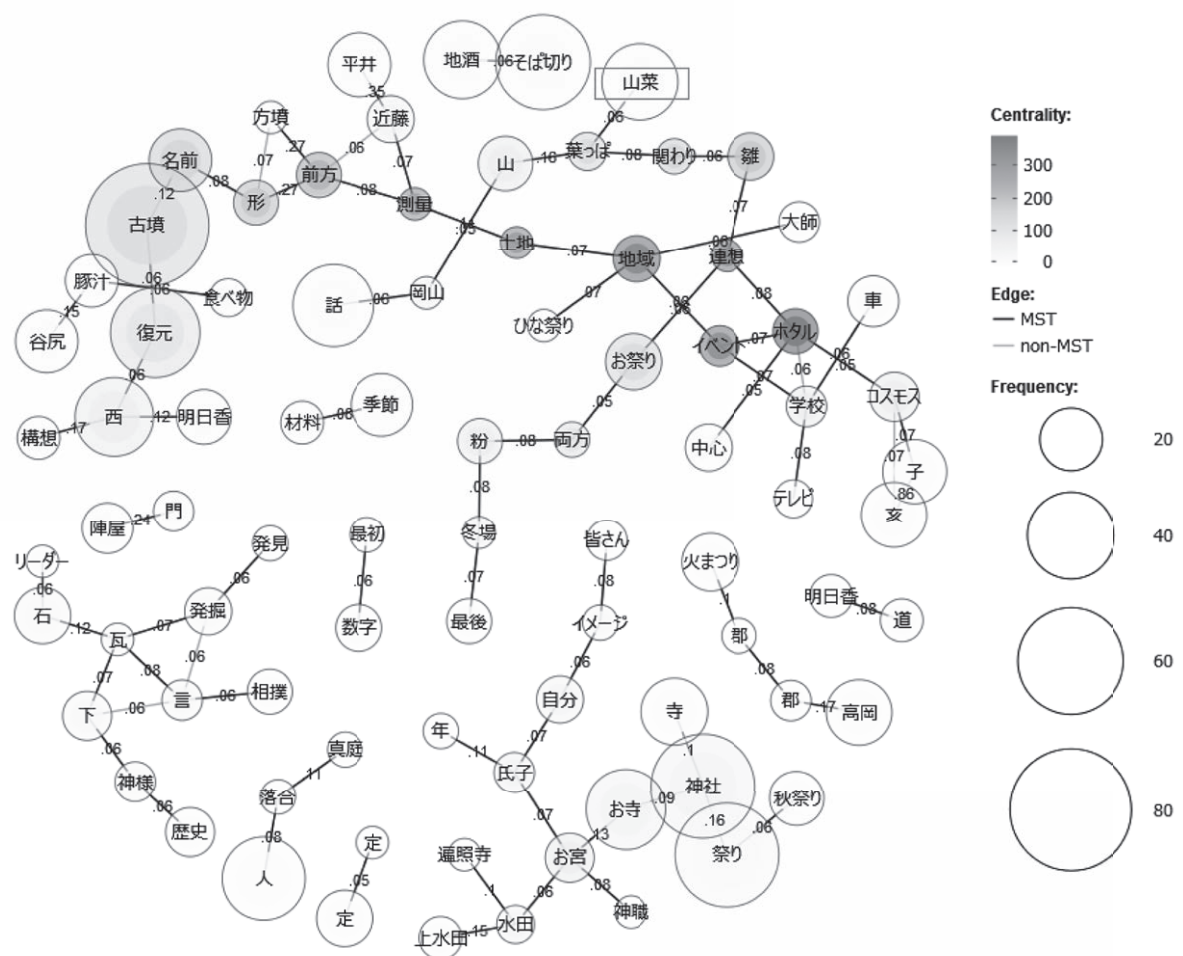
古墳班の会話の構造

それを知るために、マインドマップの演習中に会話されたすべての内容を同じように共起分析した結果を見てみよう。

下図は4つの班それぞれの会話を統合した共起ネットワークである。そのため、個別分析で見えた特徴が一つの空間に重ね合わされている。まず目につくのは、「古墳」と「地域」という二つの大きな重心である。しかし両者の性格は異なる。「古墳」は「復元」「形」「前方」「測量」「西」などと結びつき、対象の構造や形態を説明する語彙によって囲まれている。ここでは古墳は、観察・記述・復元の対象として語られている。一方で「地域」は中央に位置し、「連想」「ホテル」「イベント」「お祭り」「学校」など生活や経験に関わる語を結びつけるハブとなっている。つまり本図には、「対象中心のネットワーク」と「関係中心のネットワーク」という二重構造が存在している。

さらに、郷土料理班の「山菜」「地酒」、寺社班の「神社」「祭り」「お寺」、行事班の「ホテル」「学校」、古墳班の「古墳」「復元」といった語が、それぞれ比較的まとまりを保ちながら配置されている点も重要である。これは、四つの世界観が完全に融合しているというより、「並置」されている段階にあることを示す。個別分析で確認した、生活中心型、信仰中心型、語り中心型、対象中心型という性格が、そのまま残っているのである。

とはいえ、完全に分断されているわけではない。「地域」「連想」「話」といった語が中間に位置し、班ごとの塊をゆるやかにつないでいる。これは、資源や話題はすでに豊富に存在しているものの、そ

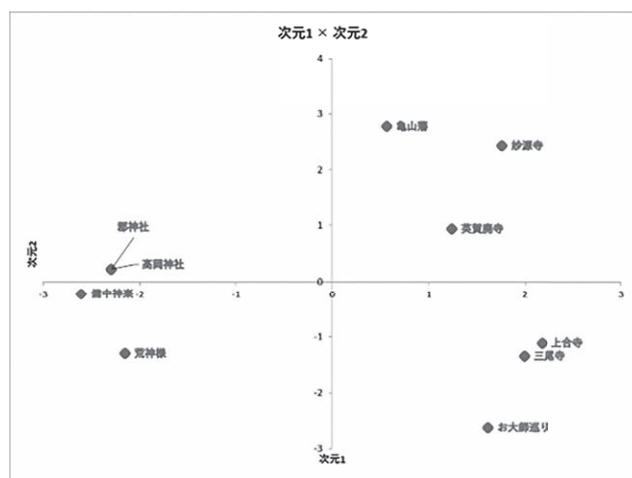


すべての会話の構造

れらを一本の物語として構造化する段階には至っていないことを意味する。言い換えれば、「点」と「面」は形成されつつあるが、それらを貫く「線」がまだ弱い。特に古墳は生活的ネットワークとの接続が相対的に弱く、歴史資源が地域の経験世界に十分編み込まれていない様子がうかがえる。これは課題であると同時に可能性でもある。古墳を行事や学校、祭りといった生活語と結び直すことができれば、対象は関係へと転換するだろう。

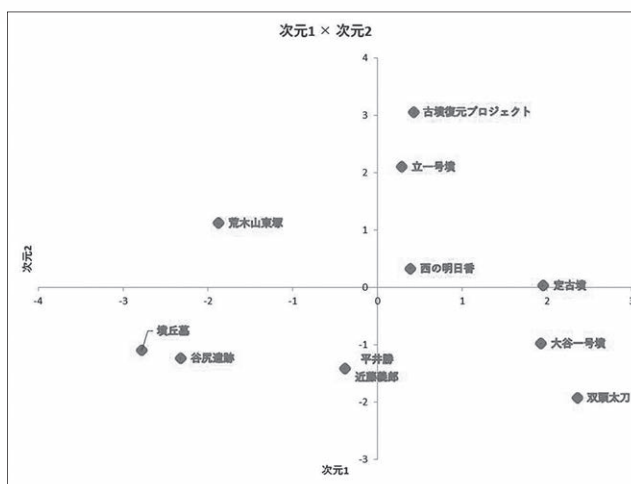
もう一つ、本図が示しているのは、地域が多声的であるという事実である。いくつもの語りのクラスターが存在している。今後なすべきは、それらの間に橋を架けることであり、橋をつくるのは、語と語の理由を明確にする言語化の作業といえる。地域はすでに豊かであり、その構造を意識的に編み直せるかどうかは鍵といえる。そのようにこの結果を読むとすれば、その鍵として、会話の中心概念であるにもかかわらず、まだ「関係中心のネットワーク」になりきっていない“古墳”こそが、郷育の中核的課題であり、それを「関係中心のネットワーク」に組み込むことが、喫緊の「意味を持つ時空」への転換に重要な対象であると理解できる。この講座で何を対象とすべきかが明確になっている。

では次に、受講生の宿題だった、相互の対象間の相対距離を評価する。宿題では、さらにその距離を5段階評価するように指示した。例えば、古墳班の付箋間の相対距離は上図のようになっており、その



寺・神社班の多次元尺度構成結果

古墳	谷灰遺跡	平井跡 近藤義郎	西の明日香	墳丘墓	定古墳	大谷一号墳	荒木山東塚	立一号墳	双頭太刀	古墳復元プロジェクト
谷灰遺跡										
平井跡 近藤義郎	2									
西の明日香	3	1								
墳丘墓	1	2	2							
定古墳	4	4	1	5						
大谷一号墳	4	1	1	5	1					
荒木山東塚	1	2	1	2	4	4				
立一号墳	5	1	1	5	4	4	3			
双頭太刀	5	1	1	5	2	1	5	5		
古墳復元プロジェクト	5	5	1	5	3	4	1	2	5	



古墳班の示す付箋間の距離と多次元尺度構成結果

非類似度行列を多次元尺度構成法（MDS）で可視化¹¹すると、古墳班では複数の話題が一つの概念的中心「西の明日香」へと収束する傾向が見られる。

一方、他の班では核となる概念が分散し、単構造のまま並列している。これは地域誌の形成において、核対象の有無が決定的であることを示す。つまり、次元1×次元2の（0, 0）に近い場所になにもない、ということである。例えば、郷土料理も地域知を重ねる核が存在しない。従って、郷土料理としての話題は孤立的になる。孤立した資源は観光資源としても持続し

11 ものどうしが“どれくらい似ていないか（違っていか）”を数字で表すということ

にくい。例えば「ホテル祭りで町おこし」「サバ寿司をお土産に」といった発想は、単一資源の前面化に過ぎない。資源を接続する共通知がなければ、持続可能な構造にはならない。

この結果は、先の共起分析の結果と相反するわけではなく、明確に関連している。その解は極めて明瞭で、郷土料理、寺・神社、行事の中心には、対象ではなく“人がいる”からである。だからこそ、中心に対象や概念が不要なのだ。

先の分析とこの分析を合わせれば明確だろう。古墳という対象を「西の明日香」という「概念」で「関係中心のネットワーク」に組み込む郷育、言い換えればそれを“語る人のネットワーク”が具現化すれば、多くのふるさとの文化資源は構造化され、持続可能なレジリエンスの保証になるのである。

文化資源学とは、こうした共通知を探索し、構造化する学問と位置づけられる。いわば、文化資源学は、新たな学問領域というより、新たな態度である。地域知を計測し、構造化し、再利用可能にする態度である。文化遺産は保存対象ではなく、計測可能で再編可能な社会装置である。共通知を見出し、連結を可視化し、データとして活用する。そのとき初めて、地域は自らの知を資源として扱えるようになる。真庭を郷育のメッカにするとは、文化財が多い場所にあることではない。地域知を構造化し、再利用し、未来へ接続できる場所にあることである。文化資源学とは、そのための実践理論なのである。

第 5 回（平成30年11月10日）：現地調査の作業内容

第 6 回（平成31年 1 月13日）：私たちが歴史、私たちが地域

第 5 回の講座の主題は、“プロジェクトA”（荒木山東塚古墳の測量と物理探査）に関する現地での作業内容の概説である。荒木山古墳におけるプロジェクトAは、受講生の実習の場として、右のような作業を、平成30年11月25日～30日の 6 日間実践した。

ここでは、その結果を報告した第 6 回の講座の内容と併せて整理する。詳細は真庭市教育委員会編『荒木山：真庭市史跡「荒木山西塚・東塚古墳」測量・探査調査報告』真庭市教育委員会〈真庭市埋蔵文化財調査報告；9〉、2021年 3 月で既に報告しているため、そちらを参照されたい（概要は資料 8 参照）。

講座では、測量調査機器（光波測距儀、レーザー距離計、SLAM 測量機）各機器の原理、利用説明、調査方法説明、地中物理探査（レーザー、電気、磁気）の原理および利用説明、調査方法説明、ミニドローン（100g以下）の操作説明およびSfM(Structure from Motion) 写真測量の方法説明、3Dスキャナおよびプリンターの原理、利用説明を実施した。古墳測量と探査を目的としたプロジェクト形実習のため、古墳への基準点移動、古墳の

	内容
環境整備	古墳周辺の雑木・下草除去
測量調査	3次元測量
	通常の測量
探査調査	レーザー探査
	電気探査
	磁気探査
体験	ミニドローン体験
	3Dプリンター体験

主軸およびグリッド設定と探査軸設定、SLAMによる 3 次元計測データ統合と等高線図描出、探査範囲の設定と探査機器調整などを講義、現地で実習した（報道記事 1、2）。

なお、第 6 回講座では受講生に楽位（楽士）の受講式もおこなわれた。



第6回講座 楽位授与式

(4) 令和元年度「第Ⅱ期 まに大付属ふるさと研究所」

昨年度の講座では、前述した考え方の1)～3) (P10参照) について文化資源学の実践をおこなった。本年度はそれに引き続き、4) 可視化は資源化につながる、5) 資源は経営しなければ社会化されない、を実践する。特に、講座では「北房ふるさとセンター」(岡山県真庭市下皆部623-1) の常設展示の改修実習を通じて、北房地域の古墳を対象に、「西の明日香」という「概念」で「関係中心のネットワーク」に組み込む郷育、それを“語る人のネットワーク”を形成するための可視化や資源化、その資源の経営を通じた社会化を実現することを目指した(報道記事3)。

第7回(令和元年7月27日):文化遺産を社会資源に変える錬金術 文化資源経営という考え方

今回の主題は、文化遺産を社会資源へと転換するための方法論を学ぶことである。昨年度までの講義で確認してきたように、文化遺産は行政によって指定される文化財とは明確に異なり、文化財は物件、それに対し文化遺産は地域によって創造される意味である。地域創生の核は文化財そのものではなく、文化遺産を生み出す地域の主体性といえる。つまり、文化遺産は作ることができる。だが、遺産を作るだけでは社会資源にはならない。発掘調査を行い、報告書を作成し、展示を整備しても、それが地域の「知」として共有されなければ遺産にはならない。地域の「知」として“語られる”鍵は、地域の人々の生活や記憶の中にこそ、物件を超えた物語が存在するのであり、それが“決定的に欠落”しているのが、この地域の古墳であることも、昨年度の講座で明らかになった。

ここで重要になるのが5W1H。何を伝えるのか、誰に伝えるのか、いつ伝えるのか、どこで伝えるのか、なぜ伝えるのか、どうやって伝えるのか。この問いは単なる広報の技術ではなく、文化資源を社会の中で機能させるための設計図であり、実はこれが文化経営学の出発点でもある。文化経営学とは、公共政策としての文化政策を現実社会の中で実践するための原理と方法論のことをさす。非常に難しくそうではあるが、北房という具体的な地域で、文化資源創生を実践すること＝文化経営といえる。行政の政策ではなく、学者の研究でもない。地域の人が主体となっておこなう経営である。

昨年度の分析では、共通知という概念を通じて、地域知を重ねる核の有無を検討した。古墳に関しては多重構造の知識が存在したが、「関係中心のネットワーク」が弱いことが明らかになった。資源はあるが、構造が弱い。構造が弱い資源は、経営できない。経営とは、資源を組み合わせ、物語を設計し、持続的な価値へと転換する行為である。その意味で、今期実習をお願いする「北房ふるさとセンター」(P32写真参照) は、その経営の実験場と位置づけられるだろう。展示は単なる情報提示ではなくストーリーそ



第7回講座 ふるさとセンター実習風景

のものだからである。通常、博物館では、常設展、企画展、特別展はそれぞれ異なる経営戦略を持つ。同じ資料でも、異なる物語を与えることで別の価値を生むことができる。ストーリーは一つではない。文化遺産が創造されるものであるならば、ストーリーもまた創造されるものである。

ただし創造は自由放任ではない。経営である以上、主体と責任が明確に必要となる。経営母体が地域でなければ、文化資源は他者に消費される対象となる。地域が経営するとは、地域がストーリーを設計するということである。また、もう一つ注意する点は、珍しい対象、大きい対象など、すでに強い物語性をまもってしまった遺跡は、別の物語を受け入れにくい。日本一の高い山、それ

はそれ以外の物語性をおびにくい。北房について言えば、あまりに“ホテル”や“大谷1号墳”を固定すると、文化経営は逆に難しくなる。物語を固定することは安定を生む（行政はこれを求める）が、柔軟性を失う（社会の活性は下がる）。文化資源経営とは、物語を固定せず、更新可能に保つことでもある。

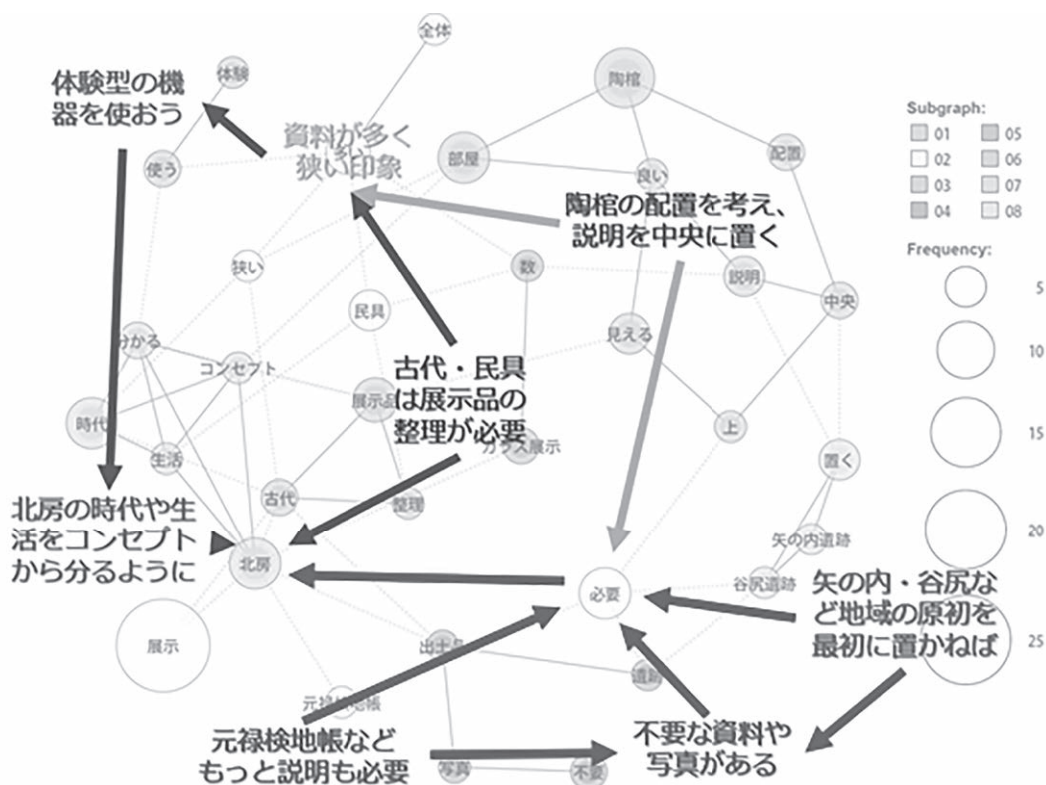
そこでグループワークでは、平面図に自由に情報を書き込んでもらう。何があるのか、どのように感じるのか、どうすべきかを遠慮なく書き込む。重要なのは情報量である。情報の多さは構造化の可能性を広げる。次回はそれを整理し、ストーリーへと編み直す。

真庭、北房を郷育のメッカにすると、文化財が多い場所にすることではない。文化資源を自ら設計し、自ら経営し、自ら更新できる地域にすることである。文化遺産を社会資源に変える錬金術とは、物を金に変えることではない。意味を価値に変えることなのだ。

第8回（令和元年8月11日）：文化遺産を生かし地域を活かす方法を 文化遺産をつなげるストーリー

今回の講義では、その文化遺産を生かした文化経営を実際の展示空間でどのように実装するかを検討する。前回のグループワークでは、北房ふるさとセンターの展示について多くの意見が出された。資料が多く狭い印象であること、時代や生活を貫くコンセプトが不明瞭であること、陶棺の配置が説明不足であること、原初の遺跡の位置づけが曖昧であることなどである。これらの意見は単なる感想ではない。展示が「物の集合」にとどまり、「物語の構造」になっていないことを示している。

北房ふるさとセンターの展示空間には3つの課題が浮かび上がる。第一にコンセプトの不在である。古代から民俗までの資料が並ぶが、何を伝える場なのか定まっていない。第二に資料の選択と整理の問題である。重要な資料とそうでない資料が同じ重みで並んでいる。そして、第三に配置と説明の不整合である。中心に置くべきものが周縁にあり、物語が読み取れない。この状況は、明確に文化経営が行われていない状態といえる。経営とは選択でもある。何を見せ、何を引き、何を中心に据えるかを決める行為であり、展示は情報の蓄積ではない。明らかに受益対象のための編集であるべきである。



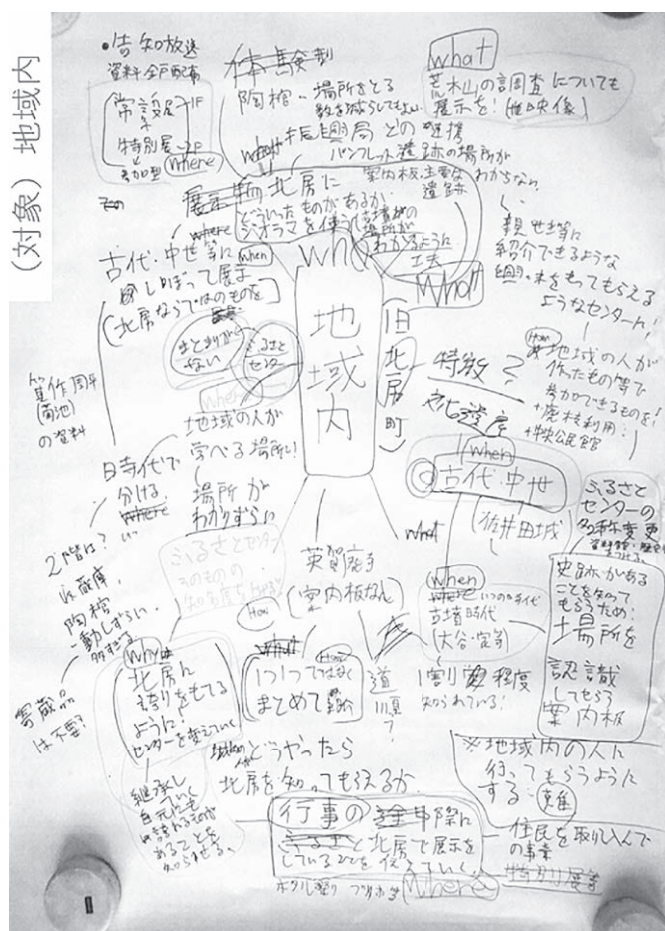
受講生の問題意識メモの共起分析結果と3つの大きな課題の整理

ここで再び5W1Hが重要になる。何を伝えるのか。誰に伝えるのか。いつ、どこで、なぜ、どうやって伝えるのか。この問いを曖昧にしたまま展示を構成すれば、その場所は高速道路サービスエリアの土産物コーナーと変わらなくなる。そこでは「何か」が並び、「誰か」が買い、「どこでも通用する」記号が置かれる。明確なのは、そこには対象固有の物語がないことである。北房ふるさとセンターの現状が、実はこの状態に近づいていないかという問いは厳しいが重要な視点だ。集客だけが目的なら、珍品や優品の文化財は売れ筋商品になるだろう。だが地域の展示施設は商業施設ではない。全国の博物館や美術館でも同様で、そこに珍品や優品を並べようとする事は、高速道路のサービスエリアの再現に過ぎない。そうすると、見える未来は決まっていて、新商品、新開発が不可欠になり、当然、より珍しい文化財、よりきれいな文化財、となる。北房での文化経営は、あくまで売上ではなく、地域の自己理解を深めることが目的である。売れるかどうかではなく、何を語れるかが基準である。

参考となる事例として、「唐古・鍵考古学ミュージアム」(奈良県磯城郡田原本町)では来館者の位置を確認できる展示設計がなされている。遺物には必ず機能イメージが付され、イメージから遺物へと視線が誘導される。重要な資料は確認可能な位置にあり、振り返ると全体構造が見渡せる。ここでは物が並んでいるのではなく、経験が設計されている。また、「網野町郷土資料館」(京都府京丹後市)のように廃校を活用した展示では、建物の記憶そのものが物語を支える。展示物は空間と連動し、地域の時間軸を感じさせる。少なくとも、物語の骨格は存在している。

今期実習中の展示空間の再設計は、模様替えではなく、明確な地域知の再編と理解したい。例えば、民具を外と内で分けるとすれば、外は農作業、内は家族団らんといった生活構造が浮かび上がる。では北房の農作業の特徴は何か。家族団らんの中でこの地域に特有のものは何か。観光客に生活を伝える理由は何か。地域の歴史を知ってもらう必要はなぜあるのか。これらの問いに答える過程で、地域詞は地域誌へと編み直される。

講義後の実習では、班に分かれて、5W1Hを基軸とした経営に関するブレインストーミングを実施した。



ある班のブレインストーミングの結果

第9回(令和元年9月22日):文化遺産の魅せ方1 展示計画を具体化していきましょう

今回の主題は、展示という具体的な空間の中で、文化資源をどのように「魅せるか」を考えることである。前回までの講義で、文化遺産を社会資源へと転換するためには経営が必要であり、その核心は5W1Hに基づくストーリー設計であることを確認した。今回はそのストーリーを空間に落とし込む。

展示は「何を置くか」だけでは成立しない。何を、どのように、どの順序で、どの高さで、どの距離で見せるかが重要である。展示とは情報の配置ではなく、経験の設計である。観覧者の身体の動き、視

線の高さ、立ち止まる位置、振り返る瞬間を想定して初めて、展示は意味を持つ。

前回整理した5W1Hを具体化すると、三つの軸が見えてくる。第一に地元に向けた展示である。北房らしさはなぜ古墳と中世にあるのか。その知の継承がなぜ誇りにつながるのか。これを説明できなければ、地域住民を巻き込むことはできない。学術的成果を民生レベルに翻訳する方法が必要で、展示はその翻訳装置である必要がある。

第二に外部に向けた展示である。歴史以外の北房と歴史との接続が不明確であれば、来訪者にとっては知らない場所の過去の断片に過ぎない。現在の北房を、交通の要衝としての歴史から説明できるか。イベントに参加する人々と歴史資源との関係を提示できるか。外部に対する展示は、地域内部の知を再構成し、文脈を与える作業である。

第三に子供に向けた展示である。地域史は学校でも扱われる。しかし展示施設が学校と同じ内容であれば意味がない。体験型展示によって差別化を図る。子供が外部の人に説明したくなるような経験を設計できるか、先生ではない「誰か」が関わる体験の組織が必要になるだろう。

これらの軸を実現する展示企画を具体化する際に、まず考えるべきは、エントランスの位置づけだろう。来館者はどこから入り、どこへ向かい、何を最初に見るのか。動線は物語の骨格であり、動線が曖昧であれば、ストーリーは断片化する。逆に、動線が明確であれば、展示物は自然に意味を持つ。あわせて、目線もまた重要である。子供と大人では視線の高さが異なる。展示物をどの高さに配置するかは、誰に語りかけるかの選択でもある。壁面の使い方、中央配置か周辺配置か、振り返ったときに何が見えるか。展示は空間の編集である。

前回、唐古・鍵考古学ミュージアムを例に挙げ、その展示が素晴らしいと評価した理由はここにある。動線が整理され、遺物の機能がイメージとして提示され、全体を振り返ることができる構造になっている。重要なのは最新技術や珍品や優品ではない。観覧者の経験が設計されている点である。一般的な博物館学の教科書では、展示の計画において、コンセプトに注目する。部屋ごとのテーマを分けるか、時代軸で貫くか、生活軸で貫くか。どの軸を採用するかによって、地域誌の姿は変わる。コンセプトが定まらなければ、展示は雑然とした倉庫になる。また、体験型展示にも多様な形式がある。触れる展示、操作する展示、考えさせる展示、語らせる展示。体験とは単に触ることではなく、体験を通じて自分の中で再構成される経験である。最初の講義で述べたように、デューイの教育論が再び重要になる。経験は再構成されてこそ意味を持つ、まさに展示は学習装置である。

グループワークでエントランスホールを設計するという課題とする。文化資源経営の核心部分。動線をどう設計するか。目線をどこに誘導するか。体験をどこに配置するか。最終的に何をどのように置くか。この四点を具体化することが、文化資源を社会資源へと転換する第一歩と考えて作業を進める。展示は動的な経験の連鎖であり、ストーリーは言葉だけで語られるのではなく、空間で語られる。文化遺産は展示されることによって固定されるのではない。展示によって再解釈され、再創造される。

第10回（令和元年10月20日）：文化遺産の魅せ方 2 展示計画を具体化していきましょう

今回の主題は、実際に受講生が宿題として提出したストーリー案、展示案について、受講生全員で吟味検討し、実際の展示計画を実践に移す準備を整えることである。下半期、プロジェクトA2との日程の重複もあるため、各受講生のストーリー案と展示案（＋展示実習前のエントランス展示記録）をここでは整理してまとめておく。

ふるさとセンターでの展示ストーリー私案（宿題の参考にと、津村先生自ら作成したものです）

参考資料

展示計画 (案)	案の① 北房の歴史を知ろう	案の② 北房の暮らしを知る	案の③ 北房と古墳	案の④ 民俗・習俗展示	案の⑤ 旧学区の掘り起こし
何を	弥生時代の遺跡から現代までの北房地域が分かるような出土資料を中心に	一般の民具を生活シーンにあわせて（食事・農作業など）	北房地域の考古学遺跡 ●●遺跡と●●古墳 ※●●は別の企画展示	大師巡りや様々な祭りを中心に取り上げる	各地区・学区の我が町自慢、産品を一同に集めて展示する
誰に 誰を	地域の子供たちと若者を中心に	地域の若者世代に	観光客や地域外の人々のために	地域の人、地域外の人 (魅力はあるか?)	地域内の他の地区の人々への自慢、誇り、競争を促せるように
どこで? どこを?	定期的にふるさとセンターに集まれる機会を作って	出来れば祭りやイベントシーズンに合わせる形で	ふるさとセンターと現地の遺跡とを行き来できる方法を作る（レンタサイクルなど）	実際の神社や仏閣の散策ツアーとふるさとセンターを利用する	ふるさとセンターで比べ合う
なぜ?	通史を知ることから、関心のある時代や歴史へ興味を持ってもらえるように	父母・祖父母の暮らしと現在の暮らしとの接続、関係性を明確に知って、そこから新しい生活を考えて欲しい	他の地域にない特殊な歴史的な経緯を持っている地域であることを知ってもらうため	そうした民俗・習俗を通じて、伝統的な生活の変化を示すことで、ふるさとを知ることにつながる	他の地域・地区に負けない魅力、素晴らしさをどれだけ客観的に整理できるかが勝負になる
いつ? いつの?	ふるさとセンターでの講演会や講習会を定期的に開催	できれば、経験者が残っている近現代の歴史を中心に扱う	古墳祭り?のようなイベントを考えることも大事	祭りの時期（ただし、例えば通年で申し込むような仕掛けを考えた）	そういう会を行う日を設けても良いし、シンポジウムを開いても良い
どうやって?	①歴史資料・出土品の陳列 ②パネルによる補足 ③触れる展示を創る	実際に収蔵している民具を動かし、体験する展示方法を考える	実際のツアーを計画しこれを実践する中核をふるさとセンターに設置する	①個別に解説とパネルを設置する。 ②民俗コンダクターを設置して、解説だけでなく来訪時のお世話も行いながらともに学ぶ体系をつくる	競争することで、より多くの文化資源の掘り起こしと物語を創造できる

ストーリーを編む展示計画を作成する（津村例）

第11回～第13回：北房ふるさとセンターの展示実施

令和元年度下半期（1月12日、2月12日、2月22日）は、実際に北房ふるさとセンターでの展示作業を実施した。併せて収蔵庫の整備なども実施している。展示内容は「西の明日香村 七世紀の輝き」に決定し、パネル準備なども受講生が実施した。

講座の展示実習では、展示の現状記録と収蔵庫整理を実施した。ストーリーを可視化する資源としての資料の現状の整備が急務であったため、展示内容を整理する一方で、収蔵庫確認作業を実施した。作業は各班に分かれ、計14の収蔵棚の収蔵資料を記録し、各資料内容の詳細を台帳化した。この作業を通じて、「西の明日香村 七世紀の輝き」展示以降の展示替えに対応すべく資料の再配置を実施し、ストーリーに重要な資料の準備などを進めた。

併せて、「西の明日香村 七世紀の輝き」展示案で出された“体験展示”ブースである、大谷1号墳石室模型の制作方法も検討され、発砲スチロールで石室石材を再現すること、石室の学術的体験を目的に、レプリカは石室中軸断面で横方向から石室内部を体験できるブースとすること、ブースには、実物の復元された須恵質陶棺を配置し、石室の規模感も含め入室して体感できるものとする、などを決定した（報道記事4）。



エントランス展示・パネル設置作業



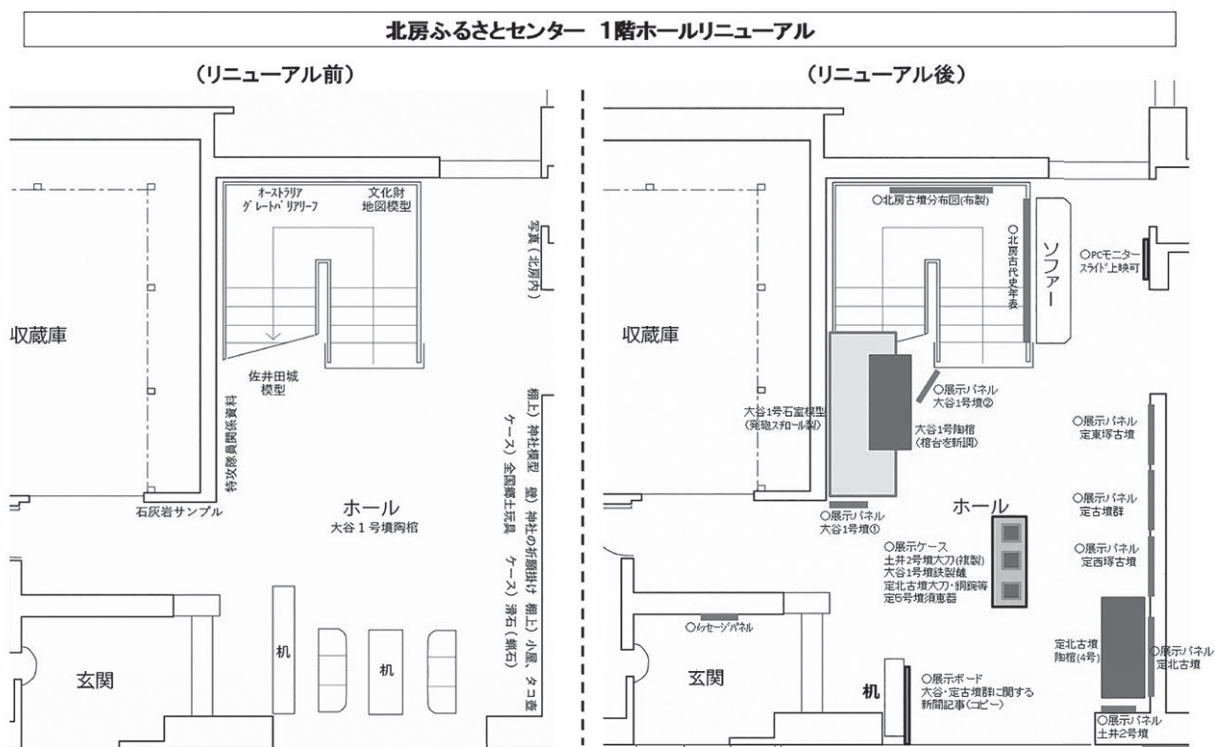
収蔵庫整理作業



エントランス展示・体験ブース構築作業

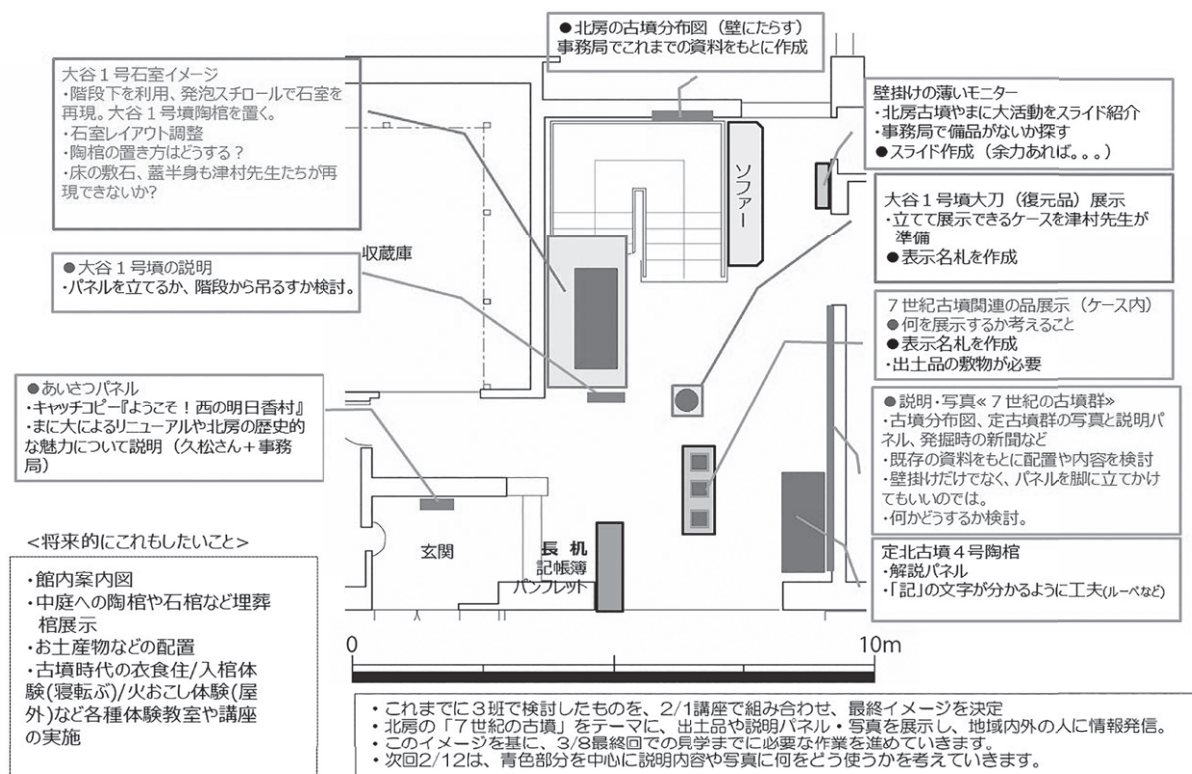


完成したエントランス展示



- ・「ようこそ！西の明日香村」をコンセプトに、北房の文化遺産の代表である「7世紀の飛鳥古墳」をテーマに設定
- ・見学者が館内展示の見学で終わらず、次に現地へ訪問したくなるきっかけになるよう工夫する
- ・館所蔵の実物資料だけでなく、石室模型や当時の新聞記事や映像を加え、親しみやすい展示とする
- ・あわせて北房全体の古墳や古代史が理解しやすいように地図や年表を階段に掲示する

ふるさとセンターホール リニューアルイメージとやることの内容



決定したエントランス展示内容と展示配置原案

プロジェクトA2 荒木山古墳調査実習（西塚）

令和元年度も、前年度に引き続いて荒木山の古墳調査の実習を講座で実施した。詳細は、P17で紹介した市教委の報告書を参照されたい。

講座では、プロジェクトAと同様、測量調査機器（光波測距儀、レーザー距離計、SLAM測量機）各機器の原理、利用説明、調査方法説明、地中物理探査（レーダー、電気、磁気）の原理および利用説明、調査方法説明を実施した。本年度は荒木山西塚古墳の探査調査を中心とした（調査概要は資料8参照）。

(5) 令和2年度「第Ⅲ期 まに大付属ふるさと研究所」

第Ⅰ期は前述した考え方の1)～3)（P10参照）、第Ⅱ期はそれに引き続き、4) 可視化は資源化につながる、5) 資源は経営しなければ社会化されない、を实践した。具体的に北房ふるさとセンターのエントランス展示を実施、収蔵庫整備などを通じて、定期的に地域の持つ資源を異なったストーリーで社会化する文化経営実践の準備を進めた。最終年度の第Ⅲ期は残された課題である、6) 経営は制度と組織を必要とする、7) 制度の背後には歴史観がある、8) 観光拡張主義では地方は救えない、を講座として行い、最終目標である、9) 文化の意味構造の再編、を目指す。また、2カ年の荒木山東塚・西塚でのプロジェクトA、A2を通じた測量・探査調査の経験を、10) 活用を伴わない調査は倫理的に許されないという、リテラシーの確立と実践につなげていく。

第14回（令和2年12月6日）：文化財保護法と博物館法 何をしてよくて何をしちゃダメ？

今回の主題は、いよいよ調査や展示が現実となる中で、地域住民が「何をしてよくて、何をしてはいけないのか」を明確に理解することである。これまでの講義で、文化遺産は地域が創造するものであり、知や資源を連結し、分析により可視化し、展示を通じて資源化し、その場所を経営することで社会資源になると述べ、実践してきた。しかし、そうした文化資源学における文化経営学の“学問的”理論や方法論、地域の熱量や実践だけでは、我々が相手にしている物件は“文化財”にはならないし、その正当性も揺らいでいく。制度を知らない熱意や理念は空回りし、場合により非合法化してしまう。

三年間の活動によって、結果として「まに大」は人を動かした。地域で文化財を調査、文化遺産を創造する実績を積み、学术界やメディアの注目を集め、行政を動かし、展示を自らの手で企画・実践した。これを持続可能な形へ移行するためには、文化財保護法と博物館法という法制度を正面から理解する必要がある。

文化財保護法の一丁目一番地であるこの法律の目的は「文化財を保存し、且つ活用を図り、国民の文化的向上に資すること」と定められている。私たち研究者や考古学、古代史愛好家がとすると忘れがちなのは、この「且つ活用」である。30年近く前、私や市教委の担当者は当時学生で、中津井地区の、^{さだ}定東塚古墳・西塚古墳の学術調査とその後の保存・整備を担ってきたが、果たして“活用されているか”と問われたとき、活用に失敗していることは、初年度の「知の構造」「関係を媒介する装置」が未成熟であることから“明確”だろう。明らかな“失敗”であり、ある意味違法状態でもあるとも言える。

文化財保護法の法理は、保存のみが目的ではない。保存と活用は不可分なのだが、発掘調査や記録保存の手引きとなる文化庁文化財部記念物課監修『定本 発掘調査のてびき』同成社、2016年は存在しても、活用の手引きは“体系的”に示されていない。文化庁から示されるのは、『NPO等による文化財建造物管理活用の手引き（手引書）』や、事例事業紹介である。文化財行政は長らく保存中心であったため、この非対称性は必然でもある。全国の大学、考古学・文化財関係研究室で、「活用に関する研究」が殆どなく、活用が観光学や行政学の研究室で議論されている現状からもよくわかる。

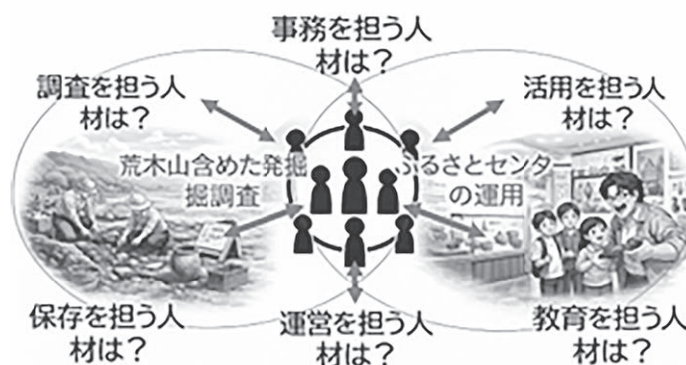
文化財保護法第二条は文化財の定義を示す。有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物、文化的景観、伝統的建造物群。注意しておくべきは、対象が「わが国」にとって価値があるかどうかという枠組みであり、これまで講義してきた世界遺産の理念とも法理上は無関係である。また同時に、文化財保護法が国民的財産の枠組みであることを考えれば、多様性に富む地域主体の概念とも必ずしも一致しない。

第三条と第四条はさらに重要で、政府と地方公共団体が保存に努める義務を持つことを定める一方、国民はこれに協力するとされる。文化財の所有者は保存し、できるだけ公開に努める義務を持つ。講座で、しつこく地域の文化を「文化財ではなく文化遺産と言いつづけている」のは、この法構造があるからである。文化財は法制度の枠内、文化遺産はその外側にある主体性の概念であり、地域の「関係を媒介する装置」なのである。

次に発掘についてであるが、埋蔵文化財の発掘は第九十二条により届け出が必要であり、文化庁長官の指示や中止命令があり得る。第九十三条は周知の埋蔵文化財包蔵地での工事に六十日前の届け出を義務付ける。第百一条以降は出土品の扱いを規定する。発掘は自由な行為ではなく、法の枠組みの中で規定される。しかし、地域は何もできないのかというと、実はそうではない。第六十条では登録有形文化財の管理責任者を選任できるとされ、第六十七条では所有者による公開が認められる。文化財保護法は地域そのものを排除しているのでは決してなく、むしろ適切な所有者と管理責任のできる地域主体を求めている。一般に、「発掘は行政か大学がやるもの」という通念は、法が主体を定めているのではなく、その主体に合致していると“解釈できる”というだけなのだ。法理と目的「保存し、且つ活用を図り、国民の文化的向上に資する」と“解釈”される主体が、現在の通念を形作っているものであり、その意味で、行政や大学、研究機関だから発掘できるのではない。

博物館法についても改めて理解をしておきたい。博物館法第一条は、博物館の設置および運営を通じて教育、学術、文化の発展に寄与することを目的としている。博物館とは資料を収集、保管、展示し、教育的配慮の下に一般公衆に供する機関である。文化財の活用の制度的枠組みが明示的に示される。だが、登録博物館の要件は厳しい。資料、学芸員、建物、年間150日以上の開館、現状で「北房ふるさとセンター」はこれに該当しない。せつかく講座でストーリーを編み、文化経営の実践を試みても、現状では登録博物館にはなり得ない。しかし博物館相当施設や博物館類似施設という柔軟な枠も存在する。重要なのは、制度を知り、どの位置に立つかを選択することで、法と制度を知らなければ、主体にはなれない。地域が主体となる、という言葉は抽象度が高く、具体的に落とし込もうとすると、たちまち身動きがとれなくなる。

さて、調査を担う人材は誰か。活用を担う人材は誰か。教育を担う人材は誰か。運営を担う人材は誰か。事務を担う人材は誰か。文化資源経営を文化財との関連で考えるとき、重要なのは理念だけでなく、持続を担保する組織だと考えられる。NPOか、一般社団法人か、株式会社か。どの形態がふさわしいのか。定款はどうするのか。年齢構成はどうするのか。SDGsをどう実装するのか。雇用を生み出せるのか。雇用がなければ人は定着しない。博物館があるだけで人が来る時代でもない。登録博物館は日本に600近くある。そのすべての地域での活用が地域主体でできていない現状を見れば、調査ができて博物館があれば地域が文化資源を中心に活性化されるわけではないことは自明だろ



地域の「関係を媒介する装置」としての主体

う。いわば、発掘調査や博物館は、地域創生の必要条件でも十分条件でもないのだろう。

文化遺産を生かすとは、法制度の中で主体を確立することといえる。文化財保護法を理解し、博物館法を理解し、その上で地域主体を立てるような、理念と制度を接続することができなければ、文化資源経営は持続しない。

遺産は創造される。地域は連結され可視化できる。可視化すれば共有でき資源化できる。資源は経営しなければ社会資源にならない。そして経営は、法制度の理解と組織設計なしには成立しない。今、講座で構築しようとしている真庭・北房モデルは、文化財行政のトップダウンと地域主体のボトムアップを接続する試みである。文化遺産を本気で扱うなら覚悟が必要で、理念だけではなく、制度を知り、主体を立て、責任を負うことができれば文化遺産は未来へと継承されるだろう。

第15回（令和2年1月24日）：発掘の先に何があるのか 調査・観光・マスツーリズム批判

今回は発掘調査の後について知る。特に、史跡整備や公園化などについて。全国には、多くの史跡公園があり、また遺跡の現地保存、今でも歴史を感じられるように“活用”されている事例が多くある。旧北房町時代、この北房地域も大谷1号墳の発掘を契機に「西の明日香」を掲げ、古墳の里としての整備計画も作られたりした。調査成果を社会化しなければ、文化遺産は学術成果にとどまる。展示を行い、公開し、身体化された知へと転換しなければ、地域資源にならないことは、この講座で学んだ。

ただ、ここで多くの地域がつまずく。発掘はできるが資源化が難しい。なぜ難しいのか。その理由を理解するために、日本における観光という概念を歴史的に捉えてみよう。

観光とは、ある場所に存在する実在の様態や動きを楽しむ行為と一般化できるだろう。近世日本の伊勢参りや潮湯治しおとうじは信仰や療養を目的とする移動であり、近代ヨーロッパのグランドツアーは教養の形成を目的とする移動であったが、観光の本質は日常を脱して「見ること」と「体験すること」にあった。その点は、現代観光も本質的には変わらない。旅行情報サービス「じゃらん」の2019年調査では、「観光地めぐり」「美味しい料理」「歴史を感じたい」「時間を共有したい」などが動機として挙げられる。仕事や信仰、教養形成が抜け落ちただけで、非日常を求める構造は近世・近代と大きな違いはない。

決定的な違いがあるとすれば、近代以降、観光地が「創出」されるようになったことである。京都の観光ガイドを見ればそれは明確で、明治期には、実は現在の主要観光地の多くは含まれていない。つまり、観光地としての持続を日常化するため、京都は、洛中から洛外へ非日常性を拡張し続けた。これをマスツーリズムの成立という。例えば、この北房の30年前の地域構想である、「西の明日香 古墳の里」、もし実行していれば、現在の北房は観光客にあふれていただろうか。答えは簡単でNOと断言できる。非日常が日常化すれば、その場で「見ること」と「体験すること」は“観光”ではなくなる。つまり、初見の人、外国の人たち、を呼び込んで非日常を“見せ”、“体験させ”なければ、観光を維持できなくなる。なぜ今日本がインバウンド需要に頼るのか、腑に落ちるのではないだろうか。

では、永続的に観光客で賑わい続ける場所には何があるのか、というと、その場で「見ること」と「体験すること」が、常に非日常であり続けることが鍵であり、例えば、毎年行く温泉宿、そこでの会話を思い浮かべればわかりやすい。「あら、お子さんもう5年生？」「大女将は今年で喜寿なんです」など、毎年異なる時空、が「居る人と来る人」で生み出されている。ということは、「西の明日香 古墳の里」が、「居る人と来る人」の「関係を媒介する装置」になれば、必然的に、非日常であり続けられることになる。先の京都の拡張戦略と比較すれば、地方が京都ではないことは明らかで、文化財や寺・神社を無限に拡張できない。実際、観光地開発は「新しい場所」を作り続ける産業システムであり、日本遺産などの国策もこの枠組みの中にある。テーマパークの盛衰も同様で、テーマやキャストの変更のない乗り物重視のパークなら、逆に乗り物の刷新を繰り返すほかになく、その資本とアイデアが尽きたパークから消滅し

ていくことになる。これは観光が、脱日常して「見ること」と「体験すること」が根幹にあるからと理解できる。

では地方はどうするべきか。答えは単純で、新しい場所を無限に生み出すことはできない以上、既に存在している資源の「魅せ方」「捉え方」「感じ方」「つながり」を再編するほかなく、その主体こそ、「関係を媒介する装置」を中心に形作られる人の連結が理想的な姿だろう。文化資源化の核心は、物の新規創出ではなく、地域の意味構造の再編である。発掘によって新たな遺物や遺構が見つかったとしても、それだけでは観光資源にはならない。どのように語るか、どの文脈に置くか、どの身体経験へと接続するかが重要である。

今、講座で実習している荒木山の古墳のような、古墳が「人造型観光消費財」になる事例は枚挙にいとまがないが、これまでの議論でわかるように、これは拡張主義の一環にすぎない。珍しい遺物、巨大な規模、新しい遺構、それらを探し求めて発掘し続けることは、前回話をした文化財保護法に明確に反する行為だろう。地方が持続可能な資源化を目指すなら、拡張ではなく深化が必要である。存在しているものの意味を掘り下げ、再構造化することが唯一の道である。

一般的な発掘ブームや発見ムーブ、メディアのお祭り騒ぎは誤りだろう。発掘の先に観光資源開発はなく、本当は地域の自己理解の再編があるべきだろう。遺跡発掘は物件の破壊だが、同時に遺産創造の契機でもある。破壊を経て記録されたデータは、意味構造へと編み直されなければならない。地方で文化資源を資源化する方法は一つしかない。既存資源の構造を再編集することである。新しい場所を作るのではなく、既存の場所を新しい意味で結び直すことである。



典型的な「人造型観光消費財」の姿

第16回（令和2年2月21日）：「月の輪」方式を知る 月の輪の背景と現在の違い

今回の主題は、講座でもメディアでもよく対比される、月の輪古墳との違いについてである。記録映画を見て、月の輪古墳という一つの遺跡を理解することではなく、歴史を誰が語るのか、そして地域が歴史にどう関わるのかを考える。私たちは単に方法や制度を知るだけでなく、歴史観そのものをそして現在との相違を整理しておく。

月の輪古墳は岡山県旧勝田郡飯岡村、大平山山頂付近に位置する五世紀前半の大型円墳で、^{ふまいし}埴輪列、造出し、^{ねんどかく}粘土槨といった特徴を持つ地域首長墓、古墳時代中期初頭の政治的構造を考える上で重要な遺跡である。月の輪古墳が注目される理由は、この規模や構造ではなく、発掘の背景にある「国民的歴史学運動」にある。戦後、日本の歴史学は皇国史観からの脱却を迫られた。戦前、古事記・日本書紀を中心とする天皇中心史観は、超国家主義的な歴史理解と結びついていた。戦後、それに対抗する形で、民主主義科学者協会歴史部会を中心としたマルクス主義的歴史観が広がり、石母田正や和島誠一らは、民衆の視点から歴史を再構成しようとした。登呂遺跡の発掘はその象徴であり、古代農耕社会の実像を示すことで、歴史の主役を為政者から民衆へと転換しようとした。

この運動の理論的基盤には唯物史観があった。弁証法的発展、アウフヘーベン^{しやう}（止揚）という概念によって、歴史は対立を止揚しながら進むとされた。皇国史観が国家中心の歴史観であったとすれば、唯物史

12 否定しながら同時に保存し、より高い段階へ発展させること

観は民衆中心の歴史観となった。月の輪古墳の発掘は、このような思想状況の中で実践された。地域の人々が発掘に参加し、歴史を自らのものとして理解しようとした。その試みは、歴史を民衆の手に取り戻す運動であった。しかし同時に、それは政治的運動とも接続していたため、イデオロギーの色彩を帯びざるを得なかった。

ここで私たちが学ぶべきことは二つある。第一に、歴史は語り手の立場によって構成されるという事実、第二に、その語り方がイデオロギーに回収される危険を持つという事実である。地域主体の発掘や歴史学運動は理想的に見えるが、思想的背景を無視すれば同じ過ちを繰り返す。では、どのような歴史観で地域の歴史を自分事として理解すれば良いのか。一般則に還元する歴史ではなく、個別性を尊重する地誌的視点が最も重要だろう。地域ごとに異なる止揚があり、異なる歴史的文脈がある。万世一系という一元的物語でもなく、全国一律の段階発展でもなく、地域の具体的実像を丁寧に描くことが重要である。

月の輪方式が示したのは、地域が主体となって歴史を語る可能性であった。しかしその後の歴史学運動の展開は、イデオロギーとの結びつきによって明らかに失速した。ここから学ぶべきは、地域主体を掲げるだけでは不十分で、思想的自覚がなければ、運動は別のイデオロギーに吸収されてしまう。私たちが目指す郷育とは、イデオロギーから自由であることではない。むしろ、歴史観の相対性を自覚した上で、地域の実像を描く態度である。一般則を求める科学と、個別性を尊重する地誌は緊張関係にある。その緊張を引き受けることが、地域主体の歴史理解である。

第17回（令和2年3月20日）：運営組織、地域の未来 皆さんの未来のイメージとともに

今回が講座の最終回、三年間の歩みを総括し、地域が文化遺産を扱うための主体と倫理を考えて、最終回だけれど、本当の意味での出発となる。

これまで私たちは、文化財と文化遺産の違いを学び、地域知を連結し、可視化し、資源化し、経営し、制度を理解し、歴史観を問い直してきた。そして発掘という行為が破壊である以上、保存と活用を前提にした責任ある主体が必要であることを確認してきた。今回問われているのは、その主体をどう組織化するかである。宿題として提出された案では、一般社団法人を支持する意見が最も多かった。NPO法人という選択肢もあったが、自由度や裁量の観点から一般社団法人が有力とされた。形式も重要なのだが、地域が持続可能な運営母体を持てるかどうか、いずれの形でも鍵になる。

メンバー構成はどうするのか。公募制か、既存団体からの代表か。年齢や性別は問わないのか。既存の〇〇会や△△協会との関係をどう整理するのか。登記や税務、事務局はどうするのかなど、新しい組織を作ることは容易ではないが組織なくして持続はない。

私が余所^{よそ}でも提案するのが“ビー玉からオパール作戦”である。異なる色のビー玉を溶かして一つの均質化した大玉にするのではない。異なる価値観、異なるルール、異なる主体をそのまま保ちつつ、ウォーターオパール¹³のように多色的に光る組織を目指す。違いを前提とすることが、極彩色の強みになる。現代社会では、これをダイバーシティ（多様性）という。ビー玉を1つの袋に入れる、それがいずれウォーターオパールのように輝くように、適度に熟する。その熟は、文化遺産を媒介装置とする関係によって発せられる。既に、北房には輝くビー玉がたくさんあるのだから、あとは、袋を用意すること、そして媒介装置を準備すること、その組織があれば必然として郷育の実践は現実になる。

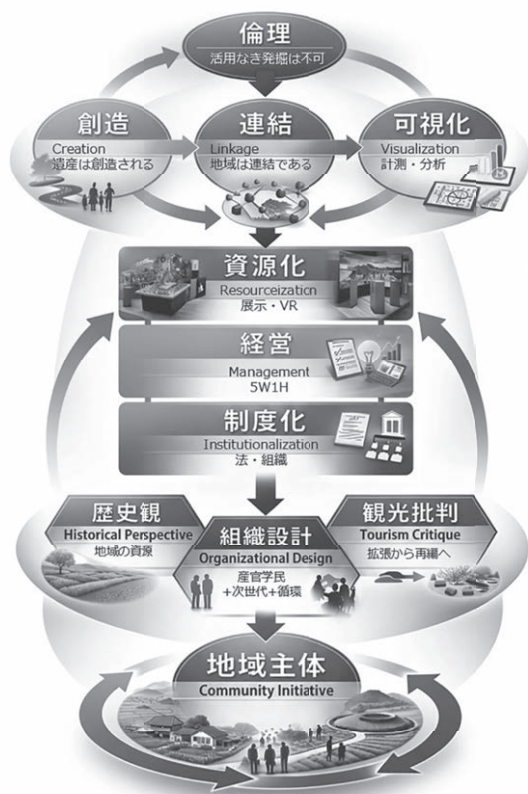
「西の明日香村」の標榜は、あくまで装置にすぎず、重要なのは、明日香村を模倣することではない。北房のブランドは何か。古墳か、鉄か、食文化か。地域主体が「説明」できる実像を描けるかどうか

13 水のしずくの中に虹が浮かんでいるように見える、透明感と虹色のゆらめきが美しいオパール的一种

かかっている。行政や大学ではなく、地域が自らの言葉で未来像を語れるかどうか問われている。

三年間の総括は明確である。文化財と文化遺産の違いを学び、荒木山の調査で実践し、展示で社会資源化を試み、組織設計まで踏み込んだ。発掘が見えてきた今、私たちは「遺跡を破壊する資格」を自認できるところまで来た。他の研究者がどう考えるかは重要ではない。重要なのは、地域自らの倫理である。地域に資さない調査は、自己満足に過ぎない。文化遺産を社会資源に変える責任を引き受けるとき、初めて発掘は正当化される。

この北房モデルは、以下のように循環関数として表現できる。



地域創生の真庭・北房モデル

$$H = f (C, L, V, R, M, I, O, E)$$

C = Creation (創造)

L = Linkage (連結)

V = Visualization (可視化)

R = Resourceization (資源化)

M = Management (経営)

I = Institutionalization (制度化)

O = Organization (組織設計)

E = Ethics (倫理)

H (Heritage) = 文化遺産の持続可能性

VILCHROME 関数と名付けておく。

VILは「ビレッジ」そしてCHROMEは語源がギリシャ語の「色」。まさに、地方の地域の創生事業に都合良い関数といえる。

本講座では、3年間をかけて、北房一郷育モデル構築を目指した。1年目と2年目には、プロジェクトA・A2といった、荒木山東塚・西塚古墳の測量・探査調査も実施した。

“文化遺産は保存対象でありかつ社会装置”であること、遺産化が完成することとは“地域が自己を再定義し続ける”ことであること、制度化された文化資本（文化財）が身体化された文化資本（文化遺産）へ転化するためには、“人の関係性という媒介”が必要であることを講師も受講生も学べたはずである。

北房小学校でのVR体験会とその分析結果 教育・郷育の新機軸の析出

令和元年度の「まに大」では、受講生に元小学校教員が複数参加しており、その受講生の話し合いの中で、VR（バーチャルリアリティ）などの可視化技術を用いた歴史体験を、地元の小学生にもさせたいという希望が出された。市教委、振興局、CKSCH、保存会の協議のなかで、北房小学校でのVR体験会を実施し、その効果の測定をCKSCHとして実施する方向性が整理された。

プロジェクトA2実施期間中の令和元年（2019年）12月2日、4時間目の授業時間に、北房小学校6年生においてVR体験会を実施した。効果を測定するため、6項目の質問項目を3件法で回答するアンケートも実施した。以下が概要である。

授業の狙い

北房地域の歴史をVR体験という形で身近に感じてもらう。

VRという最新技術と大学の先生に出会うことにより子どものキャリア教育を行う。

主な学習活動と予想される生徒の反応

地域の遺産・ICT教育・バーチャルからリアルへの誘導

VR体験内容

VR機器5台（5班に分けて1名3～5分程度体験）

体験内容 荒木山東塚古墳のVR(地中の石室に入ろう)

体験の狙い

地域の文化財に関する関心、地域活動（プロジェクトA・A2）に対する関心の惹起、デジタルコンテンツや情報技術に関する関心の誘導

アンケート内容

- 1) VRを知っていましたか？
- 2) VRの体験をしたことはありましたか？
- 3) 荒木山の古墳VRを体験してホンモノの古墳を見に行きたくなりましたか？
- 4) 見やすかったですか？
- 5) 操作はしやすかったですか？
- 6) 自分でVRをつくるとしたら何をつくりたいですか？



VR体験会風景

42名の児童が参加し、概ねVRを楽しんで体験していること、体験前の「まに大」の話を丁寧に聞き、自分たちがこれから見る荒木山の古墳に行ったことがある、ない、など様々会話をしながら待ち時間を過ごしていたことから、質的には体験会そのものが好印象であることが把握された。

また、後にアンケート結果を定量的に因子分析した結果、第1因子に歴史関心因子、第2因子にVR・ICT教育関心因子、第3因子に体験型学習能動態度因子が析出された。興味深い結果として、42人の生徒は第1因子の正負で大きく2グループに分かれ、さらにその双方ともが第1因子プラスで第2因子プラスとなる正の相関にあることが示された。対象が小学生で、かつサンプルも少ないため一般化は難しいが、少なくとも、歴史好きな児童とそうでない児童、そして歴史好きな児童が総体的に多いこと、さらに、その両方ともVRやICT教育に関心をもてば、歴史好きにもなりやすい、という傾向が見られた。【津村宏臣】

4.「市長と話そう！」

第Ⅱ期の「まに大付属ふるさと研究所」が終了して5カ月後の、令和2年（2020年）8月19日（水）、「市長と話そう！」が開催された。会場は当初予定されていた振興局から北房ふるさとセンターへ変更された。



北房ふるさとセンター

「市長と話そう！」は、市民と市長が直接会って、多彩な地域資源を生かした魅力あるまちづくりについて話し合い、市民と行政の協働による「市民と市役所の新しい関係づくり」を目的とした対話の場である。

顕彰する会は平成28年2月の発足以来、荒木山の古墳の清掃、整備をはじめ、講演会、広報紙「荒木山通信」の発行等の顕彰活動を行ってきたが、顕彰する会の会則にはもう一つ大きな目的が記されていた。それは、学術調査の実現である（P 1 参照）。古墳時代前期の荒木山東塚・西塚古墳の発掘調査によって、終末期の大谷・定古墳群までの古代北房の有様や歴史の流れを明らかにすることを顕彰する会の目的の一つにしていたのである。役員一同は、その願いと熱意を市長に直接伝えるまたとない機会であると考えていた。

出席役員は開催前に事前打合せを行い、質疑内容の担当と順番を決めた。午後3時から始まった会合では、南條副代表、戸村顧問をはじめとした顕彰する会の役員9名が太田昇真庭市長と、北房の歴史遺産を活用した人づくり・地域づくりについての意見交換を行った。本会合には市長、顕彰する会のほか、市総合政策課、振興局、市教委からも出席があった。

「知恵を出し合い、住民と一緒に文化財を守り、発展させたい。その模範例をつくりたい。」との市長発言もあり、予定の時間を超えての熱心な話し合いとなった。役員一同、今後の活動への意欲が一層高まると同時に、顕彰する会の大きな願いでもある古墳発掘調査に向けて「荒木山への道」が見えてきた会合であった（資料4）。

【畦田正博】

●民・官・学の発足 ―市長と話そう！―

保存会員・保存会元顧問 戸村彰孝(岡山市)

「市長と話そう！」が、令和2年8月19日、真庭市^{しも、あざえ}下^{しも}部^{あざえ}の「北房ふるさとセンター」1階の大広間で開催された。

「荒木山の古墳を顕彰する会」は、平成28年2月12日、会員21名で発足。代表に久松秀雄氏を選んで活動を続けていた。市の文化財である荒木山東塚・西塚古墳の本格的調査・保存・活用を促進するためには、私たち民間グループの活動は大きな意味をもっていると自負していたが、文化財保護法の下で本格的な調査を目指すには、真庭市の公的支援、指導、協力を必要としていた。

このため平成29年には役員6名が、久世^{くぜ}の市庁舎で市教委生涯学習課^{にいや}の新谷主幹同席の下に太田昇市長と面会し、私達の活動状況を説明、古墳調査への指導、協力を陳情してきた。その後の私達の諸活動には必ず新谷氏が指導、援助の手をさしのべてくれ、北房振興局も上島局長をはじめ、歴代局長は積極的な協力をおしめなかった。

そういう経過を経て、令和2年8月19日、「市長と話そう！」という場が設けられたのである。ここで、その概要を記すことにする。

1. 令和2年7月29日付けで、開催案内が資料5のとおり届いた。内容は、「北房地域の歴史遺産を活用した市民主体の人づくり、地域づくりの具体的な取組について市長と意見交換を行うものです。」

当日参加者は、顕彰する会が副代表南條、顧問戸村、事務局畦田・奥田、幹事井原・志田・平城・小林、監事山崎の9名。本会合の事務局として、北房振興局の上島局長他3名。教育委員会生涯学習課から佐山課長、新谷主幹。総合政策部から樋口課長、難波上級主事の計8名の他、地域おこし協力隊の橘高七海さんの出席があった（資料6）。

2. 当日の様様

会場は当初、振興局2階大会議室が予定されていたが、北房ふるさとセンターに変更され、1階の和室大広間での開催となった。

太田市長は、開催の前に奥田氏の説明で、2階の大谷1号墳出土の金銅装環頭大刀などを観賞され、予備知識をもって会に臨まれた。

- ・事前配布の資料－事務局の奥田・畦田等が作成

資料① 活動のあらまし（資料7）

② 「荒木山通信」創刊号～第8号

③ 荒木山西塚、東塚古墳の調査概要報告（資料8）

④ 荒木山の古墳の顕彰活動（資料9）

- ・当日配布資料

荒木山の古墳の顕彰活動 主として「道しるべ整備事業」



3. 会員の主な発言と市長の応答

- (1) 会の活動状況については資料を参照しながら、南條副代表が説明した。
- (2) 荒木山東塚・西塚古墳の文化財としての高い価値と、月の輪古墳発掘事業の教訓、新しい民・官・学の協力体制の必要性について井原、戸村が発言した。
- (3) 文化財保護法の改正による今後の展望と、地域社会総がかりでの文化財保存と活用の必要性について平城が発言した。
- (4) 地域住民の文化財保存への関心を高め、次世代への継承の重要性について奥田、畦田が発言した。
- (5) 3年計画で準備を開始した約20箇所の「道しるべ」設置への市の援助・要請について志田、山崎が発言した。

市長発言

皆さんのご苦勞と、今日までの文化財保護に取り組んでこられた熱意に敬意を表します。この文化財保護活動を次の世代に繋ぎたいと私も思っています。

私も民官学の新しい協力体制で発掘調査に協力したい。出来れば来年度から着手できるよう予算化を検討します。他の古墳についても出来るだけ調査したいと思います。

備考：この日の状況は、山陽新聞8月22日「作州ワイド版」で、「来年度予算に準備経費―市長が意欲―」と報道された（報道記事6）。

後日談等

1. 当日、代表の久松氏は骨折で入院中のため、残念ながら欠席された。会の終了後、私から、大変な成果があったと報告した。
本人からは、「大きなハードルを越えた」と大そう喜ばれた。
2. 平素、助言を受けている総社市埋蔵文化財学習の館の平井典子館長(現在、当会の顧問でもある)も「明るい前途が開けたね」と喜んでくれた。
3. 市長発言の通り、次年度にはこの発掘調査事業は正式に市の参画する事業として認められ、今日まで進めることができた。
4. 令和7年4月、4選を果たされた太田昇市長には、今日までのご尽力に感謝申し上げると共に、今後も今まで通り、温かいご支援ご指導をお願いしたい。

第2章・発掘調査に至る道

▶ 令和2年～令和4年 ◀

1. 真庭市教育委員会・同志社大学の動き

(1) 令和2年度

「荒木山の古墳をぜひ発掘調査してほしい!」、これは顕彰する会設立当初から市教委に寄せられてきた要望であった。市教委では、荒木山東塚・西塚古墳が本市の重要文化財であり、岡山県北西部を代表する古墳として学術的価値が高いことから、その保存・活用に必要な基礎的な情報を把握することは重要と考えていた。しかし、発掘調査は古墳を一部損なうものであり、当時は行政目的の発掘調査段階にはまだ至っていないと判断していた。そこで、発掘調査を行わず基礎情報入手と文化財の担い手育成を実現すべく事業化したのが、第1章で述べた公民館講座「まに大」の一環としての測量・物理探査調査であった。調査により、詳細な測量や主体部（被葬者が埋葬されている場所）の可能性をはじめ古墳に関する新たな知見を得るとともに、受講生の多くを占めた顕彰する会会員のその後の活躍を鑑みるに、地域における文化財の保存伝承や活用に向けた担い手育成の事業としても大きな成果があった。ただし、測量・物理探査調査実施時点でも市教委としては、両古墳の発掘調査を具体的に検討する段階にはまだ至っていなかった。

そうした中、コロナ禍の令和2年度、最終年度となる第Ⅲ期「まに大」講座の開催さえ危ぶまれていた8月に顕彰する会と真庭市長による「市長と話そう!」が開催され、出席者からの荒木山の古墳発掘調査の要望に対し、地域住民と行政、研究機関の三者が一体となって文化財を守り発展させるべく、発掘調査実現に向けて準備していききたいと、市長から前向きな回答が示された。

市教委の埋蔵文化財行政担当者としては、「まに大」の講座を通じて、市民と行政、そして同志社大学とも協力体制が一定程度構築できたとは認識していたが、それでもなお発掘調査が本質的に古墳の破壊と引き換えに貴重な情報を入手するという行為である以上、適切な形で発掘調査を遂行する必要性を考慮すると、「地域住民が参画する発掘調査」の実現に向けては課題山積であり、「市長と話そう!」終了後に顕彰する会の皆さんが意気揚々とする傍らで、重苦しい雰囲気だったことを覚えている。

その日以降「どのようにすれば発掘調査が実現できるか」について、北房地域における取り組みの理論的支柱かつ実践者でもあるCKSCHセンター長の津村宏臣氏（同志社大学文化情報学部准教授、真庭市政策アドバイザー）と意見交換しながら、顕彰する会や地域振興を担う振興局も一緒に協議を重ねた。

まず、荒木山東塚古墳、西塚古墳の2基両方を発掘調査することは長期的な取り組みとなり、事業側も負担が大きいことから、どちらかの古墳を対象を絞ることで合意を得た。さらに荒木山東塚古墳は中世に、城郭としても利用されており、その際の改変状況を把握したうえで、古墳の本来の姿を解明することは発掘調査として難易度が高いため、比較して築造当初の姿をとどめる荒木山西塚古墳を対象に発掘調査を実施することに決めた。

他方、行政内部においても、どのような体制やスケジュールで発掘調査とそれに関連する一連のプロジェクトを推進していくかといった検討が開始された。令和2年（2020年）11月の段階では、①プロジェクトは令和3年度を準備期間とし、令和4年度から令和7年度にかけて実施。②市教委、振興局、CKSCH、そして市民が参画し、事業全体を協議・実施する推進母体となる地域団体を今後結成、③岡

山県教育委員会に専門職の派遣も含めて事業への指導協力を仰ぐ、④発掘調査には文化庁の補助金を活用する、などスケジュール、実施体制や資金準備について方向性がおぼろげながらも見えてきた。

12月からは、第Ⅲ期「まに大」講座が開始されたが、講座内容は当初予定を大幅に変更し、地域住民が主力となった発掘調査実現とその後の文化遺産継承のあるべき姿を考える機会を多く設けるものとなった。

年度末の令和3年（2021年）3月には、振興局は地域振興計画に沿った古墳を活用した地域づくり、市教委は荒木山の古墳の調査・保存・研究、地域団体は古墳など地域の文化資源を生かした市民活動、同志社大学は学術的方策の研究・提供、指導助言という、行政、市民、大学それぞれの役割を踏まえて、発掘調査に向けた組織・環境づくり、資金準備等を行っていくイメージが関係者間で共有されるようになる。そして全体を包括し、プロジェクトの実施体制として「西の明日香村コンソーシアム（仮）」という名称が付けられた。

(2) 令和3年度

令和3年度は発掘調査実現に向けた準備期間として位置付け、北房文化遺産保存会（令和3年1月に「荒木山を顕彰する会」を改名）の役員、津村氏、振興局と市教委の関係者で意見交換会を開催し、発掘調査に関する課題解決に向けて検討や調整を重ねた。前年度描いた発掘調査のために新たな地域団体を結成するという目標は結果的に実現困難であり、その役割は代わってこれまで発掘調査の実現を強く要望してきた北房文化遺産保存会（以下、保存会）が担うようになっていく。また、岡山県教育委員会による専門職派遣も都合がつかず、文化庁の補助金も発掘調査の実施体制や内容が補助事業の条件に合致しないため、代わって内閣府の地方創生推進交付金を活用するなど方向性を修正しながら、課題をその都度解決していった。あわせて、古墳周辺の地権者の方々への発掘調査の交渉も11月には開始される。さらには、発掘担当者の不足を補い、適切な発掘調査を遂行できるよう、考古学の専門家等に本プロジェクトを応援いただく「発掘調査サポーター」を募集するといったアイデアも生まれてくる。

こうした実務的な準備とともに、来年度の発掘調査に向けた地元の機運を高めるため、令和4年（2022年）2月20日には西の明日香村歴史講演会を開催し、多くの方の参加を得て、日本を代表する古墳時代研究者の一人である国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学の松木武彦教授と津村氏による講演や保存会からの発掘調査への参加の呼びかけを行った（資料10、報道記事9）。

(3) 令和4年度

いよいよ発掘調査が実施される令和4年度に至り、様々な準備が加速していく。前年度から継続していた地権者との交渉の結果、5月には古墳周辺の地権者全員から発掘調査実施の承諾を得られた。ただし、その交渉の過程で地権者の意向を踏まえ、後円部から前方部に至る墳丘の西から南西にかけての斜面にはトレンチを設定しない判断に至った。この部分は原形を良く留めており、部分的な発掘調査が望まれたが、今後の保存活用には地権者の協力が不可欠であるため、その思いを尊重した結果である。

5月6日には、振興局、CKSCH、保存会、市教委の四者で荒木山西塚古墳発掘調査プロジェクト準備会を立ち上げ、以降毎月の頻度で会議を開催し、準備を進めることとなる（「3. 北房文化遺産保存会の動き」参照）。

こうした地域内での動きが進んでいくとともに、市民が参画した発掘調査という全国的にも珍しい試みが地域外からも注目を集めるようになってくる。6月には岡山県を中心とした地方紙である山陽新聞を発行する山陽新聞社から、地域の新たな魅力創出と課題解決を応援する「吉備の環」プロジェクト

の対象事業として、荒木山西塚古墳発掘調査のプロジェクトを取り上げていただくことが決定した。これ以降、発掘調査終了までの間、同新聞紙上で度々記事として掲載されるようになり（報道記事13など）、それを踏まえたWeb上での情報発信も相まって、岡山県内はもとより県外でも取組みが広く知られるようになってくる。一方で、外部での注目が高まる中で、古墳発掘調査の難しさ、担当者の技能レベルを踏まえ、市民が加わった古墳の発掘調査実施を懸念する声も専門家から岡山県や当市に対して寄せられるようになる。



賛否両方の声が聞こえてくる中、5月17日に市教委と振興局は岡山県庁を訪問し、県内市町村の埋蔵文化財保護行政を指導する岡山県教育委員会文化財課に具体的な発掘調査の在り方について協議・依頼を行った。今回の発掘調査は、市教委が発掘調査そのものの調査主体となる点は通常の行政調査と変わらないといえるが、大学や地域住民が参画したコンソーシアム形式でプロジェクトを推進すること、さらに参加者募集も含め一般の市民が多く作業を担うことから、発掘調査の質を確保し適切な形で実施できるよう、県からの指導助言や協力を得ることが主眼であった。

県教委からは、事業そのものは国・県の文化財施策の方向性にも合致し問題ないが、古墳の発掘調査は非常に慎重を要するものであり、保存と活用を両立した発掘調査が実施できるかが非常に重要。このため、岡山県教育委員会教育長通知「行政目的で行う埋蔵文化財の調査基準について（平成23年3月23日付け教文埋第1403号）」を踏まえた調査となるよう、①文化庁や県が示す行政目的の発掘調査の標準指針に沿った調査を行うこと、②職員配置を含め発掘調査実施体制の強化や発掘調査の質の向上を図ること、③県内の古墳時代研究者を含む、複数の専門家による指導委員会を設置し、調査の計画、検証、評価できる仕組みを用意すること、④上記の内容を実現しながら、地域住民や専門家も含めて丁寧な合意形成をはかりながら、多くの人が納得する形で事業を進めるべきである、といった的確な指導や助言があった。その上で、指導委員会が設置されたあかつきにはアドバイザーとしての参画をご快諾いただくとともに、発掘調査における安全管理や資金調達手法等、こちらが知りたい内容について、各種の情報提供を受けた。発掘調査を適切な形で遂行できるよう外部の専門家による指導の必要性はかねてから考えていたところであるが、岡山県教育委員会からの指導も踏まえ、今後整備していく発掘調査サポーターの中から数名によるワーキング・グループを設置し、会議や発掘調査現場において必要な指導助言をいただく形とすることに会議後決まった。

発掘調査が近づき、関係団体間による協力体制を具体的に可視化する取組みも進められる。6月17日には、CKSCHと真庭市の間で、荒木山西塚古墳発掘調査をはじめとする「西の明日香村づくり」を契機に研究連携及び協力に関する協定締結が行われた（報道記事12）。協定では、それぞれが保有する知的・人的資源を有効に活用し、

- （１）先進技術を応用した歴史文化の調査研究に関する事項
- （２）先進技術を応用した文化遺産等の保存活用に関する事項
- （３）文化遺産等を活用したまちづくりに関する事項
- （４）目的を達成するため必要な関係機関等の連携、協力に関する事項
- （５）その他、両者が協議し必要と認める事項

について相互に緊密な連携・協力をし、真庭市の歴史・文化の保存活用を推進していくことを目的とした。その最初のプロジェクトが荒木山西塚古墳発掘調査をはじめとする「西の明日香村づくり」という位置づけである。

さらに、市教委では、発掘調査に取り組むコンソーシアムやサポーター、調査指導のためのワーキング・グループの位置づけを明文化するため、「西の明日香村コンソーシアム設置要綱」、「荒木山西塚古墳発掘調査サポーター設置要領」、「荒木山西塚古墳発掘調査ワーキンググループ設置要領」の各例規を7月1日に制定する（資料11、12、13）。これにより、それまで協力関係を築きプロジェクトを進めてきた、保存会、CKSCH、振興局、市教委の四者が正式にコンソーシアムとして活動するようになる。

外部専門家に支援してもらうために設けた「荒木山西塚古墳発掘調査サポーター」は7月21日から8月19日に真庭市ホームページ等を通じて呼びかけを行い、市教委から直接働きかけた専門家も含めて、13名の方に登録いただいた。その中で亀田修一氏（岡山理科大学生物地球学部名誉教授）、白石純氏（岡山理科大学生物地球学部教授、真庭市文化財保護審議会副会長）、寺前直人氏（駒澤大学文学部教授）、



松木武彦氏（国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学教授）、行田裕美氏（元津山市教育委員会生涯学習部部長）の5名の方にワーキンググループの委員に就いていただいた。8月29日にはワーキンググループの第1回会議を開催し、令和4年（2022年）2月に西の明日香村講演会で講演いただいた松木武彦氏に座長として就任いただき、発掘調査の体制や調査計画などについて有益な指導助言をいただいた（資料14、15、報道記事14）。

最後にCKSCHでは、荒木山西塚古墳発掘調査の取組を契機に、同センターの分室となる「水風^{みずなづ}の庭」を整備した。同所は、発掘調査の拠点にするとともに、文化遺産を地域づくりの資源として活用していくための拠点にもする展望で、真庭市山田地内の空き家を購入し・改修して整備したものである。発掘調査開始を目前に控えた11月23日に関係者や地元住民も出席し、開所式を執り行った（報道記事16）。

こうして、令和2年（2020年）8月から令和4年（2022年）11月まで約2年4か月にわたり、発掘調査に向けた準備が進められた。地域・大学・行政の民学官連携により古墳の発掘調査に取り組むことは、全国的にも極めて稀な事例であり、その実現に至るまでには、数多くの課題や意見調整が生じた。計画どおりに進めることができた事項がある一方、見直しを迫られた事項もあり、時に関係者間においても意見の相違や議論が生じる場面もあった。しかしながら、保存会を中心とした地域住民の熱意を原動力に、それぞれの役割を尊重しながら対等に意見交換し、試行錯誤を重ねながら課題を1つ1つ克服し、ついに発掘調査当日を迎えるに至った。

【新谷俊典】

2. 北房振興局の動き

(1) 北房地域振興計画

令和3年（2021年）3月に「北房地域振興計画 観光地域づくりに向けて ～とにかくおいでよ、ずっといたいまち北房～」と題された計画が策定された。これは、北房の資源や特色、これまでの取り組みを整理し、住民と行政がともに目指す将来像として作成されたものである。

この計画の柱となる主要テーマの設定を行うにあたり策定委員会でまず挙げたのは「ホテル」と「古墳」であった。この2つは北房の代表的な地域資源であり、これまでの取り組み、これからの動向、他地域からも地域資源として認知されていることなどから、北房の魅力を高め、人を呼び込むための主要な取り組みとして設定された。また、北房の人たちがホテルや古墳がある地域に誇りを持ち、素晴らしいまちであることを積極的に発信していくためには、もっと地域を知るための「学び」の環境が必要であることから、「学び」も主要テーマに設定された。

一方、今後北房というまちをどのように維持し発展させていくかという議論の中で、人口や移住・定住に対する取組が必要であるという意見も多かった。北房へ移住したくても住む場所や仕事、情報が無いといった問題提起もあり、そのための「人を受け入れる」仕組みが必要であるという視点から、これも主要テーマのひとつとされた。

結果、同計画の主要テーマとして設定されたのは、全国に発信する「日本一のホテルの里づくり」、ロマンと郷愁の里「西の明日香村づくり」、子どもも大人も学び続ける「学びの里づくり」、誰もが住み続けたい「人を受け入れる里づくり」の4つとなった。

この北房地域振興計画により、改めて官民が連携し、文化遺産を活用した取り組みを進めていくことを行政としても明言した形となった。

少し余談になるが、この計画策定に関わった住民を中心に、令和4年度に「北房未来づくりネットワーク」という団体が発足する。この団体は「北房地域振興計画」を計画倒れにしないため自ら行動することを目的としていた。振興局としては彼らに荒木山西塚古墳の発掘調査に大きく貢献してもらいたいという思いを密かにもっていたが、実現には至らなかった。ただ、彼らは令和5年度に空き家管理や移住者受け入れの体制を整える役割を担う「真庭市定住支援活動奨励団体」として認定されることとなることを申し添えておく。

(2) 史跡の看板やマップ作成

北房地域振興計画の「西の明日香村づくり」の一環として、北房振興局では史跡の看板設置やマップ作成を行った。

発掘調査が行われている令和5年（2023年）2月に「西の明日香村HOKUBO」と大きく印字されているリーフレット「北房史跡探訪ガイド&MAP」が完成した。このリーフレットは後に、発掘現場の現地説明会や西の明日香村フォーラム、北房文化遺産保存会のイベントなどで参加者に配布する重要なものとなった。

(3) 発掘調査に向けて

振興局では、市教委と連携し、地権者、近隣自治会長、発掘現場近隣住民を訪問し、発掘調査への理解と協力をお願いした。荒木自治会、宮高自治会、英賀グリーンタウン自治会においては、自治会長か

ら各戸にお知らせの配布をしていただいた。

また、地域自主組織「上水田英賀の会」に市が無償貸与している「英賀公園」のクラブハウスの使用や、老人クラブ「南部寿楽会」が所有する集会所「上水田第1 老人憩いの家」の使用について各会の代表者と相談した。

一般参加者の募集については、北房振興局で担当することとなり、チラシ（資料16）や申込書の作成を行い、令和4年（2022年）9月には募集を開始。11月には作業参加日程の決定をし、「発掘調査のしおり」（資料17）とともに参加者へ送付した。12月5日には、「現場に入る人全員が安全に作業すること」と「遺跡の発掘現場をきちんと保全すること」に主眼をおき発掘作業の進め方や具体的な作業内容を記した「発掘作業の手引き」（資料18）を作成。参加者へ送付した。また、地元の小中学校へも発掘調査への参加を呼びかけ、参加方法など調整を行った。

発掘調査現場においては、「遺跡の発掘調査をおこなっています」「関係者以外は立ち入らないください」などの看板を用意、設置するなども北房振興局で対応した。

【嶋田有一郎】

3. 北房文化遺産保存会の動き

(1)「北房文化遺産保存会」としての新たなスタート

「市長と話そう！」を終えた令和2年（2020年）11月24日、久松代表と南條副代表は、振興局、市教委とともに岡山県文化財課を訪問し、挨拶と北房における発掘調査に係る取り組みの現状報告を行った。12月6日から第Ⅲ期「まに大」が始まり、翌令和3年（2021年）3月20日でこの講座は終了した。

令和3年1月の顕彰する会総会は、新型コロナウイルスの流行により書面決議となった。協議事項には「荒木山の古墳を顕彰する会」から「北房文化遺産保存会」への改称、およびそれに伴う会則の全面改正等があった。「北房文化遺産保存会」は、荒木山の古墳だけでなく、北房地域全体における文化遺産の保護および活用を通して、地域の振興に寄与するとともに、北房の文化遺産を次世代に継承することを目的として新たなスタートを切った。

(2)「西の明日香村・道しるべ整備事業」

令和3年度は、令和2年度から開始された「西の明日香村・道しるべ整備事業」に注力した。本事業は、「西の明日香村づくり」のための第一段階の事業であった。県内外の古代史ファンをはじめとした多くの



案内看板設置作業

人たちが、北房の古墳、その他史跡を巡る際、案内マップを片手に看板を道しるべとして、迷うことなく目的地にたどり着くことを目的とした。

当時、北房の地元住民でも、国指定の大谷・定古墳群を除けば、首長墳規模の古墳名や場所さえ知る人はほとんどいなかった。言い換えれば、それまで北房の文化遺産に係る顕彰等の活動を、ここまでの規模で行う組織・団体といったものがなかったのである。その意味では、案内看板の設置は地元住民にとっても、北房の史跡を知る機会となり、興味を持った人は見学に行くきっかけにもなると期待した。

本事業を開始した令和2年の当初計画では、看板設置と案内マップの作成を予定していた。看板事業については設置候補場所と現地調査等を精力的に進めた（報道記事5）。マップの検討も並行して進めていたが、令和3年6月に振興局に引き継いだ（令和4年2月15日、A3版十字折りリーフレット「西の明日香村 HOKUBO 北房史跡探訪ガイド&MAP」として完成）。

その後、看板事業は表記内容、外形・寸法、材質、制作費の見積等について、月に2～4回の打合せを行い、11月23日から24日にかけて11基の案内看板の設置を完了した（報道記事8）。

(3) 発掘調査に向けて準備を加速

令和4年（2022年）2月20日、荒木山西塚古墳発掘調査のキックオフイベントとして、「西の明日香村 歴史講演会 荒木山古墳とその時代」が北房文化センターで開催された。国立歴史民族博物館総合研究大学院大学松木武彦教授と同志社大学津村宏臣准教授の講演に引き続いて、保存会からは、奥田副会長が公民館講座の成果を発表、久松会長、畦田副会長が発掘調査への参加の呼びかけを行った（資料10、報道記事9）。

その後、保存会は3月11日から4月8日にかけての約1ヵ月間で、発掘調査に関する6回の打合せを行い、3月29日の打合せには津村准教授も参加し、発掘作業の予行演習に関する協議を行った。

4月13日、荒木山近くにある英賀公園（P3図参照）内の斜面で、発掘作業の予行演習を行った。当日は26名の保存会員が参加し、斜面に長さ9m、幅2mの大きさのトレンチ（試掘坑）を設定し、津村准教授の指導で、表土剥ぎから開始し、深さ10cmまで掘り下げた。さらに、掘り出した土をふるいに掛けて、模擬的に遺物を確認する作業等を体験した（報道記事10、11）。

滴一滴

6年前から古墳の草刈りや勉強会、測量、地中レーダー探査などを重ねてきた。準備は大詰めらしい。先月の本紙作州ワイド版に、地元の住民グループが今度は発掘作業の予行演習をしたとあった▼真庭市北房地区にある荒木山西塚古墳は、60級の前方後円墳だが詳細は明らかでない。地域の歴史を知りたいと、住民たちが北房文化遺産保存会をつくり、今秋に始まる発掘調査へ向けて張り切っている▼住民が活躍する遺跡調査といえば、岡山県美咲町の月の輪古墳が知られる。神話でない真実の歴史を求めて1953年、地域住民らが故近藤義郎岡山大名菅教授の指導で発掘した。参加者は延べ1万人。映画も作られて全国の注目を集めた▼だが、同様の調査は広がりなかった。文化財保護法の下、行政による遺跡の保護・調査体制が整えられていく半面で、住民が自ら地域の遺跡に関わる機会はずいぶん遠のいた▼遺跡は行政や研究者だけのものではない。その土地の歴史遺産でもある。どんなに素晴らしい遺跡でも、地元で関心が持たれないようなら意味は乏しい▼荒木山では地域の熱意に応え、同志社大や真庭市が調査体制を整え、学術的な水準を確保しつつ、住民と共に発掘するという。北房の地から「現代の月の輪」ともいえる遺跡と地域、行政、研究者の新しい関わり方が生まれてほしい。

2022.5.28

山陽新聞 2022年(令和4年)5月28日

5月6日、市教委・振興局、同志社大学、保存会による「荒木山西塚古墳発掘調査プロジェクト第1回準備会」（以下、準備会）が開催され、市教委より、事業主体者は真庭市教育委員会とし、調査体制として官・民・学による「西の明日香村コンソーシアム」の結成、発掘調査の全体スケジュールと令和4年度日程、発掘調査の内容および役割分担等の概要説明があった。

6月9日に第2回準備会が開催された（資料19）。ここでは、市教委と岡山県教育委員会との協議内容およびその内容を踏まえた対応策として、次の4項目の説明があった。①本調査は、真庭市が事業主体であるため、県が定めた「行政目的で行う埋蔵文化財の調査基準について」（平成23年3月23日付け

教文埋第1403号岡山県教育委員会教育長通知)における、保存・活用のための発掘調査に示される基準にしたがって行う。すなわち今回は学術調査ではなく、必要最低限の範囲のみ調査することが前提となる。②同調査基準においては指導委員会が必要となるため、指導委員会に準ずる仕組みとして、サポーターの中から選んだメンバーを中心に「ワーキング・グループ」を設置する。③発掘調査計画は、①にしたがい、ワーキング・グループの意見を踏まえた適切な計画とする。④発掘調査作業は、監督者が目の届く、あるいはコントロール可能な作業者の構成が必要となることから、保存会の中から作業の中心となる人、その他の参加者を決めた後に、一般参加者の人数配分を協議する。

6月17日の第3回準備会では、サポーターを「西の明日香村コンソーシアム」の枠に入れることの報告が市教委よりあった。その後、上記対応策の具体化、今後必要となる準備項目等が協議された(資料20、23)。

翌6月18日、こうもり塚古墳(総社市)の現地説明会に参加し、現地の発掘状況等を視察。6月20日には、荒木山西塚古墳発掘調査事業に係る専門家現地見学として、駒澤大学文学部歴史学科寺前直人教授、早稲田大学文学学術院田畑幸嗣教授、同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター中村賢太郎副センター長および岡山県教育庁文化財課尾上元規副課長が出席した。

7月23日、「西の明日香村コンソーシアム第4回連携会議」(「荒木山西塚古墳調査プロジェクト準備会」から名称変更。以下、コンソーシアム会議)が開催された。市教委、同志社大学から準備項目の進捗報告があった。また、実施体制および作業に係る必要な班(発掘・記録・遺物・機材・案内・生活・庶務)の編成に



北房文化遺産保存会総決起集会
(左より戸村顧問、久松会長、畦田副会長、奥田副会長)

ついて協議した。その他、現時点での課題や不安点等をまとめ、その解決策について意見交換がされた(資料21、24)。

8月22日のコンソーシアム第5回連携会議では、サポーターおよびワーキンググループ委員・アドバイザーの決定報告、事業概要説明等が行われた(資料22)。

9月15日、保存会は事務局会議を開催。発掘調査の実施

体制について協議し、保存会で組織する必要な班としてはコンソーシアム会議で、発掘班、記録(広報)班、遺物班、機材班、案内班、生活班、安全・管理班、庶務班の8班となった。しかし、参加予定の会員数等を考慮すると、8班編成は困難であるとの結論となった。そこで各班機能を分散させず、効率的な組み合わせとして、発掘班、記録(広報)班、遺物・機材班、生活・安全管理班、案内・庶務班の5班編成とした。その後、各班メンバーおよびリーダーとサブリーダーを決定した(資料25、26、27)。



テント設営(発掘現場付近)

発掘調査まで残り約1ヵ月に

迫った10月19日には、「北房文化遺産保存会総決起集会―フロンランナーズ会議―」と称して、作業開始の機運を高める会議が開催された。29名の発掘調査参加会員参加のもと、発掘調査日程、組織体制、班編成と作業内容、日々の作業分担表（スケジュール表）、一般参加者の状況等の説明がされた。（報道記事15）

11月14日、リーダー・サブリーダー会議を開催、班編成と作業内容の確認の後、班別協議を行った。

11月22日、荒木山の柴掻き、清掃活動、11月25日は、テント設営、器材・作業道具の搬入作業を行った後、保存会員は英賀公園のクラブハウスに集まり、翌日からの本番を前に最後の確認を行った。

【平城 元】

第3章 ■ 発掘調査

▶ 令和4年～令和6年 ◀

1. 第1次発掘調査

前章で述べられたような関係者による1年以上にわたる数多くの事前の調整、準備の段階を経て、荒木山西塚古墳の発掘調査を令和4・5年度の2カ年計画で実施することとなった。

発掘調査は市教委を調査主体とした保存目的の確認調査である。調査員は市教委の担当職員とCKSCHの津村センター長、岸田副センター長の3名が担当した。また発掘調査サポーターの方にも現地で実際の調査に参加いただいた。調査員の下で調査に従事するスタッフとして、保存会が5班編成に分かれ各種作業にあたり、さらに県内から募集した一般の参加者が会員と一緒に調査に加わる形で、調査を含めプロジェクト全体の実施体制が組まれた（資料28）。

第1次調査は、「まに大」で実施した測量・探査調査（プロジェクトAおよびA2）で得られた成果や課題を踏まえ、調査計画を立てて行われた。調査期間は令和4年（2022年）11月26日～令和5年（2023年）3月12日であり、実働日数は29日であった。一般の方が調査に参加しやすいよう土日も調査日とし、11月26日から12月18日まで調査を行った。その後中断期間も挟み、令和5年2月17日から調査を再開し、翌年3月12日まで実施した。

第1次調査では、①後円部における墳丘規模・構造、②外表施設の有無を確認、③後円部の北側に存在する高まりとの間の旧地形や高まりの性格の確認などを主な目的に後円部に2つのトレンチを設定した。トレンチ1とトレンチ2で合計調査面積は52㎡である。

第1次調査により得られた成果としては、

- ①後円部墳端位置から復元した後円部径は約40mと推定され、墳丘下半部は地山を削り出し、上半部は盛土により築造。
- ②外表施設として、墳裾と墳丘中位で2列の石列を検出。現状では後円部は2段以上の築成とみなす。
- ③墳頂部平坦面では、トレンチ隅において石灰岩の礫群が地表下の浅い部分で検出され、埋葬施設の一部である可能性が想定される。
- ④出土した小型丸底壺から古墳築造時期は、古墳時代前期後葉（4世紀中葉～後葉）に位置付けられる。

⑤西塚古墳北東側の高まりについては、今回の調査で盛土による人工的なものであることが判明した。といった内容が挙げられる。

一方で、段築は明瞭に確認できた状態ではないため、墳丘構造全体の把握および人工的と判明した西塚古墳北東側の高まりの具体的な性格などは次の調査の課題として残ることとなった。

調査の序盤は、チームの中核となる保存会員が発掘調査の基礎知識と技術を習得するための期間として、発掘調査サポーターの一人である寺前直人氏が教鞭をとる駒澤大学大学院生の6名に12月4日まで参加いただき、考古学的な知識や技術を現場で保存会員に教えた。この事は一般参加者が調査参加した際に現場が混乱なく進むために非常に有益であった。一般参加者は12月10日から受け入れをはじめ、募集対象期間の最終日であった翌年3月5日まで続いた。その後は埋め戻しが完了する3月12日までコンソーシアムのメンバーのみで調査を行った。

地域では珍しい発掘調査を体験し、ふるさとへの学びに繋がようと、12月12日に北房中学校2年生生徒、同月18日に北房小学校PTAの親子、2月17日には北房小学校の6年生児童と地域の子どもたちも参

加し、発掘作業を行った。また、令和5年3月4日には保存会が運営の中心となって現地説明会を開催し、市内外から約100名の参加者があった。期間中の参加者は延べ1063名、そのうち663名が地域住民をはじめとする市民参加の方である。

また、本プロジェクトに関する情報発信も積極的に取り組んだ。地域住民が参画する発掘調査の珍しさもあり、このプロジェクトは山陽新聞社が県内各地の地域づくりを紹介する「吉備の環アクション」に選ばれており、同社の発行する山陽新聞では度々紙面掲載され、注目を集めた。地元では、保存会員によるSNSや地元の資料館である北房ふるさとセンターでの壁新聞掲示を期間中随時行った。あわせて市教委でも今回の貴重な取り組みを次世代に伝えていくため、発掘調査の記録映像化に取り組み、調査の経過をYouTubeによりインターネット配信するなど取り組みを行った。【新谷俊典】

(1) 発掘調査参加者

〔真庭市教育委員会〕

三ツ宗宏・谷岡理江・森 俊弘・新谷俊典

〔真庭市〕

太田 昇・大塚清文・畦崎知世・江崎 仁・大久保孝晃・谷岡孝久・藤本論司

〔同志社大学〕

津村宏臣・岸田 徹

〔発掘調査サポーター〕

〔ワーキンググループ〕松木武彦・亀田修一・白石 純・寺前直人・行田裕美

〔ワーキンググループアドバイザー〕尾上元規

〔サポーター〕平井典子・高橋進一・今津勝紀・岩本 崇

〔駒澤大学大学院〕

鈴木崇司・西村航希・浅見 衛・風間智裕・相澤かれん・平野 絢

〔北房文化遺産保存会〕

久松秀雄・畦田正博・奥田健治・戸村彰孝・宮田美輝・山崎和光・大植昭一・原田重隆・三輪能章
梶上 守・上谷仁志・平城 元・小林展弘・志田浩一・南條保之・畦田恵子・小田裕章・加戸宏司
紙谷吉明・橘高七海・中山 進・南條朝子・大木順市・大木初美・平 義男・伊藤義則・南條 靖
天野光輝・岡崎誠一・赤坂健太郎・井原隆志・中山 清・宮宗正孝・小田寿夫・梶原啓二
嶋田有一郎・嶋田丞一郎・川鍋裕和・山本 肇

〔一般参加〕

山本富造・山本満子・妹尾修一・平松基治・山本 亨・服部 明・岡田祐季・有吉宏行・伊達由里子
草加芽衣・牧田華奈・池田浩規・小畑 誠・小畑順子・小畑晴花・小畑 樹・清友 尚・登森晶子
井納京子・一谷和子・森田陽介・塩見佳世子・齋藤里帆・齋藤真理・芦田翔太・山辺信義・黒川 愛
大戸彰三・上原泰彦・植田琉斗・植田彩愛・植田真由美・平 萌々花・平 直子・山本莉々彩
山本百合子・本多結衣・本多麻里子・猪頭義信・小林 守・宮田正文・延原 泉・松岡国子
原田桂子・小林和夫・森田洪爾・木村将敬・板東郁仁・板東恭子・板東哲哉・井関武弘・市川眞弓
畑 俊輔・高馬康宏・浪井芳帆・小野彩花・小野浩之・広本美紀・乙部憲彦・乙部えみ・池田 学
奥 和男・村田証好・佐々木清子・光本大地・光本真一・山崎弘大・山崎弘一・山本知実・片山佑一
井上雅斗・湯浅 稔・田中和真・林 浩子・久奥恵子・門野雅弘・吉永忠洋・平松 繁・竹内暢敏
浅野正人・玉井千晶・谷岡勇樹・西野正彦・大田祐介・大田偉夢・大田 恵

(2) 北房文化遺産保存会班編成

今回の発掘現場においては調査員の指揮のもと、保存会員で組織された「発掘班」、「記録（広報）班」および「遺物・機材班」によって各種作業が行われた。また、市民参加・諸活動に関しては、「生活・安全班」、「案内・庶務班」が担当した。以下は、各班リーダーの寄稿である。

発掘班

発掘班は、調査員の指示を正確に把握し、確実な発掘作業を行うこと、さらに一般参加者に調査員の指示内容を過不足なく伝え、作業指導・アドバイスすることを主な任務とする。

現場で最も重要なことは、こうした適正な作業を、気を抜かず行うことであるが、前提として安全第一がある。このため、事故・ケガが絶対にないよう気を使った。一回でも事故等が発生すれば、場合によっては発掘調査が中止となる可能性さえある。生活・安全班を中心に、保存会員全員が安全対策と危険行為等に対しては特に注意をはらった。

なお、発掘作業に参加する保存会員は、主担当の班作業が必要な場合はその作業を優先するが、基本的には全員が発掘班に属する。詳細は「班編成と作業内容」（資料27）に示すとおりである。



発掘班の説明（ミーティング）

【作業配置】

作業管理として、参加者（保存会員・一般参加者）に、どのトレンチで、どんな作業を行ってもらうかを事前に決めておくことは重要なことの一つである。参加者氏名を数日前に案内・庶務班の志田リーダーから連絡を受け、発掘作業の概要については新谷調査員に確認した上で、傾斜のあるトレンチ（例えばトレンチ1）は、一般参加者には担当させないことなど、事前に決めていたことを考慮しながら「スケジュール表」（資料29）を作成した。案内・庶務班に必要部数をコピーしてもらい、受付で全員に配布し、9時からのミーティングで、スケジュール表の見方、あるいは特に注意すべきことなどを説明した。

このスケジュール表には、当日の保存会参加者および一般参加者の氏名を記し、個人ごとに掘り下げトレンチ名、あるいはふるい掛けトレンチ名を記載している。保存会員には一般参加者をサポートするトレンチ、あるいは一般参加者が少ない日には作業するトレンチを示した。また、一般参加者は掘り下げ作業とふるい掛け作業の両方を経験してもらうため、午前と午後で配置を変えた。

この作業配置で大変だったのは、前日、当日に欠席する人が出ることであった。様々な都合で欠席となるのは仕方のないことであるが、当日の欠席者が2,3名以上になると、単にトレンチの配置人数が減るというだけでは済まない場合が多い。他のトレンチの配置変更も必要となり、時には大幅な配置変更を余儀なくされる。また、前日の作業進捗によっては、当初予定した必要人員の変化もある。そうしたことを作業開始までに早急に検討し、変更者への連絡を行う必要がある。この作業は朝の恒例行事となり、私のスケジュール表は作業開始までに真っ赤に修正されることが多かった。さらに、調査員から特命作業の要請等があれば、必要人数の確認とその作業内容を把握し、当日の保存会員の中から適任者を判断し、作業変更のお願いをすることもあった。

[作業指示・フォロー]

一般参加者がミーティング後のガイダンスを受けている間に、前日の作業後にトレンチを覆ったブルーシートを取り除き、人数分の発掘道具を揃える準備作業を行う。

ガイダンスが終わって一般作業者が揃うと、まず今回の発掘調査の目的を説明した。続いて、この発掘作業は単なる体験イベントではなく、本格的な発掘調査であること。皆さんの作業結果が報告書として残るため、指示どおり忠実に作業を行い、分からないことがあれば、勝手な判断をせず、保存会員に聞いて欲しいというお願いをした。その後、使用する道具の名前と使用方法を簡単に説明した。



人数分の作業道具準備

トレンチに案内すると、ここでは具体的な作業方法を説明する。基本的にはガリでトレンチを削りながら均一に掘り下げていき、根が出ると必ず根切りバサミで切り、決して手で引きちぎらないことを注意した。掘り下げるとまた根が出るので、丁寧にハサミで切り取る、この繰り返しであること。トレンチの壁は特に注意しながら垂直に立てること。また、場合によってはバチで少し大胆に掘り下げたり、移植ごてを使ったりすることもあること。遺物らしき物に当たった場合は、慎重に掘り下げ、竹ベラや手ぼうきを使って周りから全体を掘りだしていくこと。トレンチの端に足をかけて壁を崩さないよう特に注意すること等を、作業しながら説明した。



トレンチから出て掘下げ状態を確認

日によっては、狭いトレンチにやむを得ず、かなりの人数が入る場合もあった。非常に慎重な人もいれば、少々大胆な掘り下げ方をする人もいる。それぞれにアドバイスはするが、一度トレンチから出てもらい、トレンチ全体の状況をみんなで見てみる。すると、掘り下げ深さに違いがあったり、部分的に底面が凹凸になっていたりということがよく分かる。調査員から指示された掘り下げ深さを再度確認して作業再開する。休憩時には、自身の手箕の中にすべての道具を入れてもらい、片付けを徹底した。当日の作業終了後は、ブルーシートをトレンチに覆い、土嚢で固定した。

第1次発掘作業後には、第2次発掘作業で改善すべき事項等について発掘班メンバーから、次の意見があり、他班と共有した。

- ・ 墳丘斜面の足場は土嚢による階段とロープの併用にしたが、ロープを持っても滑ることがあった。後半使用した筵は平地では効果的であった。墳丘斜面でも概ね有効ではあったが、筵ごと滑る場合もあった。さらに安全対策の検討が必要。
- ・ 雨天後に、トレンチを覆うブルーシートの上を歩いての転倒が散見された。
安全面以外でも、ブルーシートによって見えないトレンチの壁を崩す恐れもあるため、(ふりい場所

のシートを除き)ブルーシート上は歩かないという徹底が必要。

- ・一般参加者で発掘作業前に体調を崩された方がいた。駐車場まで自力で歩けない、あるいは、その場で横になっている必要のある場合等を想定し、毛布、その他必要と思われるものは準備しておいた方が良い。
- ・ケガ・体調不良者が発生した際、的確な対応をするために、具体的な行動指針、指示系統等を決め、全員が事前に承知しておくべき。
- ・小走りで排土運搬する中学生、土嚢をトレンチの反対側に投げる一般参加者等を見かけた。誰かが注意するだろうと見過ごす可能性もあり、見かけた人は、安全に関する情報管理一元化のため、安全パトロール担当の保存会員にその旨伝え、小・中学生であれば引率の先生経由で注意するなど、危険行為に対しては、その場ですぐに注意することを徹底したい。
- ・排土量が多過ぎる土嚢は運搬作業に支障が出る。また、結び方によっては、埋戻し作業に支障がある。袋詰め分量の適正化と、結び方の統一指導が必要。
- ・必要な作業道具が見つからないケースがあった。常時使用する道具とその他を区別して保管するなどの工夫が必要ではないか。
- ・根切りバサミがすぐ切れにくくなり作業効率が悪い。市教委に追加購入を要請する。
- ・日報の中に問題点の指摘があれば検討していく。

発掘班リーダーとしては気の抜けない日々が続いたが、その一方で、今現在の地点からスタートし、掘り進むにしたがって時代が遡^{さかのぼ}っていくという、この当たり前の作業は、期待していたとおり、非常に面白いものだった。土層^{どそう}変化だけでなく、表土付近のプラスチック片、その少し下には錆^{さび}びて曲がった釘、茶碗のかけら(昭和初期のものだろうか)、江戸時代の銭(寛永通宝)、時代不詳の鏹^{びた}銭、中世の頃と思われる磁器片、そして古代の土師器片等が出てくるのである。北房の地で、それぞれ異なる時代を生活していた人が間違いなくいた。その人たちの姿を想像してしまう程のリアリティーさを感じた。しかも、ところどころで頭をひねるような場面に出くわす。これはどう考えたらいいのか、ノートに土層の変化をあれこれ書いてみたりもした。推論でしか答えようのない土層変化等に悩みながら、ついには古墳築造期の地点に辿^{たど}り着く。こんなプロセスは、他では決して経験できない楽しい時間であった。

いずれにしても、発掘作業中に事故・ケガもなく、無事に終了できたことがなによりであった。未経験ながら、何度も何度も議論し、可能な限りの事前準備を重ねてきたことが奏功したと思う。

【発掘班リーダー 平城 元】

記録(広報)班

記録(広報)班の目的は「班編成と作業内容」(資料27)にもあるように、「発掘に伴う測量・記録・広報作業」である。班員のうち発掘調査の経験者は数名いるものの、測量(補佐役)や記録、広報など初めての試みなので何をどのように進めて良いのか、まさに木の樫で大海に漕ぎ出す小舟の船員のごとくであった。

具体的な作業内容は、㊦「調査員」(市教委新谷主幹)のトレンチ設置における杭打ち作業補助、㊧毎日の発掘作業を撮影し記録とする。㊨発掘調査報告書に盛り込む荒木山西塚古墳の図面作成の手伝い、㊩地域住民や市民に向けて広報するための説明資料補助、㊪見学者や県内からの発掘作業加者へ向けたガイダンス並びに古墳に関する説明資料の作成、㊫現地説明会準備の補助、㊬新聞・ケーブルテレビ等各種メディアを活用して、地域住民や市民に向けての広報活動、等々であった。

このうち第1次発掘調査での主な班活動は、㊧の写真撮影、㊨の一般見学者対応、そして、㊫発掘調査の情報発信であった。他は補助的な作業であり、調査員の指導助言の下での作業になった。以下、主



写真撮影

な活動の取り組み方針や活動時に明らかになった課題、改善に向けた工夫等をまとめる。

発掘作業に入る前に、記録写真撮影のノウハウについて、保存会の知恵袋戸村彰孝顧問から畦田会長を通じてお借りした文化庁文化財部記念物課監修の『発掘調査のてびき』に目を通した。3部からなる本てびきは専門性が強く、基礎知識に乏しい私には理解困難な部分が多く、読み進めれば進むほど頭が痛くなってきた。その中で文化財写真の意義等について記されていた箇所があったのでここに引用する。「撮影対象となる遺跡や遺物は、撮影の都度、湿度や温度、天候などのさまざまな要因によって影響を受ける。当然のことながら度重なる撮影はそれを増大させる。また発掘によって消失する遺跡の写真は、ほとんどの場合、再撮影が不可能であり、撮影などの失敗は許されない。写真は遺跡のそういった対象も含めてもっとも克明な記

録という役割を担う。しかも発掘調査時の記録写真としては、ほかに代替できるものがない。こうした点で文化財写真は撮影時点から写真そのものが文化財であることを意識する必要がある。」さらに、「撮影に当たる者は客観的で、撮影時点で採用しうる明確な視点を持ち、最善の方法や技術によって後日の検証に耐えうるだけの明確かつ精緻でより情報量の多い記録写真を撮ることが求められる。」

これに照らせば、発掘調査の写真はとても素人には負えない作業である。新谷調査員の記録写真撮影に取り組む姿を目の当たりにして、専門家のすごさに改めて感動した。撮影の時間、その時の天候、日差しの方角等あらゆる撮影環境に最善を尽くして撮影されている様子に感得した。私たちの仕事はこのような専門的な写真撮影ではなく、発掘の状況の記録写真なので高い技術は要求されない。しかし、発掘作業に携わる会員や発掘調査員等の活動状況の写真は、唯一無二の記録でもあり、後世へ残すべき貴重な資料である。まさに「克明な記録」であり「写真そのものが文化財」であるという認識を持つ必要があることを、サブリーダーと事前確認した。今後、今回のような体制で発掘作業に取り組まれる全国の仲間の参考になることを願っている。

リーダー・サブリーダー会での事前打合せでは、次のことを確認した。

①できるだけ漏れのない発掘作業記録の写真とする。

基本的にはリーダー、サブリーダーが撮影する。撮影欠損日が生じないように、3名がいなかった場合は他の班員が、それでもいない場合は他の班に事前に依頼する。撮影の失敗があっても、撮影日がない日がないように発掘全日程を撮影する。

②停止画像だけでなく、今後の記録映画作成機会を目指して、短時間でも音声を記録した動画撮影も取り入れる。音声はその時点の状況がよくわかり、記録の確認にとって重要なので出来るだけ動画でも残す。

③毎日の記録写真は、朝のミーティング、初参加者へのガイダンス状況、発掘作業の開始時、中盤、昼食時、後半、終盤、成果報告会等、可能な限り網羅的に撮影する。

④後に続く全国の仲間の参考となるように、発掘作業のステップごとの記録写真としてまとめられるよう、簡単な記録をメモとして残しながら撮影する。

なお、各自のデジタルカメラだけでは不安があり、新谷調査員に依頼して調査写真専用のデジタルカメラを1台準備いただいた。これが最後まで役に立った。

⑤撮影した写真は、リーダーがその日のうちに整理して撮影期日とファイル名を付けてパソコンと

USBに保存する。不在の時は後日撮影者で処理した後、リーダーに渡す。

記録（広報）班では、毎日の必要事項をメモ帳に書き留めた。誰かが都合で欠席する場合は、前日に翌日の担当を決めることで、毎日の作業の様子を欠かすことなく記録していった。書き留める内容は、その日の発掘の目標や朝のミーティングから始まる時間軸に沿った発掘の様子や特記事項、そして調査員による成果発表会などであった。帰宅後、大学ノートに殴り書きした判別しにくい文字を解読しながら記録処理する作業は大変であった。

発掘の終盤ともなれば、トレンチの深掘りも毎日のごとくで、新たなトレンチの延長ともなれば木の根っこの除去作業も増えるため、発掘班だけでは足りず記録班も加入することになり、サブリーダーの梶上氏や橘高氏は発掘担当個所を任されることも増えた。もちろん私も「奥田リーダーはトレンチの壁をきれいに掘り出すことができるね！」などと調査員におだてられ、記録もそこそこに本気で発掘したものだから、しだいにその日の疲れが蓄積して疲労困憊で、自宅での記録処理中に眠気に誘われることもしばしばであった。ともあれ、発掘作業記録を続けた結果、毎日の特記事項として整理することができた。方法はどうあれ、記録を留めることの大切さを痛感した。



作業の様子をメモ

記録（広報）班のもう一つの役割に、④一般見学者の対応、⑤地域住民や市民に向けての広報活動がある。

一般見学者対応とは、県内外から見学にお越しいただいた古墳発掘に興味や関心をお持ちの方へ、私



一般見学者への説明

たちの発掘作業の様子を説明することである。発掘作業の一般参加者に対して荒木山東塚・西塚のガイダンスを行うことも、この④の中に含めた。素人の地域住民が取り組む発掘作業は近年では稀有のことなので注目も集まり、話題性も高いということで、記録（広報）班の重要な任務の一つともいえる。

ただ、いつ見学依頼があるかわからないため、対応者の一本化を決めた。結局、リーダーを主担当とし、場合によりサブリーダーで対応することにした。説明

内容は次のとおりである。

- ①荒木山東塚・西塚古墳の他、北房の古墳時代の主な古墳の説明やその時代背景も伝える。
- ②荒木山西塚古墳の発掘の意義・目的、そして私たちのめざす地域の文化遺産の保護や活用等について理解いただく。
- ③2年間に及ぶ発掘調査の組織的取り組みや、それに関わる北房文化遺産保存会の思いや願い、また、現在の課題・今後の希望なども含めて伝え、できれば一人でも多くの入会や発掘の仲間を募る機会とする。

一般参加者のガイダンスでは、短時間での興味関心を含めてレディネス形成（心身の準備）が求められる。発掘班リーダーに迷惑がかかるほど説明するわけにもいかず、かといって興味をそそるよ



パネルを活用したガイダンス

うな説明も必要である。話が横道にそれると、つい時間超過もあった。

調査員と相談してガイダンス用の資料を一般参加者用、児童・生徒用、そして発掘担当者用を作成配布し、ガイダンスを行った。文字資料だと限界があるので見える化が必要と思い、自作パネルも数枚作成して持ち歩いた。実物を前にしても、その背景を知ってもらうためにはそれなりの資料が求められることは、実際にガイダンスをしてみて感じた。見える化の自作パネルは有効であった。

【記録(広報)班リーダー 奥田健治】

遺物・機材班

第1次発掘調査が始まる前日、早朝から目が覚めた。とても、ゆっくり寝ていられるような心境ではなかった。発掘に必要な道具やテント、土嚢袋、そうじ用具などの準備はほぼ終わっていたが、どうにも落ち着かない。市教委の道具と同志社大学の津村先生がそろえた道具が混じらないようにだけ気を付けて初日を迎えた。

一度、近くの英賀公園内の斜面で予行演習をしていたが、はけや竹べらはまだしも、「ガリ」や「バチ」といった発掘でしか使わないような道具の呼び名を心の中で繰り返しながら、トレンチを伸ばす荒木山西塚の墳頂を見上げた。

いざ発掘が始まると無我夢中だった。毎朝、ミーティングで、休憩に入るときは道具を伏せておき、踏んでけがをしないようにと徹底して、ひたすら掘り、土をふるいにかけた。中には、柄がすぐ抜けるバチや、割れて使いものにならない手箕もあった。トレンチを掘り進むうち、両側の壁や底の根を切るのに使うはさみは、土をかむため、すぐに切れ味が落ちた。がまんして作業を続けても、ペースはなかなか上がらない。刃を研ぐ心得のある参加者が折をみて研いだり、新しいものを買足したりした。大きな木の根を切る個人装備のチェーンソーも、こまめに手入れをしないと切れなくなった。



遺物・機材班の説明(ミーティング)



土器片の洗浄作業

遺物の面から言うと、土器片らしいものを丁寧に洗い、ブラシでたたくようにして土を落としていった。11月に始まった発掘は12月に入って寒さがつり、この作業が最もつらかった。土器片らしきものを手のひらにのせて洗うとき、台所用のゴム手袋が必需品になった。怪しい土器片？は市教委の新谷さんに見てもらったが、9割以上「これはただの石です」と無情の判定。「残念石」の山が目付きにくい所にできた。ただ、小、中学生が参加したときはその場では明確に判定せず、後でこっそり捨てるという一幕もあった。

正月をはさんで作業を一時中断するとき、トレンチにブルーシートをかぶせた。このころ、雪が積もる日もあったが、雪が解けて水がシートの中に深さ20cmくらいたまることがあった。それをくみだすひしゃくが2、3本必要となった。想定外だった。

作業が再開されてからは会員の習熟度が上がり、一般参加者も交え

て一段とペースアップした。時折、「おっ」と声が上がり、原形をとどめたつぼが出土することもあった。一方で慣れから気の緩みも生じ、厳しい寒さで滑り止めの土嚢が凍って歩きにくくなり、墳丘斜面に足をついたとたん、転ぶ人がいた。けが人が出なかったのは幸いだった。

全体に出土品の数は多くなかったが、石列が確認でき、現地説明会も盛況で、1次発掘調査での作業は大きな自信となった。

第2次発掘調査では滑りやすい斜面に階段を設置したこともあって、作業は順調で、トレンチの数を増やしたにもかかわらず、かなりのスピードで発掘が進んだ。会員はもとより一般参加者の習熟度も上がった。機材のメンテナンスは必ずしも十分ではなかったが、慣れでカバーできたと思う。

機材の準備や管理、遺物の大まかな判別など、始まる前は不安の方が大きかったが、乗り越えられないハードルではなかった。発掘終了後、トレンチを埋め戻したとき、一区切りという思いはあったが、これで終わりという気はしなかった。また機会があれば、ふるいの中から「おっ」と声の出るような土器片を取り上げてみたい。

【遺物・機材班リーダー 小林展弘】

生活・安全班（第1次発掘調査）

荒木山西塚古墳の発掘調査に取り掛かることになり、保存会では示された役割分担や各作業班の仕事内容表等をもとに5つの班を編制した。そして、役員・会員の中からリーダーやサブリーダーを選び、



生活・安全班の説明（ミーティング）

担当の班員を割り振っていった。私は生活・安全班担当のリーダーとなった。しかし、具体的な仕事内容となると全くの手探り状態だった。思いつくもの・思いついたことからの取り組みとなった。発掘現場への通路、その他について危険箇所にはテープを張ったり、穴を埋めたり、滑り易い箇所への筵敷きなど、安全管理面の手立て。怪我や体調不良者があった場合に対応する「緊急時連絡先」を作成しての危機管理の手立て。また、抜け落ちが出ないようにと仕事内容と分担、留意事項を載せた「現場（山）作業チェック表」の作成（資料30）。（号令・注意・鍵、トイレ、ゴミなど）責任を持って取り組んでもらうため、班員の出欠状況を一覧にして、ミーティングの司会などを割り振ったり、作業を落ちなく進めるために現場関係と英賀公園（P3図参照）にあるクラブハウスの「平地作業チェック表」（資料31）を作成したりと作業内容に関しての手立ても。班員の誰でもできるようにとミー

ティングの司会進行や安全関係の注意事項を載せた「ミーティングの司会・進行」など（資料32、33、34）も作成した。

班の活動は、山の現場とクラブハウスに分けた。クラブハウスについては山の発掘作業がきついからと自主的に回られた班員を中心に担当とした。昼食時には、山から1、2名が応援した。

生活・安全班には、タイムキーパーの役目があり、時間が来ると「休憩」や「作業開始」の号令を掛けた。その担当になると、時間が気になりながらの発掘作業となったが、つい作業に夢中になり過ぎて号



令が遅れそうになったこともあった。

発掘作業開始からの8日間は保存会員と駒澤大学大学院生だけで作業を行った。会員にとって発掘技術と進め方のノウハウを習得することができ、大きな自信となった。それだけでなく、一般参加者を迎えるための環境を整えるための試行期間ともなった。

当初の休憩時間10分では、トイレの時間もままならず、山を下って駐車場奥に設置の簡易トイレに行くとそれだけで終わってしまうことも分かった。そこで、休憩時間を20分に延長した。また、当初1基だけだった簡易トイレも1基増設し、男女別のトイレとした。



駒澤大学大学院生発掘作業最終日

第1次発掘調査の作業もほぼ終わりにかけた3月初め、何事も無く終了しそうだで一安心をしかけた頃だった。ガイダンスを終えた一般参加者が、作業開始前に体調不良になった。その日に限り、緊急連絡表を下の駐車場のテントに置いてきたままで、119番等への連絡が少しもたついてしまった。幸い大事に至らなかったが、災害は忘れた頃にといわれる。油断大敵、大いに反省する出来事であった。その日は少し暖かい日で、墳頂で待機していたことも不適切ではなかった。とは言え、寒い冬場であり、待機場所としてすぐ利用で

きる場所へのテント設営（西塚古墳の近くは作業や土嚢置き場が必要で、設営場所がとれず東塚古墳付近となっていた。）や防寒用の毛布等の用意等、次年度への課題も明らかになった。

係を担った保存会や、遠くから熱意を持っての一般参加者の協力により、無事発掘調査が終了した3月中旬、ほっと一息つくとともに、次年度の調査に向けて気分を新たにしたものだった。

第1次発掘調査の反省から第2次発掘調査は、作業開始時間が9時30分から9時45分に。クラブハウスの関係では、床面が汚れないようにと1年次は、段ボールを敷いての使用だったが、2年次はスリッパを用意し、段ボールを敷く必要を無くした。いろいろな面で修正を加えながらの取り組みだった。

【生活・安全班リーダー 畦田正博】



ふるい掛け作業

生活・安全班(第2次発掘調査)

40数年前に、北房町内の古墳の発掘をしていた学芸員の人から、「荒木山の古墳は有数の史跡で埋蔵品が多いと思われるが、発掘の許可は難しい。」と聞いていた。

今回、トレンチ調査とはいえ、発掘調査ができることになったことに驚いた。しかし、その発掘方法は、あまり前例がない市民団体が主体となって発掘するというので、不安を感じていた。しかしその後、市教委、振興局、同志社大学、そして私たち保存会による「西の明日香村コンソーシアム」で推進することになり、指導を得ながら進められる体制が整い安心した。

そして、私たち保存会が中心となって、発掘作業を進行する役割を担うことになった。令和4年度、私は案内・庶務班のサブリーダーを担当し、参加者の受付や連絡調整に当たっていたが、生活・安全班リーダーの畦田正博氏が保存会会長として業務の総括を務められることになったため、令和5年度から



生活・安全班の説明（ミーティング）

生活・安全班のリーダーとなった。当初は引き継いだ、「ミーティングの司会・進行」などを頼りに司会等に当たったが、日により調査員が変わることや一般参加者の作業がある日、無い日などで進行が変わるため、とまどったこともあった。作業手順としては、トイレの清掃や水の補給、朝のミーティングの司会や作業の安全を確保するための注意事項を説明、緊急時の対応手順などを現場に表示するといった業務があった。

第1次発掘調査では、発掘現場で作業を開始する前に、一般参加者が体調不良を訴えられ、消防署に救急車を要請、現場の山から担

架で下ろし、病院に搬送したことがあった。そのため、「緊急対応マニュアル」や「心肺蘇生法の手順」を作成し、参加者に周知し、緊急の場合に備えて発掘現場にテントを設け、マニュアルや救急毛布などを備え付けた。現場が雨や雪でぬかるんだりして転倒や滑落の心配もあったが参加者の協力により、幸い事故等の発生はなく安堵した。

また、作業現場のタイムキーパーとして、作業の開始・終了と休憩の開始・終了の号令、作業終了後に行われる成果報告会の進行业務があったが、発掘作業に夢中になり、休憩時間開始の号令が遅れることも多々あった。

作業を休む時は、班員が協力して交替で業務に当たった。集合、解散ミーティングを行うテント場と山の発掘現場のほか、昼食・休憩場所の英賀公園にあるクラブハウスの管理業務もあり、女性の班員の協力で、11時ごろから開錠した。お茶やストーブの準備、注文のあった弁当の配置などの作業や休憩が終わると、湯茶の片付け、ストーブの消火から弁当の空き容器の片づけなどに当たっていただいた。また、作業終了後は、集合テントやクラブハウス、調査員の休憩・昼食場所である「老人憩いの家」の弁当容器等のごみを振興局のごみ置き場に運ぶ業務もあった。

寒い時期で作業期間も長かったが、現場がぬかるむ中で、全員が泥んこで作業をすることもあった。しかし、保存会員や一般参加者の熱意や協力により、無事に終了でき、今では良き思い出となっている。初の非破壊探査から発掘まで長く、発掘の運営に携わることも初めてであり、不安であったが市教委や同志社大学の指導により、何とか務められたものと思っている。

発掘の成果としては、埋蔵品が多くあると思われる主体部の発掘ではなかったが、古墳時代前期の小型丸底壺や弥生土器片が出土したことは、作業している我々には喜びであった。また、後半になって西塚と東塚との間にある高まりから古墳時代の鉄斧や赤色顔料など、初めて見るものが出土したことは驚きであり、ロマンを感じた。今後、調査が進むことを期待している。

【生活・安全班リーダー 上谷仁志】



上水田第一老人憩いの家

案内・庶務班

発掘調査にあたり、令和4年（2022年）10月19日（水）に「北房文化遺産保存会総決起集会ーフロンタラナーズ会議ー」を開催して機運の醸成に努めるとともに、会員の参加調査を行った。

案内・庶務班の仕事は、発掘調査開始前の準備から始まり、保存会員の参加調査、集合場所の仮設トイレ設置、お昼の休憩場所（英賀公園のクラブハウス）でのお茶の準備等があった。また、保存会の窓口として振興局・市教委等との連絡調整、一般参加者の出席・欠席の受付、参加者の宿泊施設の案内・弁当の注文・支払、さらに、発掘調査当日の天候による中止の判断、中止の場合は参加者への連絡、受付の際の参加者名簿の作成、発掘調査を長期に行わない期間の「見回り編成表」（資料35 振興局作成「見回りチェック表」資料36）の作成も行った。

保存会員の参加調査は、令和4年度と令和5年度の2回行った、令和4年度は会員用の控を準備していなかったため、令和5年度は「会員控」を送って参加者が忘れないように配慮した。令和4年度は、北房地域の会員が主体で作業に当たってきたが、令和5年度は高齢化と腰痛等の離脱に伴い、北房地域の会員の参加が少なくなった。

集合場所の仮設トイレの設置は、当初1基だけ設置していたが、女性の参加者に配慮して、「男性用」「女性用」の2基設置した。

お昼の休憩場所では、事前にストーブの灯油・お茶・コーヒー・トイレットペーパーを購入し、コロナ感染予防のためのパーティションの設置も行った。発掘調査当日は、班メンバーには午前11時30分から、休憩場所のお茶等の準備のために早めに作業を切り上げてもらった。

また、保存会の窓口として、市教委・振興局・同志社大学等との「西の明日香村コンソーシアム会議」の開催、発掘調査作業中止等の判断、および連絡調整を行った。

保存会員・一般参加者の発掘調査当日の「スケジュール表」（資料29）作成においては、特に発掘班のリーダーとは常に出席・欠席の連絡を取り合っていたが、参加者から前日あるいは当日に欠席連絡が入ることもあり、スケジュール表の変更作業ではご迷惑をおかけした。

参加者にはペットボトルのお茶を受付で提供した。また、会員は青色、一般参加者には黄色のヘルメットを着用してもらい、誰もがすぐに判別できるようにした。

参加者の弁当の注文および宿泊施設紹介では、北房地域の4業者に事前をお願いした。令和4年度は弁当とお茶を800円で準備したが、休憩場所でお茶の接待があるため、令和5年度は弁当のみを700円で手配した。宿泊施設の利用者は少数であった。

当日の作業実施・中止の判断については、振興局の担当者と連絡と取り合い、中止の場合は遠方からの参加者のために、午前7時までには連絡するように心がけた。

事前の参加調査により、当日の参加者名簿を作成していたので、受付時間を過ぎても来ない参加者には連絡して出欠の確認をした。受付時には、弁当注文者の弁当代の徴収も併せて行ったが、多くの保存会員にお世話になった。

会員募集の取り組みは、お昼の休憩場所でも積極的に行った。一般参加者は歴史好きという面で共通の話題もあり、令和7年1月現在で会員75名のうち、北房地域以外は岡山市14名、倉敷市6名、



案内・庶務班の説明（ミーティング）

津山市4名、高梁市2名、総社市1名、笠岡市1名、真庭市5名の計33名となっている。

発掘調査に参加していただいた県内の多くの皆さんとの交流もできて、西の明日香村北房の宣伝もできたと思っている。

最後になりましたが、荒木山東塚・西塚古墳主体部の発掘調査が行われることを願っています。

【案内・庶務班リーダー 志田浩一】

(3)北房文化遺産保存会員・一般参加者寄稿

●第1次発掘調査に参加して

保存会員 山崎和光

私は、遺物・機材班サブリーダーとして、発掘のための用具や器具の準備・片付け・修理などを担当した。ふるい掛けの準備はほぼ毎回行い、ふるい掛けが順調に進み出すと、発掘作業も担当した。

朝の打ち合わせの後、まず用具等の準備・点検を行い、それが一段落すると、次にふるい掛けのセッティングを行った。

実際にふるい掛けの作業を始めてみて、この作業の重要性を実感することが

できた。この作業は、発掘作業により出てきた土や砂などを全てふるいに掛け、土器の破片などが混ざっていないか極力見落としがないよう注意深く確認し、土器片が出土した場所を誤りなく特定する作業からである。したがって、注意深く選別するとともに土器片らしきものが見つかったら、疑わしいものも

含めて全て取り上げるように努めた。また、場所の特定も誤りがないように留意するなど、担当者全員でこのことを確認し合いながら作業を行うよう努めた。

一方、発掘作業は事前に指導を受けて練習を行っていたため、比較的順調に取り組むことができたように思う。

数日後、県内から一般の方も参加して大勢で取り組めるようになった。ただ、古墳の発掘は初めてという人がほとんどで、最初はみなさん不慣れな様子だった。しかし、だんだんと手順がわかってくると、積極的に取り組まれていた。



ふるい掛け作業

さらに、小学生から大学生まで多くの若い方々の参加があり、興味をもって真剣に取り組まれた。そして、土器や破片を掘り出したり発見したりして、笑顔でその時の状況を話しておられる様子を見ると、周りの人もその時の状況を確認しながら、皆でその喜びを分かち合うことができた。

こうして、第1次発掘調査を通して古墳の発掘の基本的な要領を理解し実践するとともに、参加者の層が地域的にもまた年代的にも、これまでと比べて大きく広がったことを実感することができた。



作業準備(トレンチ2 ブルーシートの片付け)

●荒木山に来て、見て、知ったこと ～発掘作業に参加して～

一般参加者・現保存会員 延原 泉（岡山市）

北房は知らない土地ではなかった。でも実は知らないことだらけだった。

以前から、旧知の方に古墳の発掘のことを聞いていたので、新聞と真庭市のホームページで発掘ボランティアの募集案内を見てすぐに応募用紙をダウンロードし、募集の日すべてに○をつけてFAXを送った。何日参加できるだろうとワクワクして待っていたが、決定したのは2月に2日間だけだった。何となく全日参加できるだろうくらいに思っていたので、古代史ファンや発掘に興味のある人が多いことに驚いた。

ー参加1日目ー

片道90分。初めての場所だったが、ポイントと思われる所に案内の看板があり、迷うことなく到着した。受付でお茶と黄色いヘルメットを受け取り、養生テープに名前と血液型を書いて後ろ頭の側に貼る。自分の中で発掘は、「ヘラのようなものを持って整地されている地面を」というイメージだったの



令和5年(2023年)2月17日のミーティング

で、ヘルメット?! しかも血液型まで?! と、またまた驚く。当日の一般参加者は7名、そのうち初回の参加者は、まずその場で古墳の概要について説明を受けた後、坂道を上がって現地へ。そこでまた、実際に掘る西塚ではない東塚古墳についての説明を聞く。

そして、いよいよ作業へ。用

意されていた道具は、バチ、ガリ、移植ごて、大小の鋏^{はさみ}。それらがオレンジ色の手箕^{てみ}にきれいに並べられている。この道具で、どこをどのように? と、思っていたが、最初はトレンチと呼ばれる箇所^{てみ}に張られた、黄色いタフロープに沿って何人かが並び、スコップで地面を掘ることから始まった。それから休憩をはさみ^{はさみ}、今度は15cm程に掘り下げられた箇所を、木の根を鋏で切り、バチやガリを使って掘ったり削ったり。時々立って腰を伸ばしつつの作業。発掘というよりは、本当に土を掘る土木作業だなと思いつつ、午前中の作業が終わった。作業外の時間には道具は手箕^{てみ}の中にきちんと並べておくように、最初のオリエンテーションの時も作業開始時も、休憩に入る時も、その都度指示があった。安全に対する配慮、作業効率のことを考えれば当然のことだが、実際に道具を使ってみてその重要性を感じた。

クラブハウスでの昼休憩。ストーブで暖められた場所に、熱い番茶が用意されていた。注文していた弁当を食べながら、聞くともなくそこで交わされる会話が耳に入ってくる。北房のこと、保存会のこと、古墳のこと、他の文化遺産をどうするか等、地元の方の思いや、いろいろな話が交錯していた。時々、一般参加者にもさりげなく声をかけてくださるのが嬉しい。食事を終えて、外でぼんやり周りを眺めていたら、いつの間にかそばに立っていらした方が、「あっちの山は○○で、こっちの小高いところは□□で」とたくさんのことを教えてくださった。知っているようで知らなかった北房。250基ものたくさんの古墳がある町だった。

午後の作業は午前中とは別の、手箕^{てみ}に入れられたたくさんの土を、ふるいのある場所に運んだり、時にはふるいにかけてりする作業だった。何も出なかった残りの土を土嚢袋^{ど のうぶくろ}に詰めて指定の場所に運ぶ。またまた想像もしていなかった力仕事だった。凍みていた地面がだんだん溶けてぬかるんでいる。足元

に気を付けながら、転ばないようにと思いながらの作業。土嚢が所々に置いてあり滑り止めになっている。ここでも安全に対する配慮を感じる。この日は古墳時代からはずっと後の時代の寛永通宝が発見された。お供えだったのか？ お墓はいつの時代もお墓なのかと思うと、少しおかしかった。



トレンチ2の掘り下げ作業

午後の作業が終了し、テントのある集合場所へ降りる。途中、靴についた泥を落とせる場所もあった。草地に大きい石が数個あるだけの場所だったけれど、民家の傍を通らせていただくことへの配慮なのだろう。そして、着いてからその日の日報を書いた。今にして思えば、「卑弥呼のロマンを感じた」とか、「しんどかったけれど楽しかった」とかだけでなく、具体的な作業内容についてきちんと書けばよかったと反省している。係の方は「大丈夫、ここで皆さんがこの紙に記入してくださることが貴重な記録になるから」と言ってくれたけれど、もう少し書きようがあったなと思っている。一緒に参加した人と「現地説明会でまた会いましょう」と話して別れ、なかなかハードだった1日が終わった。

ー参加2日目ー

2回目ということで、説明は聞かずにすぐに現地へ向かう。午前中は掘り下げの作業、午後はふるいの作業だった。間の何日かの作業で、トレンチは深くきれいになっているように見えた。土の量も増え、ふるい場が渋滞する。



弥生土器片出土

この日、地元北房小学校の6年生の児童が体験学習に来ていた。ヘルメットをかぶり、ぬかるむ地面に足を取られそうになりながらも、掘ったり運んだりふるったり、洗ったり。いろいろなことに取り組んでいた。なんて貴重な体験ができているのだろう。この子ども達の中から、将来考古学者になったり、北房の文化遺産を守る仕事をしたりする人が出てくるのかもしれない。人の思いや町の歴史はそうやって未来につながっていくのだろう。思えば半世紀前、同じ小学校6年生だった私は、卒業文集に「いつか野尻湖でナウマンゾウの骨を掘ってみたい」と書いたのを覚えている。今、そのような体験ができているこの子たちが少しうらやましい。

午後の時間の途中、声をかけられて、出てきた土器のかけらと思われるものを洗う作業をさせてもらった。断面に層ができていて、その中が黒かったら焼いているということだからと教えていただいた。表面は少し強めにブラシをかけて泥を落とし、断面は傷つけないようにより丁寧にと気を付けながら。手袋を外した指先はすこしばかり冷たく、地面がぬかるんでいて膝をつくことができないので、中腰のややしんどい姿勢ではあったけれど、少しだけ自分の思っていた発掘作業のビジュアルな感じがした。

作業の終盤ごろ、同じトレンチの、自分が掘っていた場所から少し離れた所から、逆さま状態の丸型壺の底が発見された。応援の大学院生のそれを掘る様子は、大胆な様で、それでいて細かく、思わず見

入ってしまった。

そうこうしているうちに2日目の作業も終わり、この日もまた具体的なことは何も書けず、発掘ハイ状態での感想のみを日報に書いて全てが終了した。

水色のヘルメットをかぶって、会の運営をされていた北房文化遺産保存会の皆様には本当にお世話になった。受付、オリエンテーションや、現地での発掘の全般、道具の使い方・片づけ方の説明等々、そう多くもない人数で多方面に気を配って、一般参加者をフォローしつつ、肝心の発掘作業も進めていかれる姿には感心しきりだった。皆さんが決してその道のプロではないことを伺って、またびっくりする。発掘の仕方についても、レクチャーを受けて実際に掘る練習はほぼ1度だったようなお話は、昼食時間に小耳にはさんだことの一つだ。なのに、何を尋ねても快く教えてくださったり、掘り方を丁寧に説明してくださったり。ヘルメットを見てか、気さくに名前を呼んで声をかけていただいたこともありがたかった。

他にも白いヘルメットの同志社大学の先生や学生の皆さん、市教委や振興局など地域行政の方々。(1日目の段階では、とてもそのあたりのことまでは理解が追いつかなかったけれど)多くの方の熱意と努力で、荒木山の古墳が、また日の目を見ようとしている奇跡に感動すら覚える。一緒に初めての発掘作業を体験した何人かの人とも、後日の現地説明会で再会して、自分たちの一掘り、一削りは微々たるものだったけれど、こんなにすごい成果があったんだと喜び合った。そう、自分にとってこの2日間は、多くの人と出会い、学ぶ喜びを思い起こし、たくさんのことに気づくことのできた貴重な時間だった。

いろいろな人の思いが集まって、荒木山の古墳が、古墳群として輝きを放とうとしている。発掘作業そのものは、北房の歴史や、遺産を後世に伝え、魅力ある町づくりをするという目的のための、一つの、そして不可欠な手段なのだろう。

「古墳を掘れる」という魅力に引き寄せられて、荒木山に来て、見て、多くのことを知ることができた。この事業が、今後、行政主導という形に変わり、北房ってこんな町なんだよ、文化にあふれた愛すべき故郷なんだよとして認知され、続いていくための太い幹となって存続していくことを心から願っている。



土器片洗浄作業

●まだ見ぬ北房の姿

一般参加者 森田陽介(真庭市)



私は、中学校で配られたプリントをきっかけに、荒木山西塚古墳の発掘調査を知りました。小学生のときに学校で北房の古墳について学んで以来、「なぜ北房にはこんなに古墳が多いのだろう?」と気になっていたもので、この発掘調査に参加することにしました。

実際に参加してみると、発掘が進むたびにさまざまな発見や解明があり、とてもワクワクしました。たとえそれが専門家にとっては予想通りの結果だったとしても、私にとっては知らなかった北房の一面を知ることができ、とても楽しかったです。また参加者の中には、北房に長年住んでいる方もい

て、昔の北房についてのお話を聞くことができたのも貴重な体験でした。

まだまだ北房について知りたいことがたくさんあるので、またこのようなイベントがあれば、ぜひ参加したいと思っています。

●ワクワク発掘体験

一般参加者 大田 恵（倉敷市）

山陽新聞に一般参加者募集の記事があり、家族で発掘調査の経験をさせていただけるとの事で応募しました。

TVで見るような光景が広がる中、調査員や保存会の皆様方が丁寧に御指導してくださいました。「お宝はあるかな？」とワクワクしながら土を掘り下げ、ふるいを掛ける作業の中でいくつかの土器を発見する事ができました。

はるか昔の遺物を肌で感じた事で、荒木山西塚古墳発掘調査の成果も含め、今後も北房の歴史文化に親しみ、学びたいと思いました。

あたたかく迎えてくださいました調査員・保存会の皆様、大変貴重な体験をさせていただきありがとうございました。



●古墳掘る(その1)

保存会員 天野光暉

三つほど古墳を抱き山眠る

墳頂のまともに受ける北の風

日輪の影のへんぺん枯木立

風寒し発掘バチとガリで足る

枯草を剥いで古墳の土削る

古墳掘る又も邪魔する落葉かな

積み上ぐる土嚢の重し冬ざるる

土嚢に座ししばらく休む片時雨

陶片の赤き色なり風寒し

陶片を洗ふ手先の冷たさよ

染めきらぬ木の葉が顔に北しぶき

裸木に少しの間あり古墳掘る

北風や地山の土のまだ見えぬ

古墳へと向かふ山路春の泥

うららかや墳土削るも何ものなし

春光や振るひに残る石ばかり

佇むと芽吹く雑木の匂ひけり



注記：バチ、ガリ…発掘作業で使う道具（P173参照）

陶片を洗ふ手先の冷たさよ

●第1次発掘調査ふりかえり

保存会員 三輪能章（真庭市）

今回の発掘調査は令和4年11月26日から令和5年3月12日までの第1次発掘調査に始まり、令和5年11月25日から令和6年3月16日までの第2次発掘調査の2ヵ年度の計画でした。プロジェクト決定当時は、発掘作業を経験している会員はほとんどいませんでした。私もその一人でした。令和4年4月の英賀公園内斜面での発掘予行演習、同5月は古見地内の戸坂B遺跡発掘調査現場研修を経験しましたが、体力的にも技術的にも大変な作業だと改めて感じました。一方、道具の名前と使い方・作業の工程など事前に調べましたが、実際の現場での作業になると戸惑うばかりでした。そして約半年後、第1次発掘調査がスタートしました。

発掘作業は、調査員の市教委新谷主幹が設定したトレンチの表土から掘下げていきます。幅1メートルで掘り下げますが、山中のため大小の根が至る所から邪魔をします。根を切りながら掘り進めると、土の色が変わり表土から土層に変わります。さらに土層から地山まで掘り進むと土層の色が各層で変化します。その変化を確認するため掘下げた両側の面は、トレンチ幅に沿って垂直にそろえ土層がわかるようにします（壁出し）。各土層の中から遺物が出土しますが、それらが土層の年代特定につながります。次に掘下げで出た土を入れた手箕^{てみ}をふるいまで運ぶ人、ふるいにかけて遺物確認する人、土嚢袋^{どのおぶくろ}に詰め指定場所に積み上げる人、そのどれも重労働です。これらの連続作業が基本でした。



トレンチ1 墳頂付近の急斜面作業

後円部の墳端とそこから墳頂へ向かう斜面をトレンチ1、後円部墳端から東塚に向かう傾斜をトレンチ2に設定されました。初日、私はトレンチ1の斜面掘下げを担当しましたが、急傾斜のため足場が安定せず、思うように表土剥ぎが進みませんでした。何とか土嚢袋をトレンチの周りに置き、斜面に横たわるようにして掘りました。しかし、不安定な体勢は変わらず、掘った土を手箕^{てみ}に入れるのも

一苦勞で、その手箕も滑り落ちるといふ斜面での作業でした。そこで墳頂にある大木に長いロープをくくり、それを伝って斜面を上り下りすることになりました。

私達発掘初心者に大きな力を与えてくれたのが、発掘調査初日から参加の駒沢大学大学院寺前教授のゼミの学生6名でした。彼らのうち数名が、トレンチ1にきて、土嚢袋を手際よく並べ、手箕を置く場所を作ってくれました。表土剥ぎ、土層の掘り下げ作業では、彼らからガリをはじめ道具の使い方、壁出しの方法などを学びました。

トレンチ斜面の中ほどで、ガリが何か固いものに当たりました。トレンチの横壁に入り込んでいる石灰岩のようでした。早速、調査員の市教委新谷主幹を呼び、見てもらいました。明日からは、この石を中心に幅40cm、長さ3mのサブトレンチを設定し、掘下げることになりました。そして、トレンチ1の斜面は、学生が石の周りの壁出しを行うことになりました。トレンチ1の斜面は、その後墳頂まで延長されました。時々見に行きましたが、学生が壁出しとトレンチ表面を綺麗に仕上げていました。学生たちは第1次の前期に8日間、人数は減ったものの後期に7日間参加しました。作業後の成果報告会では、博士課程の鈴木氏に分かりやすく説明していただき、大変有意義でした。彼らの発掘作業に取り組む姿勢と知識は、私たちの大きな力となり感謝あるのみです。

その後、トレンチ2の東塚に向かう傾斜の掘下げを担当しました。ここでは墳端部から長さ15m、

幅1m幅の表土剥ぎと、その内側に幅50cmのサブトレンチを深堀して地山を出す作業でした。表土剥ぎの後、傾斜の頂上までサブトレンチを延長し深堀しました。サブトレンチに身体を入れ深堀と壁出しをしながら進みましたが、相変わらず大小の根が邪魔をしてきます。頂上に近づくほどサブトレンチの地山までが深くなって根が太くなります。津村先生が推察しているとおり古墳であるなら、斜面頂上付近には何らかの遺構の可能性があります。



トレンチ2 根切り作業

第1次発掘調査の最終盤は、3月4日の現地説明会の準備と発掘作業でした。トレンチ2の墳端拡張部から土器（壺2点）と多くの礫が出土し、また墳端には石列がはっきり並んでいました。このトレン



令和5年(2023年)3月4日 現地説明会 トレンチ2の説明

チ2の墳端と拡張部の壁出しと遺構の整理があり、傾斜の掘下げは津村先生が中心となって作業していました。

現地説明会直前3月2日に、津村先生が傾斜頂上部近くで鉄斧^{てつぷ}を発見しました。そしてトレンチ2の傾斜頂上部から、直交右折で4mの拡張となりました。現地説明会后、延長部分を掘るものの、大木が傍にあり、太い根を取り除く作業に手間取りました。チェーンソー、のこ

のみなどが活躍しました。この部分は第2次発掘調査に持ち越しましたが、第2次発掘調査で埋葬主体を確認し、朱色の土も発見されました。この高まりは人工的であり埋葬主体の遺構が確認され、新たな古墳の存在が明らかになりました。第1次発掘調査の成果として、墳丘・墳端の構造と遺構が確認されました。また西塚北側の高まりが人工的であり、出土遺物により古墳の可能性が高まりました。

最終作業は各トレンチの平面図・断面図を作成のため画像撮影と測量を津村先生と新谷主幹が行いました。

最後は埋め戻しです。大量の土嚢の中から土を出し、全部トレンチに入れ発掘前の状態にする作業です。土嚢は水分を含んでかなりの重量があり、これだけの土をよく掘ったものだと思いますトレンチに戻します。

さて、一般参加の方々は重労働作業などもあったでしょうが、積極的に活動していただきました。予定通りの日程で発掘調査完了となり、ご協力に感謝いたします。

北房小学校・中学校の生徒たちも、発掘



トレンチ2の埋戻し作業

現場を見学し作業を手伝ってくれました。北房の文化遺産「荒木山西塚古墳」の発掘体験を、いつまでも忘れずにいてください。

おわりに、旧北房町内で埋蔵文化財の発掘調査が行われたのは、半世紀前の中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査でした。谷尻遺跡発掘調査では、縄文時代から古墳時代の大型住居跡や埋蔵物が多く発見されました。それから半世紀後、官・民・学による荒木山西塚古墳発掘作業が無事終了しました。関係者の皆様に感謝いたします。

●荒木山西塚古墳の発掘から得た学びと繋がり

一般参加者・現保存会員 板東郁仁(岡山市)

「北房といえば古墳」。僕がこう感じ始めたのは、小学4年生の時だ。古墳にハマってから4か月が経った頃だった。その頃、初めて大谷1号墳や定西塚・東塚古墳、定北古墳を見学し、知識が乏しいながらも、独特なピラミッド状の外護列石や、美しく加工された切石で築かれた石室の魅力に触れることができた。

その後も何度か古墳見学に北房を訪れ、令和4年(2022年)には北房文化センターで開催された講演会「荒木山古墳の時代」で初めて荒木山西塚古墳や北房文化遺産保存会の存在を知った。また、この講演会で、日本の考古学の権威であった松木武彦先生と初めてお会いして、お話しさせていただいた。1年後に僕が自費出版することになる『岡山100名墳』(報道記事26)のプロトタイプも見て頂き、出版や今後の古墳についての活動を後押ししてくださった。

その後、荒木山西塚古墳の発掘調査が市民参画で行われることを、山陽新聞の紙面で知った。その記事を読んだ時、記録映画を見て憧れていた、月の輪古墳の発掘を思い出した。僕と母は、発掘調査に参加したいと思い、すぐに発掘を申し込んだ。

初めて参加した発掘では、午前中は掘り下げ、午後はふるいを担当した。とても寒い日だった。少しずつ土を掘り下げ、手箕に移していく作業はとても大変で、足はかじかんだ。ふるいでは、「軽く力を入れて、すぐに割れたら土」など、土器片の見分け方を教えて頂き、少しずつ調査のコツが分かってきて楽しくなっていた。保存会の方々の温かいサポートのお陰で、2日間の発掘はあっという間に終わった。「もっと荒木山西塚古墳を発掘したい」と思い、その場で北房文化遺産保存会への入会を決意し、快諾して頂いた。

その後の発掘では、見つかった壺の取り上げをする真庭市の新谷さんのお手伝いをさせていただいた。竹べらを使って、割らないように慎重に取り上げていく作業は、とても楽しく、やりがいがあった。取り上げた壺の破片の下から新たな壺の破片が出てきた時には、その壺の測量もさせてくださり、本格的な調査方法を学ぶことができた。他にも、「土器は、表面の状態を守るため、擦るのではなく軽くたたくように洗う」など、発掘調査ならではの貴重な体験を多くさせて頂いた。発掘調査の現地説明会では、これらの壺が接合・復元



トレンチ2の掘り下げ作業



弥生土器片出土

された状態で展示されていたそうで、岡山県内でほとんど類例のない貴重なものとの解説があったそうだ。

翌年に参加した発掘調査では、結果的には何も出土しなかったものの、水銀朱が出土した周辺の重要なトレンチを掘らせていただき、さらにトレンチの埋め戻しもさせていただいた。トレンチの埋め戻しでは、墳丘斜面に土を積むだけではすぐに崩れてしまう。そこで、水や藁を混ぜて土を突き固める、古墳築造にも採用された版築^{はんちく}と似たような方法で埋め直していくと、崩れにくくなった。発掘調査を通して、古墳を調査することの大変さだけでなく、古墳を築く大変さも実感できたのが、とても面白かった。



長頸壺取上げ作業 トレンチ2

荒木山西塚古墳の発掘調査が終わっても、僕は文化遺産保存会の総会などで、定期的に北房を訪れるようになった。文化遺産保存会の方々は、発掘調査への参加がきっかけで知り合い、繋がることのできた方たちだ。北房には、熱意のある方々や、貴重な遺産が溢れている。僕は、北房は求心力と魅力が溢れる地域だと思う。そして、荒木山西塚古墳の発掘で、その魅力が更に高まったと思う。しかし、その価値が、未だに多くの人に知られていない。そこで、もっと多くの人たちに北房の魅力を知るきっかけに触れてもらい、その求心力を感じる距離まで近づいて欲しいと思っている。僕は、金銅装環頭大刀をかたどった北房文化遺産保存会のストラップを常にカバンに着けている。しかし、それを見た友達の中で「北房を知っている」という人はいなかった。また、僕が作成した「西の明日香村新聞」で行ったアンケートでは、北房を知っている人は全体の1割に満たず、知っていた人も「ホテルで聞いたことがある」とか「高速道路で通る」というだけの認識だった。北房は、一度訪れると「たくさん遺跡があり、魅力あふれる町」という認識に変わることを、僕は誰よりも実感している。だから、僕はこれからも、自分から北房の魅力を発信していきたい。そして、もっと多くの人が北房を知り、訪れ、古墳をはじめとした魅力を感じてほしい。

●古墳発掘に参加させてもらって

一般参加者・現保存会員 齋藤真理(岡山市)



令和4年12月11日 ミーティング

今回発掘調査に参加させていただき嬉しく思っています。

一つは、小学生だった頃からの念願の発掘調査ができたことです。私の小学生時代の頃は、当時エジプトピラミッドのTV番組がよく放送されていて、毎回ワクワクしながら見ていました。その流れから、日本でも遺跡調査のニュースが流れると発掘作業をしてみたいという思いがずっとありました。それから月日が流れ、今回荒木山で一般の人にも作業に参加できるという記事が新聞に載ったのを見

て、心弾み思わず申し込みしました。

当日は、その場での出土品は無かったのですが、トレンチ作業やふるい掛け作業は「何が出てくるかな？」と期待し、雨が降ってきたり、寒かったりしても、あっという間に時間が過ぎ楽しかったです。

もう一つは、保存会の方の丁寧で親切な案内は、初めての体験の緊張をほぐしてくれ、作業班で一緒になった人たちとの交流も和気あいあいとでき、次回もまた参加したいと思わせてくれました。新しい体験と楽しい出会いをありがとうございました。



土器片の確認

●古墳に魅せられて

一般参加者・現保存会員 乙部憲彦(岡山市)

山陽新聞で一般参加者が発掘できるボランティアの情報を見て、荒木山西塚古墳発掘調査に参加する機会を得た。



トレンチ2の掘り下げ作業

古代吉備国の歴史に興味を持ち、弥生時代～古墳時代の遺跡や古墳のことを知りたと思い、岡山県をはじめ西日本の博物館や歴史資料館、有名な古墳などを夫婦で度々訪問してきた。また、金蔵山古墳、造山古墳などの現地説明会や埋蔵文化財センターが実施する講座や講演会に可能な限り参加してきた私たちにとって、この発掘調査は実際の発掘を体験できる貴重な機会となった。

天候不良により、一日のみの参加となったが、令和5年2月26日、生まれて初めて古墳の発掘を体験することができた。トレンチの

掘り下げ、ふるい掛けを行い、発掘の基本作業を体験した。最初は土器片と粘板岩片の違いに苦労し、最後まで盛り土と地山の区別がなかなかつかず、判別に自信が持てなかった。参加していた大学院生たちが自信を持って判別する姿に感心した。

昼食時には、英賀公園のクラブハウスで、地域の方が作って下さった心温まる豚汁をいただいた。そこで、北房文化遺産保存会の話聞き、地元の住民でなくても希望すれば誰でも入会できるお話を聞き、その場で入会の申し込みをした。また、いただいたパンフレットで、北房地域に数多くの古墳があり、「西の明日香村」としてまちづくりを行っていることを初めて知った。

その後、その時いただいた北房史跡探索ガイドを参考に、4月に北房を歩いてみた。まず、北房ふるさとセンターで陶棺の数々や双龍環頭大刀を見学し、陶棺の保存状態の良さや、大刀の見事さに驚いた。



豚汁サービス(北房女性の会)

そして、大谷1号墳を訪れ、その復元された方墳の美しさに感動し、7世紀後葉、この地が畿内勢力と密接な関係があったことを改めて体感した。そして、隣接する大谷2号墳を探したが、それらしいものにとどり着くのに苦勞をした。

次に定東塚・西塚古墳を見学、この二つの古墳の立地があまりの近さに、一つの古墳に石室が2つあるのではないか、と思ってしまった。定北古墳はすぐに辿りつけたものの、定4・5号墳を探すのには苦勞をした。



土器片の確認

その後、定東・西塚古墳の駐車場に車を置き、歴史探訪路「^{やま}山の^べ辺の^{みち}道」を北上した。中津井の古い町並みの間を抜けて下村1号墳へ。その隣で名称未定の古墳であろう高まりを発見。郡神社では梁の彫り物の精巧さに感嘆をし、そして、立1・2号墳を見学。隣接する前方後円墳の見事さ、特に1号墳の大きさに驚いた。

3世紀後半築造とされる荒木山東塚古墳、4世紀の荒木山西塚古墳、それに続く5世紀の立1・2号墳。この地域を治める豪族の力の大きさを感じ、古墳の権力基盤となっているだろう谷尻遺跡を始めとする北房の地の豊かさを痛感した。

立1号・2号墳からの帰り道は、おかやま全県統合型GISの遺跡分布図を参考に、小殿御陵古墳などを見学した。そして、改めてこの地域の遺跡の多さを痛感した。

最近、令和5年の2月、同じ日に荒木山西塚古墳発掘調査に参加し、同じ日に保存会に加入した古墳めぐりすとの「はにお」くんの著書『岡山100名墳』（報道記事26）を参考に、まだ訪れていない岡山の古墳巡りをしている。現時点で訪れた古墳は55基と、やっと半分を超えたところだ。その中で、どうして小学生（当時）の足で、この古墳に到達したのかと思える古墳（矢掛町^{おぼやし}小林古墳）や一度目の挑戦では古墳の存在が分からず、日を改めて再度挑戦しやっと見つけた古墳（瀬戸内市亀ヶ原大塚古墳）、一度の挑戦では辿り着けず、今後再挑戦する予定の古墳（井原市三光寺裏山古墳）など、小学生の出した本を片手に夫婦で古墳巡りを行い、改めて岡山の古墳の魅力にはまっている。最近、スマホのグーグルマップでGPS機能が使えることを知り、前述の小林古墳はグーグルマップを使ってやっと探し当てることができた。『岡山100名墳』によると、まだ“道なき道”を行かなければ到達できない古墳（前述の三光寺裏山古墳、岡山市北区弥勒堂古墳など）があるので、残りの古墳もグーグルマップを活用してなんとか制覇してみたい。

『岡山100名墳』は、「はにお」くんが選んだ岡山県内の100の古墳について、「墳丘の美しさ」、「石室の美しさ」、「到達難度」、「レア度」、「オススメ度」の五つの視点をそれぞれ5段階で評価をし、自分の感想や墳丘や石室内の様子をカラー写真で紹介している。これまで岡山県の古墳をとりまとめた図書は、おそらく59年前の岡山文庫と23年前の近藤義郎先生がまとめた「吉備の古墳（上・下）」しかなく、県内の特色ある古墳をコンパクトにまとめた『岡山100名墳』はなかなか優れたガイドブックだと思う。ぜひ一度ご覧いただきたい。

北房文化遺産保存会からは、総会の案内やボランティア養成講座の案内など、様々な情報をいただくが、県南からはなかなか参加できず、実際に発掘する時期になって初めての参加となった。令和5年10月の非破壊探査の初日に1日、11月の発掘調査の初日と翌週に2日と、多くの日数の参加はできていない。この調査で、昨年度よく分からなかった地山と盛り土の区別がやっとつくようになった。新しいト

レンチを開けると新たな課題が生じ、古墳調査の奥深さを改めて感じた。また、発掘調査に向けての事前準備の大変さを痛感した。柴かき、トレンチ面の設定、道具の搬入など、発掘調査が順調にできるのも、地元の保存会の皆さんの献身的な努力があることを知った。また、地域を盛り上げようとする熱量と歴史好きの熱意を感じた。今後も足手まといにならないよう微力ながらお手伝いをしたいと思う。

(4)報道機関記者・大学・真庭市職員・サポーター寄稿

山陽新聞総社支局支局長 小畑 誠（岡山市）

市民参画の古墳調査が真庭で始まる。平成30年（2018年）9月の真庭支局着任早々、市からこんな報道発表があり、本紙で初めて調査プロジェクトを記事にさせてもらった。全国でも珍しい試みに胸を躍らせたのを覚えている。

初報以降は、ハイテク機器を使った非破壊調査といった公民館講座「まに大附属ふるさと研究所」の取り組みや、トレンチを掘る予行演習など、発掘に向けた準備を中心に4年近く取材に携わった。

「まに大」開講時は「主体部を掘りたい」という声もあったようだが、始まってみれば、機器操作を覚えた住民側の方が率先して調査を進め、一般向けの成果説明も堂々と発表。その熱意を間近で感じ、折に触れて伝えられたことは記者冥利に尽きる経験だった。

大学の先輩後輩である津村先生と新谷さん、荒木山を愛する地域の皆さん、さまざまな縁あつてのプロジェクト実現だったと思う。聞けば、新たな挑戦も始まっているとか。浅からぬ縁を感じる一人として、再び取材できることを願っている。



●市民参画型の発掘調査に参加して

鈴木崇司（慶北大学校）

令和4年から6年にかけて行われた荒木山西塚古墳の発掘調査では、墳丘構築方法や石列の確認など、多くの学術的成果を得られた。そしてその成果が専門家と共同した市民によってもたらされたことは、この調査の特に注目すべき点だろう。現在、発掘調査の多くは、開発事業に伴い失われる遺跡の記録保存を目的に行われており、開発事業者負担のもと、限られた時間と予算で作業しなければならず、技術



と知識を有する専門家が主導する状況にある。実際、私が参加してきた発掘現場も同様の状況であり、地域住民が携わる機会は限られていた。そのような背景から、駒澤大学大学院博士課程の時に、市民参画をめぐる本調査の話をいただいた際、期待と同時に不安を抱いていたことは否めない。しかし、現場で作業を始めた私の目に飛び込んできたのは、専門家の指示を仰ぎなが

ら、自身で調査の方針を議論し合う地域住民の姿であった。自身の目で古墳と向き合い、その意義を未来へつないでいこうとする姿は、講義で学んだ市民が主導する文化財保護活動を彷彿とさせ、これまでの現場とは異なる感動を覚えた。

現在、社会の変化に伴い文化財を取り巻く環境は厳しくなっている。そのような社会状況において、文化財に携わる職を目指す勉強している我々学生が、本調査に参加させていただいた意義は大きい。関係者の方々に感謝の意を述べるとともに、今回の経験を昇華させ、文化財の保存と活用について千思万考していくことを約束したい。

●「西の明日香村」が導く縁

元真庭市北房振興局長 上島芳広

全ては「荒木山の古墳を顕彰する会」の熱意から

令和2年4月、私が北房振興局に帰らせていただいた時には、久松秀雄代表、南條保之副代表を中心に「荒木山の古墳を顕彰する会（現・北房文化遺産保存会）」は、荒木山の伐採除草作業を定期的に行われていたほか、同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター長である津村准教授にご指導をいただき、レーザー探査等を実施するとともに勉強を重ねておられました。市では、丁度このタイミングで、各振興局がそれぞれの地域の振興計画を策定することとなり、私の最初の仕事は、その振興計画に、「西の明日香村」北房を盛り込むことでした。並行して、同会と北房振興局が二人三脚で、どのような統一的な案内板が西の明日香村北房にふさわしいか検討を進め、同会は、さらに自ら財源を確保して古墳の案内板を設置されるなど、まさに頼もしい限りでした。



そして、同会のメンバーの誰もが、どうしても実際に荒木山の古墳の発掘調査に繋がりたいという強い思いを持っておられましたが、当時、その点については行政と十分にかみ合っていないのが実情でした。そこで、太田市長が直接市民の声を聴き意見を交わす場であった「市長と話そう！」という行政トップとの直接の対話の場を設定することが最善ではないかと考え、「市長と話そう！」を実施させていただきました。同会メンバーの熱意に太田市長が心を動かされたのは皆さんご存じの通りです。同会の強い思いと積み重ねた実績こそが、発掘調査に向けての契機となったと思います。

しかし、それから実際の発掘調査に至るまでには多くの課題が（その点は、他の方の筆に譲ります。）あり、津村准教授の存在がなければ、乗り越えることはできませんでした。津村准教授には、いくら感謝しても感謝し足りません。

「西の明日香村」北房が導いてくれた不思議な縁

そもそも、「西の明日香村」というキャッチフレーズは、久松秀雄さんの発案です。当時、旧北房町にとってかなり背伸びしたものでしたが、北房の古墳群の存在や風景を含めた地域の持つ雰囲気は、的を射たものだとも当時も今も思っています。また、私自身も旧北房町で当時の南條保之課長のもと「西の明日香村構想」の策定に関わらせていただく幸運を得ました。そして平成7年(1995年)5月14日に、岡山大学名誉教授であった近藤義郎氏らを招いての中津井小学校でのシンポジウム¹⁴の開催も忘れられない思い出です。

14 編集者脚注：本シンポジウムは、『終末期古墳と大谷一号墳―被葬者は古備大宰か―』として、1996年3月28日に大谷一号墳シンポジウム実行委員会より刊行されている。

そして、定北古墳、定西塚・東塚古墳の発掘調査に、当時、岡山大学の学生であった津村准教授が参加されていたと知り、不思議な縁を感じざるを得ません。それから、20数年経過し、私の尊敬すべき大先輩たちが荒木山の古墳を顕彰する会に集い、コンソーシアムそして、今回の調査に繋がりました。

小・中学生を巻き込んだ発掘調査の取り組みは、彼らに地域を知り誇りを持つ最良の機会となったことは間違いありません。何年か後、彼らの中に第二、第三の津村准教授が現れ、頼もしく活躍してくれるのではないのでしょうか。「西の明日香村」北房に導かれるように。

●荒木山西塚古墳発掘調査に携わって

元真庭市北房振興局地域振興課 江崎 仁

令和4年（2022年）、荒木山西塚古墳の発掘調査に北房振興局の担当者として携わりました。ちょうどその前の年に、北房の未来について考えようというプロジェクト（北房地域振興計画の策定・実施）を担当し、その流れでこの事業のバトンを受けました。それまで文化財の担当者が何年もかけて発掘調査の前準備をしていたのを、一歩引いて横目に見ていたような姿勢であったため、この事業の意義や大きさを認識するところから始めたというのが当時の私でした。

分からないなりに地元の行政マンとしては、「いかに地域住民を巻き込むか」という点を使命にしようと思いましたが、北房文化遺産保存会の方々と関わっていくうちに、これはどうやら地域住民のパワーに行政が巻き込まれたパターン（良い意味で）だなと理解しました。

そこからは、保存会のサポート役として、広報や参加者の募集といった事務的な作業を淡々と行いました。手間や労力がかかる部分や難しい調整ごとは、保存会の皆さんや本庁担当者がこなしていたので、あの中では楽をさせてもらったのかな、というのが正直な感想です。事業が進んでいく過程で「今さら古墳か?」「募集したところで人集まるの?」といった冷やかな意見も聞こえ、また、自分の中にそういう気持ちもなかった訳でもないので、成功を目指す中では不安が先行しました。それでも蓋を開けてみると反響は予想以上で、希望された参加日数を減らすという調整が必要なほどでした。

実際に掘る作業が始まると、土の中から姿を現す数センチの土器片に沸き立つ日々が続きました。地域の方々の関心も次第に高まり、子どもたちが調査に参加してくれたり、地元の方がボランティアで炊き出しをしてくれたりもしました。それぞれの役割をこなす保存会の方々に感化され、自分も何か爪痕を残そうと若手職員をモデルに写真を撮り、「発掘作業の手引き」（資料I8）を作ったりもしました。もともと軽いジョークの発想で手掛けたものですが、なかなかのものができたと自負しています。

こうして私が関わったのはたったの1年でしたが、当初から津村先生が強調されていた「発掘調査が終わってからが勝負」という大きな宿題には手を付けずに現場から離れてしまいました。振り返ってみれば、このプロジェクトのおいしいところだけをかじらせてもらった訳ですが、この宿題の部分に少しでも自分が関わることができればと、本文を書きながら思っているところです。



●北房に導かれて

真庭市教育委員会生涯学習課 大久保孝晃

私が初めて北房を訪れたのは、平成30年(2018年)2月4日の日曜日のことでした。真庭市民であればピンとくる方が多いかと思いますが、この日は、例年2月の第1日曜日に開催される「北房ぶり市」の日でした。当時、津村准教授(以下、先生)のゼミ生として、同志社大学文化情報学部を卒業見込み、かつ、同ゼミ生として大学院入学も控えた状態での来北でしたが、特に不勉強だった私は、正直なところ先生の本来



の意図がわからないままに、フィールドワーク!と研究者ぶって訪れていました。しかし、そのような威勢と同時に、老若男女が集うぶり市の活気と中津井陣屋で食べた鯉の洗いの衝撃、そして、国道313号線沿いを自転車で駆け巡った日の冷たくも心地よい北房の風が鮮明に思い出されます。

今思えばこの時すでに「ここにしばらく住んでも良いかなあ」と、私の中で漠然と北房に移住の関心を持ちつつあったため前置きが長くなってしまいましたが、本格的に人生を変える契機となったのが、同年5月26日から開講された「まに大付属ふるさと研究所」の取り組みでした。晴れて大学院生となった私は、先生の助手の立場で各回随行し、地域住民による文化遺産活用の現場を特等席で視ることができました。あくまで当時の私視点での視え方ですが、人文社会科学の理論が実社会に落とし込まれ、地域還元されていく過程に心が震えたことを覚えています。そして、前置きの想いと併せ、いわゆる民官学連携の協働体制のなかで、いわば“市民が、市民の文化を、市民の文化として資源化していく過程”を目の当たりにした私は、北房に住みたいという想いから、真庭市役所で働き、市民のこのような取り組みを直接支えたいという想いへと具体化し、(妻を説得し)移住して入庁することを決意しました。

運よく試験に合格し令和4年(2022年)に入庁できた私は、これまた運よく北房振興局に配属され、同年に実施された「荒木山西塚古墳発掘調査」に携わることができました。行政として関わる本プロジェクトは毎日、驚きと学びの連続でした。例えば、このプロジェクトを進めるにあたり行政目線だからこそみえてくる法律上の課題やお金の課題、そしてヒトとヒト、組織と組織を調整する課題、そのうえで大切にしたい保存会をはじめとした参加者の方々の熱量。さらには、このように色々とし気に掛ける事案がある中で、ひとつひとつ冷静に対処されていた上司の方々!すべてが目まぐるしく動きながらも、コンソーシアムという協働体制が維持され進んでいく渦中にいられたことは、言うまでもなく私にとって大きな財産となっています。

(学生ですが)専門家、(新人ですが)行政マン、(Iターンですが)市民として、三者の視点をすべて経験しているのはおそらく私だけだと思います。このことがすごいわけでは全くありませんが、願わくは、「荒木山」という文化遺産のストーリーの一部になれていますように――

●荒木山西塚古墳の調査について

サポーター・保存会顧問 平井典子(総社市埋蔵文化財学習の館館長)

荒木山西塚古墳の発掘を、募集した一般の人達によって実施するとの計画を知った時、専門として指導できる人数が確保できていないまま調査を行うと、遺跡を破壊することになってしまう恐れがあるので心配していました。一般の人達に参加していただき、遺跡のことをより深く学んで、興味を持ってい



ただくことはとても大切なことだと思っていますが、一度掘ってしまうと元には戻せないなので、経験を積んだ専門の人達が数人は必要と思いました。

しかしそういった中で「北房文化遺産保存会」の皆さんは、時間をかけてそのような問題を乗り越え、人材を集めてきちんとした発掘調査ができるように努力され、無事調査に至ることができました。

参加者の方々も、専門職の方々から様々なことを学び、遺跡を掘る作業や、出土し

た遺物にふれあって、一生懸命に、また楽しんで従事してくださいました。

駒沢大学の寺前直人さん、鈴木崇司さんは学生さんを連れ、いろいろとご指導くださいました。調査も順調に行われ、なにより参加して下さった方々にとっても楽しく有意義な時間が過ごせたのではないかと思います。

北房の地は、弥生時代後期以降、他の地域ではあまりみられない播磨など畿内系に近い土器が多く出土しています。また、北房では、古墳時代前期から後期まで連続的に前方後円墳が築かれており、このような地域は県内でもほとんどなく、3カ所程度です。また、飛鳥時代前半には定古墳群が、後半には他の地域で大きな終末期古墳は見られませんが、北房では吉備でも最大規模の大谷1号墳が築かれています。

このように、北房の地は、他とは異なった特別な地域であったと考えられ、遺構や遺物から、さらにいろいろなことが明らかになっていけばと思っています。

仕事であまり参加できず、申し訳なく思っていますが、やはり北房の地は特別で、「北房文化遺産保存会」の皆様をはじめ、調査に参加して下さった方々と共に「西の明日香村」を盛り上げてくださればと、平井勝（P4注記参照）も願っていると思います。

ワーキンググループ委員・保存会員 白石 純（元岡山理科大学生物地球学部教授）

荒木山西塚古墳発掘調査のサポーターとして参加させて頂き、現地も何度か見学させて頂いた。この見学での感想として、非常に遺構の土層が判りづらく、大変ではなかったかと思われた（特に東塚と西塚の間で発見された古墳）。また、県からはできるだけ掘らないようにとの指導があったことも事実であり、調査期間の制約もあったが、盗掘されていた主体部の詳細な調査を実施し、この古墳の築造時期を明確にしてほしかった。

そして、出土遺物の市民への公開やこの古墳との関連が想定される谷尻遺跡の遺物を市に返却してもらい、より充実した展示内容にして頂きたい。それには、一か所で北房地域の歴史がわかる博物館（既存施設を改装するなどして）を建設してほしいものである。なお、真庭市内には他地域から訪れる人たちが見学できるまともな博物館がない。貴重かつ重要な文化財を眠らせないためにも市内の各地域の資料館などを充実していくことが急がれる。

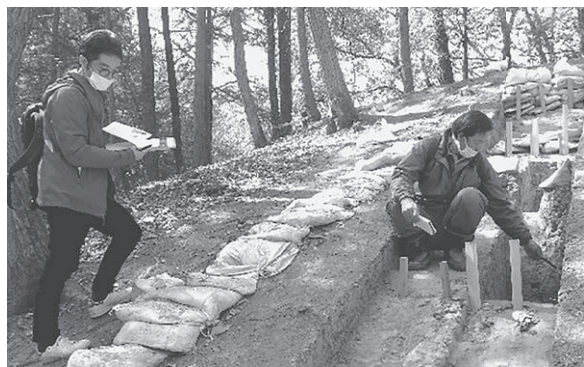


●荒木山西塚古墳の発掘調査とその意義

サポーター 岩本 崇（島根大学法文学部社会文化学科 准教授）

荒木山西塚古墳は全長約64mの規模を誇る北房地域でも有数の前方後円墳です。同一丘陵上には全長約47mの前方後方墳である荒木山東塚古墳もあり、当地の古墳時代開始段階の社会状況を考えるうえでの重要資料です。そして、発掘調査によって荒木山西塚古墳の具体的な姿を知る手がかりとともに、出土した土器から古墳時代前期後半（4世紀第2・3四半期ごろ、つまり4世紀中葉～後葉ごろ）に古墳が築造されたと考える材料が得られた点は学術的に大変重要な成果といえます。

さらに、私が現地を見学させていただいた際に感銘を受けたのが、古墳の調査・保全・活用を市民が主力となり、行政や大学をまじえて展開されている点でした。岡山県内では昭和28年（1953年）に美咲町飯岡にある月の輪古墳（径約60m円墳）で国民的歴史学運動を背景に飯岡の人たちの手によって発掘調査がおこなわれたことが周知されています。しか



し、現在は1950年代とは異なる社会状況にあり、古墳や遺跡の発掘調査は行政や大学の手によっておこなわれるケースがほとんどで、行政と大学との連携による発掘調査ですら少ないというのが実態です。そのなかであって、市民・行政・大学が一体となって調査に取り組まれた意義は殊更に意義深いといえます。何より発掘調査を担う主力が市民であることは、遺跡の保存活用の点においてこれ以上に頼もしいことはありません。これからも市民のみなさんが主力となって、古墳の調査研究と保存活用がつづけられることを願っています。その活動も地域のみなさんの誇りと地域や文化財への愛着につながるだろうと思います。

●調査をふり返って

ワーキンググループ アドバイザー 尾上元規（岡山県教育庁文化財課副課長）

発掘調査は、遺跡の理解を深めるために必要な作業である一方、結果的に遺跡の一部を破壊するという側面をもっています。したがって、明確な目的と高い専門性をもって慎重に行うことが求められ、また出土品等を将来にわたって適切に保存するための体制・設備の充実も欠かせません。

このような観点から、荒木山西塚古墳の調査に対して心配する声が、県教委にも複数寄せられました。



調査主体である市と協議を重ねた結果、市は有識者からなる委員会を設け、専門的指導を受けながら調査を進める体制を整えました。発掘は必要最小限の範囲とし、埋葬施設は地中探査等の非破壊調査に留め、注目の「市民参画」についても調査の質を担保するための配慮と工夫がなされました。

調査の結果、墳丘の規模・構造等の概略が把握され、出土土器によって築造年代が判明するなどの成果がありました。本古墳の価値が一層高まるとともに、今後の保存と活用に資する基

礎データが得られたといえます。

近年、人口減少や少子高齢化が進み、所有者の手で文化財を管理・継承していくことが困難な時代になっています。行政による支援にも限度があり、このたびの「市民参画」が根付いて地域総がかりで保存と活用が図られることを期待します。

(5) 作業参加日誌より

1日の作業終了後に、保存会員、一般参加者および関係者に「作業参加日誌」（資料37）をお願いした。その作業参加日誌に記載された感想を抜粋する。なお、[]内に一般参加者は、[一般・男性]等で示した。[]のない感想は保存会員である。



【令和4年（2022年）11月26日】（資料38、報道記事17）

- ・作業内容が少し分かってきた感じがします。楽しみな成果となりますように。
- ・いよいよ開始となった。初めて経験することばかりでわくわくする事多し。
- ・作業後の成果報告で、わくわくするような話が聞けて、次の作業のファイトがわく。
- ・木の根につまづいた。注意の徹底が必要。
- ・号令等、初めての事で気が張りました。特に問題もなく、少しほっとしています。

【11月27日】

- ・掘り下げとふるい掛けの作業バランスを考える必要あり。
- ・休憩時間が待ち遠しい日だった。作業後の成果報告を聞き、次の作業の意欲がわいてきた。
- ・土器片が出土したが、意外に浅い所に埋まっている。
- ・土嚢袋に入れる土は少なめに。どんどん重く感じる。

【11月28日】

- ・この3日間は比較的暖かい日であったが、あさってから大幅に気温が下がる予報。体調面に気を付けたい。
- ・作業分担がうまくできていて、効率が良くなった。
- ・腰が痛い。
- ・寺前先生の最後の言葉に感動して、荒木山西塚古墳のすごさが分かった。

【11月30日 ワーキンググループ第2回会議】

- ・ワーキンググループの先生方の専門的な話が聞けて良かった。
- ・墳頂近くのトレンチの壁で四層に分かれていると言われたが、私には二層にしか見えない。専門家の目はすごい。
- ・土嚢^どによる階段作り、こたえた。



【12月1日】

- ・しだいに作業に慣れてきたが、今日は一段と寒かった。
- ・墳頂部は風が吹き抜け、寒い！
- ・古墳の姿が見え始め、成果報告の内容が概ね分かりかけてきた。
- ・ふるい掛け担当の人手不足。
- ・地山が少しずつ見えてきた。石列もこれから次々と出てきそうである。

【12月2日】

- ・午前中の寒さはこたえた。事故がないように気を付けたい。
- ・中井・巨瀬公民館の見学者16名。みんな興味を持っている人ばかり。
- ・中井・巨瀬公民館の見学者に何人か懐かしい人に出会った。

【12月3日】

- ・ふるい掛け、土嚢袋詰めは、掘り下げの状況に左右される。気ぜわしく大変だった。
- ・保存会員の手つきが上達しており、安心して作業を見ていられた。
- ・皆さん真剣に取り組んでいただきありがとうございます。[北房振興局]
- ・朝は霜が降りている中、みんな頑張っていた。

【12月4日】

- ・駒澤大学の大学院生のよく勉強されていることに感心しました。
- ・駒澤の学生と別れを惜しむ。良い機会となった学生も感慨深い様子。
- ・駒澤の学生さんの発掘作業の様子が大変熱心で、心強かった。今日、お別れということで、名残惜しいことでした。

【12月10日 一般参加者の作業初日】（報道記事18）

- ・事前の想像をはるかに上まわるものが多々ありました。携わっておられる皆様に敬意を表します。
[一般・女性]
- ・古墳発掘は初体験でしたが、古代に思いをはせながら有意義なひと時でした。[一般・男性]
- ・地道な作業でしたが、土の色が変わった時のワクワク感、掘り下げた先に何が見えるのか楽しみです。
[一般・女性]
- ・大変面白かった。みんなの作業で、広い範囲の表土を100%剥がすことができ、満足度が高い。
[一般・男性]
- ・主体部の調査ではないにしても、古代ロマンを十分味わえる内容でした。地元の方の情熱も直に伝わり、やりがいにつながりました。子どもも思った以上に楽しんでいたので、父親としても家族サービスができて満足でした。[一般・男性]
- ・一般参加者の方と協働。皆さんの意欲的な取り組みに感謝するとともに、仲間意識がわいてきた一日でした。思いを同じにすることに感動。
- ・一般参加者の方も途中から明るく掘り下げていました。参加していただいてよかった。
- ・一般参加者の方に楽しんでもらえたようで良かったです。



【12月11日】

- ・無事2日間を終えてほっとしています。意義深い2日間でした。北房の方の熱意が実を結びますようお願いしています。これからも発掘の経過に目が離せません。[一般・女性]

- ・分かりやすい説明があったので興味を持って作業に入れました。遺物がでたかな？と何度か喜びましたが、全部間違っていました。でも楽しかったです。次回も楽しみに来ます。[一般・女性]
- ・ふるい掛けで出土品を探すのが楽しかったです。[一般・男性]
- ・この地域に多くの古墳があることや、全国的にも珍しい古墳があることを教えてもらって楽しめました。スタッフの方や先生方が優しく、なごやかな雰囲気ので安心してできました。[一般・女性]
- ・列石が出た時にはちょっと感動した。
- ・一般参加者2日目。対応にも慣れてきた。2日目の方もいて、和気あいあいと作業が進みました。期待を込めて出たかけら。「はい、石と土です！」
- ・壁面の仕上げはつくづく難しいと思った。

【12月12日 北房中学校2年生参加】

- ・足や腕が痛かった。でも楽しかった。[中学生・男子]
- ・体験したことがなかったので楽しかった。発掘作業は思ったより力が必要だった。また、探査機で地下の石などが分かることにびっくりした。[中学生・女子]
- ・古墳を見ると想像以上に大きく驚いた。トレンチは真っすぐに掘られていた。古墳を調査し、探査することは一生に一度できるかできないかという経験だから、今日の体験はすごくうれしかったし、楽しかった。きっと忘れないと思う。[中学生・女子]
- ・一番楽しかったのは古墳の掘り下げでしたが、足がしびれて痛くなりながら作業をしました。作業にはいろいろな道具を使っているんだなと思いました。みなさんやさしく教えてくれ、古墳のこともよく分かりました。ありがとうございました。[中学生・女子]
- ・とても慎重に発掘しないといけないけど、何か出てくるかもしれないと思うと、とても楽しかった。[中学生・男子]
- ・古墳の上に立つと、神秘的だなと思いました。そして、墳頂部は高くてすごくりっぱでした。貴重な体験をさせてもらい、荒木山の古墳についても知ることができました。また、発掘作業の苦労も感じました。[中学生・女子]
- ・貴重な体験ができて良かった。探査機が重くて動かすのが大変だった。掘り下げ作業は、ガリで平らに土をけずるのが難しかった。ふるいで出てきたものをていねいに洗うことも難しかった。[中学生・女子]



- ・改めて北房にある古墳のすごさが分かったし、仲間との協力も重要だということも分かった。できることなら毎日でも発掘に行きたいと思った。[中学生・男子]
- ・発掘をしてみて、こんなに大変な作業をしていることを知り、びっくりしました。ふるい掛けをした時は、土器片が出てくるかもしれないと、わくわくしてとても楽しかったです。[中学生・女子]
- ・中学生が楽しんでくれたようで良かった。またこうした機会があればいい。
- ・中学生と一緒にふるい掛けをした。本気で、そして興味を持って作業する姿勢に頼もしさを感じた。
- ・中学生が古墳について学習する補助をしました。今後につながる意義ある体験になったものと思います。



【12月17日】

- ・いろいろ教わりました。ありがとうございました。[一般・女性]
- ・一通りの作業ができて良かったです。貴重な体験ができました。でも、意外と疲れました。[一般・男性]
- ・今回は土器片が出てきたので楽しかったです。古墳に関係するものは今のところなさそうだけど、楽しかったので来年も来たいと思います。近くの古墳巡りもしたいし、埴輪作りにも行ってみようと思います。[一般・女性]
- ・ふるい掛け作業では土器片があるか判断が難しかったが、出土した別の土器片を洗ったことで、実物がどんなものか見ることができました。[一般・男性]
- ・ガイダンスも分かりやすかった。普通の山に見えるのに古墳でびっくり。貴重な体験でした。作業もいろいろ教えてくださってありがとうございました。[一般・女性]
- ・土嚢の階段が滑りやすくなっている。気を付けたい。
- ・寒い中、小雨も降ったが皆さん熱心に作業されていた。
- ・一般参加者に北房の魅力を伝えていきたい。
- ・一般参加者と一緒にふるい掛け作業を楽しく行い、意義ある交流ができました。
- ・保存会と同じように歴史探求の会の参加者がいて、話がはずんだ。
- ・雪で足もとが悪い。クラブハウスの床を汚さないように敷物をした。

【令和5年（2023年）2月17日 北房小学校6年生参加】

- ・午前中に自分が掘った所から、午後の作業で津村先生が六文銭を見つけました。くやしいです。[一般・男性]

- ・卑弥呼の時代から続く古代のロマンを感じることができました。とは言え、実際に携わっている方のご苦労もひしひしと感じています。大きな成果も小さな喜びも一緒に味わわせていただきたいと思います。発掘作業が続く限り参加させてください。[一般・女性]



- ・楽しかったです。こういう機会を与えていただき感謝しています。北房がこれほどの地域であることを知らず、今日知ったこと、話していただいたこと、体験したことで、とても興味が広がりました。ありがとうございました。[一般・女性]

- ・ 57歳の発掘初体験。楽しかったです。皆さんありがとうございました。[一般・男性]
- ・ かつての同志（職員）と再会。旧交を温めた。
- ・ 小学生と一般参加者が交った作業となった。来年度は日にちを分けて実施するのが良いと思う。
- ・ 午前中は小学生を案内したが、伝わったのか不安。小学生が古墳に興味を持ってくれたらありがたい。
- ・ 午前中は、掘り下げた土を墳頂に持ち上げてのふりい掛けで大変だった。
- ・ 小学生は生き生きとした感じで、楽しんでもらえたのではないかなと思う。保存会員は動きに無駄がなく、良い感じだ。
- ・ 小学生の参加でにぎやか。楽しかったです。

【2月25日】

- ・ 土器片発見にはならなかったが、調査に参加できてとても良かった。文化財を残し、未来につなげる取り組みとして、今後ともますますこうした活動が活発になることを祈っています。[一般・男性]
- ・ 古墳を発掘する面白さが何かということが分かりませんでした。参加してみて、①地域の方々の地元を思う気持ち、②発掘そのものの楽しさ、③考古学、地学、歴史学等様々な分野の研究者が携わっていることを理解できました。[一般・男性]
- ・ 地道な作業が考古学を支えているのだと思った。[一般・男性]
- ・ 初めての経験でした。古墳を掘るという貴重な体験ができてとても楽しかったです。地質や古墳の構造などをもっと勉強してみたいと思いました。明日もよろしくお願いします。[一般・男性]
- ・ 掘り下げていくたびに、いろいろ変化していくのが面白かったです。[一般・男性]
- ・ 発掘作業をすることは子どもの頃からの夢だったので、今回体験することができて非常にうれしかったです。貴重な体験をさせていただきありがとうございました。[一般・女性]
- ・ 古代のロマンを感じました。次回も楽しみです。[一般・男性]
- ・ 滑り防止用の筵^{むしろ}は有効だった。
- ・ 墳頂部で石が出てきた。どのような意味を持つのか、今後の展開が楽しみ。



【2月26日】

- ・2日続けて参加させていただいたので、前日の作業をふまえて、今日の作業ができたので、より進捗などが分かり、よかったと思います。すごく貴重な体験となりました。ありがとうございます。今後の成果が楽しみです。[一般・女性]
- ・土器の破片がたくさん出てきたので、より楽しかったです。今後このような機会があれば（会員に入らせていただいたので）ぜひ参加させていただきたいと思いました。中学校の教員をしているのですが、生徒たちに発掘や古墳の勉強を伝えていきたいと思いました。[一般・男性]
- ・貴重な体験ができました。思い切って応募してよかったです！！これからも古墳から昔の生活を思い起こすことを大切にしたいです。意義あることと思いました。[一般・女性]
- ・地道で結構しんどい作業だったが、土器片が出てくるとうれしかった。こうした地道な作業の積み重ねが大きな成果につながるのだと実感した。東塚も発掘したい。[一般・男性]
- ・弥生土器片を発掘するという非常に珍しい経験をすることができ、大変良い機会となりました。ありがとうございました。（豚汁おいしかったです！）[一般・男性]
- ・初めての経験で全てが勉強になった。楽しかったです。土器片を見つけた時は最高でした！！ありがとうございます。[一般・男性]
- ・大勢の参加者に豚汁をふるまい、大変おいしいと喜ばれました。北房女性の会、北房振興局のお計らいに感謝です。



【2月27日】

- ・初めての体験で緊張していましたが、ていねいにやり方を教えていただいたので、すぐに作業に慣れました。歴史的な発掘に参加できてよかったです。明日、また1日楽しんで作業したいと思います。ありがとうございます。[一般・女性]
- ・作業は根気が必要でしたが、歴史を感じることができました。古墳時代の人と今の私のつながりについて考えたりしました。とにかく面白かった！[一般・女性]
- ・駒沢の鈴木さん、西村さんから今日も分かりやすい成果報告があり、皆さんよく分かって満足されたと思う。



【2月28日】長頸壺・小形丸底壺出土

- ・2日目ということもあり、少し慣れて楽しくできました。午前中に土器らしきものが発見でき、発掘の楽しさが倍増、いや5倍増しました。皆さんのロマンの中に入っていたことに感謝しています。お世話になりました。[一般・女性]
- ・諸先生方、関係者の皆様のご説明を拝聴いたしまして、古の先人たちの営み、生活を推察することもできました。古墳への興味が一段と深まりました。また機会があれば参加を希望いたします。[一般・男性]

- ・初めての発掘をさせてもらいありがとうございました。午前中のふるい掛けもよかったですが、午後の掘り下げで壺？を発見できてとても良かったです。[一般・男性]
- ・楽しかった。特に壺が出てきた時は興奮した。[一般・男性]
- ・明日も来ます。壺が掘り出されることが楽しみです。[一般・男性]



【3月1日】

- ・月の輪古墳の近くで生まれましたので、いつか発掘したいと考えていました。できて大変良かったです。[一般・男性]
- ・無心になれる。作業後は気持ちが良い。[一般・男性]
- ・総社で発掘作業員をしている人が、仲間からこの発掘調査募集の話を聞いて応募したという。総社方面ではかなり話題になっているらしい。

【3月2日】^{てっふ}鉄斧出土

- ・前回なかった小さな壺が出土していた。感動!! 鉄のかたまり（16cm）も出てきてビックリ!! 今日楽しい1日。3月4日の現地説明会が楽しみです。[一般・女性]
- ・トレンチ2では大部分の地山が確認できるようになった。[一般・男性]
- ・雨が降りかけたり、冷たい風が吹いてきたのでシートを掛けたり、作業中止かと思うと晴れたり。天気により回されたが予定どおりできて良かった。トレンチ2の東側で鉄器が出土。
- ・雨上がりのため、すべりやすいため作業がやりやすかった。トレンチ2東で鉄器が出てきた。古墳の可能性もあり、今後は楽しみ。



【3月3日】

- ・地道で有意義で貴重な作業の積み重ね。そして、強烈だけど心地よい筋肉痛。今回もありがとうございました。[一般・女性]
- ・今回、2回目だったので少しは慣れました。これで終わるのは残念です。来年度も是非参加したいです。保存会の方、お疲れ様です。ありがとうございました。[一般・女性]
- ・初めての参加で、うまくできるか不安でしたが、周りの方々や係の人たちのおかげで楽しく作業できました。[一般・男性]
- ・西村さん、ご苦労様でした。お世話になりました。
- ・やっと現地説明会までこぎつけられて、ほっとしています。

【3月4日】現地説明会（資料39、40 報道記事22、23、24）

【3月5日】

- ・初めて生の土器などを触ることができて、本当に楽しかったです。来年も参加したいです。[一般・男性]
- ・竹ペラで壺を出すことができて、とても貴重な経験になりました！ありがとうございました！[一般・男性]
- ・初めて発掘に参加させてもらった。古墳の発掘が大変ということがよく分かった。土器片を見つけた時はとても興奮した。[一般・男性]
- ・体調を崩された方がおられたが、すぐに緊急連絡を出すことができなかった。反省。

【3月8日】

- ・トレンチ2の大木の根に苦戦。

【3月9日】

- ・木の根、大変である。

2. 第2次発掘調査に向けて

第1次発掘調査の作業が令和5年（2023年）3月12日に終了した。直後の3月28日にコンソーシアム第10回連携会議が開催され、各班の反省事項、次年度に向けての意見交換が行われた。

一方、保存会では発掘作業以外の事業も計画・実施してきた。そのひとつが、令和2年から3年計画で行った「西の明日香村・道しるべ整備事業」である。令和3年に、11基の案内看板を設置したことは第2章で述べたが、第1次発掘作業が始まる令和4年も本事業は継続された。



「山辺の道」看板
(上)北側入口 (下)南側入口

北房の上水田地区の南側丘陵地の麓から中津井地区にかけての道沿いに、古墳時代前期から終末期までにわたる主要な古墳、その他史跡がある。この道を「西の明日香村」北房の「^{やま}山^べの道」と命名し（『日本書紀』に記述のある、奈良の三輪山の麓から東北部の春日山の麓までの日本の代表的古道の名称にちなんだもの。古来、「^{やまのべのみち}山辺道」と表記される。）、北房の古墳・その他史跡を巡る際のメイン探訪路とした。荒木山東塚・西塚古墳もこの「山辺の道」沿いにある。

令和4年（2022年）4月から作業を開始し、設置場所の選定、外形・表記内容の検討等を行い、10月28日に、「山辺の道」の北側入口付近に2基、南側入口に1基の大型看板を設置した。第1次発掘調査開始1ヵ月前のことである。

本事業で保存会が設置した計14基の看板は、単に道しるべとしての機能だけではなく、北房の文化遺産に対する地域住民の認知度の向上および郷土の誇りとしての象徴になることを期待したものである。

なお、本事業の活動資金の一部は、一般社団法人 中国建設弘済会「中国地方地域づくり等助成事業」の支援による。これは国土交通省が実施する施策や整備事業等に関連し、将来的にも社会資本整備に繋がる地域づくり等に関するボランティア活動の支援を目的としたものである。申請内容が審査された結果、令和4年度に採択された事業は、中国地方5県で

全31件であった。1年後、この中から9団体の活動が選ばれて、令和5年7月8日（第1次発掘調査が終了した約4ヵ月後）、広島国際文化ホールにおいて報告会が開催された。幸いにも「西の明日香村・道しるべ整備事業」も選ばれ、活動成果を発表した（資料41）。

また、令和4年に開始した事業として、「西の明日香村・ガイド養成事業」がある。北房を訪れた人びとに、古墳をはじめとした文化遺産の魅力をより楽しく、より深く知ってもらうためのガイドを養成することを目的とした事業である。地域の文化遺産の保存・活用に携わる多様な人材の育成を継続的に行っていくことは、地域住民で北房の貴重な財産を守り、後世に継承していこうとする機運を醸成させるためにも重要なテーマとなる。そのために、保存会員に限らず、ガイドを希望する地域住民、あるいは北房の歴史・文化に関心を持つ人たちにも幅広くよびかけ、北房の文化遺産の基礎的な知識を習得するための講座も開催する計画とした。

そこでまず取りかかったのが、北房の主要な文化遺産を解説したテキストづくりである。これは第1次発掘作業が終了する直前に、A4版、50頁^{ページ}の『北房文化遺産ガイド用テキスト』として完成した（報道記事27）。令和5（2023年）4月18日、このガイド用テキストに沿ったガイド養成講座の開催について打合せを行い、7月30日、8月12日の2日間にわたり、北房文化センターで北房文化遺産ガイド養成講座を開催した。受講者は、2日間で延べ70名となった。

そうした中、7月14日および8月22日のコンソーシアム会議（第11、12回）で、荒木山西塚古墳の前方部を主体とした第2次発掘調査のトレンチ計画と作業日程について市教委から説明があった（資料42、43）。

保存会ではコンソーシアム第11回連携会議に引き続き、班編成について協議した。令和5年1月の保存会総会において、会長に就任した畦田氏は組織上、全体統括となるため、案内・庶務班サブリーダーの上谷氏を生活・安全班リーダーとすること、また保存会員の第2次発掘調査の作業参加予定者数が、第1次に比べ少ない等のため班編成の変更も行った。



コンソーシアム第11回連携会議

第1次発掘調査で、トレンチ1および2において墳裾部に石列が出土し、墳丘中位傾斜部にも礫が検出された。また、墳丘表面にも礫が散在していることから、トレンチ以外の箇所での礫の存在を把握するため、10月14日に柴の除去作業後、10月19、21～23日の4日間、墳丘斜面の北東から北西にわたりレーダー探査作業が行われた。

その後、11月23日には柴掻き・清掃を行い、11月25日からの第2次発掘調査の準備を終えた。

【平城 元】

3. 第2次発掘調査

調査前の計画、さらに前年度の第1次発掘調査で残された課題の解決を目的に、令和5年度の第2次発掘調査は行われた。

発掘調査の体制は前年度と同様、調査員は市教委担当職員、CKSCHの津村センター長、岸田副センター長の3名が担当した。これにスタッフとして保存会が5班編成に分かれ各種作業にあたり、一般参加者が会員と一緒に調査に加わる形となる実施体制も同様である。

第2次調査は、測量・物理探査調査で得られた成果や、第1次調査で生じた課題を踏まえ、調査計画を立て、調査の進展に伴い一部トレンチの拡張をしながら進めた。調査期間は令和5年（2023年）11月25日～令和6年（2024年）3月16日であり、実働日数34日と前年より5日増えた。2年目も一般の方が調査に参加しやすいよう土日も調査日とし、前半は11月25日から12月13日まで調査を行った。その後中断期間を挟み、後半は令和6年2月16日から調査を再開し、翌年3月16日に埋め戻しと調査機材の撤収を行い、2ヵ年にわたる調査を完了した。

第2次調査では、①前方部の遺存状況の確認、②1次調査からの継続課題となる後円部全体の墳丘構造や外表施設の確認、③後円部の北側に存在する高まりの性格追及などを主な目的に、前方部に2か所、後円部に2か所のトレンチを新たに設定したほか、トレンチ2の高まり部分のみ継続調査を行った。合計の調査面積は51.3㎡である。

第2次調査により得られた成果としては、

- 1) 前方部東半分は後世の改変により墳丘が大幅に削平され、墳裾を留めておらず、前方部東側に残る墳丘を削平して作られた平坦面は近世まで遡ると判明。
- 2) ただし前方部前面の後世の改変に伴う土層から古墳に伴うであろう石材や土器片が多く出土。
- 3) 後円部で新たに設定したトレンチも墳裾部分が削平されており、外表施設は確認できなかった。
- 4) 西塚古墳北側の高まりは、盛土の中から墓壙（^{ぼこう}埋葬施設を築くため掘り込んだ穴）の痕跡を確認し、その墓壙底面付近において赤色顔料が狭い範囲から出土した。

といった内容が挙げられる。特に後円部北側の高まりは2ヵ年の調査を通じ、東塚古墳と西塚古墳の間に築かれた同時代の古墳と判明したことは、調査前には予想しなかった大きな成果であった。

第2次調査は第1次調査の経験を活かし、調査3日目となる11月27日には一般参加者の受け入れを開始し、翌年2月29日まで行われた。一方で2年目は予期せぬ調査状況への対応のため当初計画よりも多くの日数を要することとなり、12月4日から12月13日、翌年3月1日から埋め戻しが完了する3月16日までの長期間はコンソーシアムのメンバーのみで調査を行うこととなった。

調査終盤は西塚古墳北側の高まりで予期せぬ赤色顔料の出土により、主体部の存在を想定した慎重な調査や顔料の取り上げのための保存処理が必要となった。このため予定期間を大幅に超えて調査を継続することとなり、保存会の皆さんにも大きな負担が生じたが、調査員からの要請に応じ、多くの会員の方が最後まで率先して調査に参加いただき調査を終えることができた。改めて心より感謝申し上げる。

第1次調査に続き、発掘調査をふるさとへの学びに繋げようと、12月4日に北房中学校2年生生徒が現場取材に訪れ、参加者へのインタビューを行った。また2月16日には北房小学校の6年生児童が発掘作業を行った。また、令和6年3月2日には保存会が運営の中心となって現地説明会を開催し、市内外から約71名の参加者があった。期間中の参加者は延べ887名、そのうち713名が地域住民をはじめとする市民参加の方である。

また、第2次調査についても山陽新聞上で掲載されたほか、このプロジェクトを知ったNHKに全国放送の解説番組で取り上げられるなど外部での情報発信も積極的に行われた。教育委員会でも前年度に

続き発掘調査の記録映像化も行われ、その映像の一部を活用し、調査状況についてYouTubeを用いてインターネット配信するなどの取り組みを行った。

【新谷俊典】

(1) 発掘調査参加者

〔真庭市教育委員会〕

三ツ宗宏・武村良江・谷岡理江・新谷俊典

〔北房振興局〕

大塚清文・畦崎智世・嶋田有一郎・大久保孝晃

〔同志社大学〕

津村宏臣・岸田 徹

〔発掘調査サポート〕

〔ワーキンググループ〕 行田裕美・白石 純・寺前直人

〔ワーキンググループアドバイザー〕 尾上元規

〔サポーター〕 田畑幸嗣

〔北房文化遺産保存会〕

畦田正博・奥田健治・平城 元・戸村彰孝・宮田美輝・上谷仁志・山崎和光・大植昭一・原田重隆
三輪能章・梶上 守・小林展弘・志田浩一・畦田恵子・小田裕章・南條朝子・大木順市・大木初美
平 義男・伊藤義則・南條 靖・天野光暉・宮宗正孝・川鍋裕和・山本 肇・乙部憲彦・乙部えみ
田中和真・延原 泉・山崎弘大・横澤信也・林 達也・上原泰彦・猪頭義信・網本善光・林 浩子
河相祐子・今井元子・板東郁仁・板東恭子・板東哲也・齋藤里帆・齋藤真理・山本富造・山本満子

〔一般参加〕

服部 明・森田陽介・宮田正文・小林和夫・山崎弘一・山崎千鶴・山本杉生・物部 実・杉本美代子
森本好子・山崎美和子・畦田真理・畦田理恵・畦田悠正・畦田真介・山形悠真・小谷章浩・赤堀浩一
佐山宣夫・大美知子・藤森広崇・佐藤裕之・飯島尚教・坂東律彦・坂東令子・能宗 仁・矢谷瑞穂
山崎清隆・谷岡孝久・藤原英昭・中黒美恵・万波奈津子・原田益美・藤中仁美・岡本昂樹・岡本詩歩
古林 楓・古林紗也・古林浩司・宮田敏子

(2) 北房文化遺産保存会員・一般参加者寄稿

●発掘作業への参加と生活・安全班の担当として

保存会員 畦田恵子

今回の発掘作業における私の活動は、概ね次のようなものだった。

集合時刻までに常井池駐車場に行き、受付の補助に当たった。ミーティングの後、発掘現場に上がると作業準備の手伝いがあり、発掘作業ではふるい掛けが多かった。

11時頃になると山を下り、クラブハウスへ移動した。そして、チェックリストに従って食事の準備などをした。湯沸かし・玄関や室内の掃き掃除・机拭き(コロナ感染予防のための消毒に留意)・トイレ掃除、白湯と番茶をポットに入れるなどである。寒い日はストーブも点けた。

11時半頃に業者から弁当が届いた。受取った後、12時過ぎに憩いの家(P55写真)へ届けたり、クラブハウスで食べる人に手渡したりした。また、昼食中自由に歓談できるようにと茶菓・コーヒー等の用意もした。

午後1時過ぎ、弁当殻やゴミ、やかんやポット等を片付けた。掃き掃除や拭き掃除・トイレ掃除の後、電源確認をした。チェックリストで再度点検した後、クラブハウスに施錠し、憩いの家の弁当殻を取りに行った。ゴミ袋が一杯になったら振興局へ持って行った。

雪や雨の時は、クラブハウスの床を汚さないように段ボールなどを敷いたりしたが、室内スリッパを用意していただいた後はその心配がなくなった。

クラブハウスや現地説明会の駐車場テント内で、豚汁を振舞った時にも手伝いをした。寒い中での温かい豚汁はとても好評だった。



クラブハウスでの昼食風景



豚汁サービス(令和6年3月2日 現地説明会)

遠くからの一般参加者、時間を割いて関わってくださる会員の方に、少しでも気持ちよく昼食の時間を過ごしていただけたらと思いながらの仕事だった。

この発掘調査によって多くの方々に接し、今まで知らなかったたくさんの体験をすることができた。そして、何より嬉しいのは、発掘調査で結ばれた貴重なご縁が今に続いていることである。様々な交流を通して、この絆を大切にしていきたい。

●第2次発掘調査に参加して

保存会員 梶上 守(新見市)

今回の発掘調査は、地域住民が主体的に発掘調査に関わるという全国的に見ても極めて稀な取り組みでありました。その中で私も保存会や一般参加者、振興局、市教委、同志社大学等、多くの関係の皆様からたくさんのことを学ばせていただきました。第2次発掘調査に参加された関係の皆様の熱意と地道な努力に対し、改めて敬意と感謝を表するものであります。私は、トレンチ4、5、6そしてトレンチ2の作業にあたるが多かったのですが、荒木山西塚古墳の築造について分かったことも多かったが謎も残されたと感じております。トレンチの4では、深いトレンチの中に入り掘り下げましたが、斜面に続く平坦面がいつの時代にどのように改変されていたのか、未だに自分ではよく分かりません。トレンチ5、6では斜面に石列を想定していたのですが、出土しませんでした。足元が悪く、掘った土をふるいまで運ぶのが一苦勞でした。また、トレンチ2では、木の根に悪戦苦闘しました。トレンチ2と言えば古墳と思われる遺跡の発見がありました。前年の鉄斧や古銭の出土に続き赤色顔料が出土したことは驚きでありました。

「東塚古墳が中世の改変を受けていることと、西塚の改変との関連もあるのだろうか。西塚古墳が、古墳時代に築造されて以降、人々の営みとともにどのように手が加えられ現在に至っているのだろうか



令和6年3月2日 現地説明会
トレンチ2の説明

か。」と思うと、感慨もひとしおであります。荒木山の古墳は、いつの時代にどのような営みがあり今日に至ったのかを研究する価値が高い古墳群であると思います。

今回、謎として残されたことが後世の研究で解明されることを期待しています。そのためにも、貴重な文化遺産として、荒木山の古墳群を保存し伝えていくことは現代に生きる私たちにとって重要な使命であると思います。

●荒木山西塚古墳発掘調査に参加して思うこと

一般参加者 山本杉生（真庭市）

思えば、私が中学生の時、社会科クラブに入り、地元の古墳調査を担当した先生に連れられて行き、石室に描かれていた舟の線刻壁画を見たことがあった。当時から今に言う考古学に興味を持ち、土器のかげらがいないかと学校のまわりをうろうろ歩いたものだった。

今回、だれでも発掘体験ができるということを聞き、長年の夢を実現させるため、日程を確かめすぐに応募した。

現地調査は、あらかじめ指定された所を注意しながらガリ、スコップ、バチ、ハサミ、竹べら等を使って掘り、採った土をふるいにかけてという作業が主なものであった。単純で、地道な作業の連続であったが、自分にとっては初めてのことで、しかも何か出てくるかもしれないという期待で全くたいくつしなかった。それどころか、作業しながら、当時の人々の暮らしや社会に思いをはせることができ、実に有意義なひとときをおくらせていただいた。残念ながら遺物を自分で直接発見することはできなかったが、ピンク色をした染料らしきものが見つかったということで見に行った。チョークの粉をぶちまいたような鮮やかな色をしたピンクの粉末が目の前にあった。果たしてこれは何なのか。本当に当時の染料なのか。誰が使ったのか。何のために使ったのか。思いは果てしなく広がった。発掘調査は、ミステリー小説の犯人探しと似て、実におもしろいと思った。

岡山県では、かつて月の輪古墳で有名になった市民参加の発掘調査が行われた。私の住む蒜山でも当時の高校生を中心とした市民による四ツ塚古墳の発掘調査が行われた。しかし、その後は、一般市民が遺跡を発掘できる機会はほとんどなかったのではと思う。今回コンソーシアムのみなさんの企画でこんなにすばらしい体験をさせていただいた。本当にありがとうございました。



トレンチ2のふるい掛け作業

●古墳掘る(その2)

保存会員 天野光暉

墳頂^{ふんちよう}は冷たき風を生むところ
柴搔^{しば か}いて古墳^{なり}の態のあからさま
トレンチの土は振るひに年の暮れ
ヘルメット隣と当たる音^き冴ゆる
先生も生徒も厚着古墳掘る
トレンチのあちこち木の根出て寒し
鋸^{のこ}や鑿^{のみ}木の根を取りぬ冬の汗
鋏^{はさみ}にて鬚根を取りぬ北の風
手のひらに土師器^{はじ き}の欠片^{かけら}肌寒し
陶片をやさしく洗ふそぞろ寒
春寒や地山^{じ やま}さがしてバチやガリ
春蘭^{しゅらん}の根の踏んばりし古墳かな
春うら見たことの無き須恵破片^{す え}
春泥^{しゅんでい}に筵^{むしろ}を敷きぬ古墳径
三月や今日の終はりに辰砂^{しんしゃ}出る
もてなしの豚汁出たり説明会



手のひらに土師器の欠片肌寒し

注記：辰砂… 顔料に使われる鉱物。ここでは赤色顔料の意 (P104参照)

●一人でも、初心者でも

一般参加者 山崎美和子(真庭市)

約30年前の高校時代、歴史研究部に所属しており、日本史が好きな学生でした。部活動として各地の博物館をまわったり、たたら跡の測量を経験したりしていました。しかしその後は歴史から離れてしまい、漠然と興味があるままでした。

今回、真庭市のホームページでこの発掘調査の一般参加者募集を知り、昔の記憶がよみがえり、ぜひ参加したいと思い立ちました。

募集要項をみて、平日の参加ができること、3日以上に参加が必要ですが、その日は自分で選べることで、仕事との予定を合わせることが容易でした。たいていのイベントは土日に開催されることが多いのですが平日休みのほうが取りやすい仕事のため、ありがたかったです。

参加が決まり、送っていただいた資料がとても参考になりました。今回参加して良かったと思えることの一つでした。「発掘作業の手引き」(資料18)は、カラーであることで実際の道具の色形が具体的にわかり、道具の扱い方も詳細に説明されていました。また、実際の荒木山の風景の写真があったことで、まったく知らなくてもイメージがつかみやすかったです。参加前には必ずその手引きを読み込みました。「発掘調査のしおり」(資料17)もカラーで、地図が豊富で、休憩場所などまったく迷うことなく行くことができました。今回のプロジェクトの概要も掲載されており、ただ楽しいだ



トレンチ3の掘り下げ作業

けのイベントではなく、プロジェクトに参加させていただいているだと気の引き締まる思いがしました。

今回、一人での参加ですので、周りは知らない方ばかりで、どのように動いたらよいのだろうかと大変緊張していました。しかし、朝にスケジュール表をいただき、「この時間帯には」「この場所で」「この仕事をする」というのが明記されていたので、これを頼りにして動くことができました。また、保存会の皆様に声をかけていただいたり、仕事を振っていただいたり、休ませていただいたりと、目を配ってくださっているのがありがたかったです。保存会の皆様はどなたも知識が深く、気軽に質問することができました。私が参加した日の一般参加者の方も専門的な知識を持っておられる方が多く、荒木山だけでなくその他の地域との関連性のお話を聞くことができたり、土器や石について教えていただいたり、とても興味深かったです。

トレンチを掘り進めるのはなかなか難しく、失敗したらどうしようと思いながらなかなか効率よい作業ができなくご迷惑をおかけしました。土器片が出ると皆さんと喜ぶことができたのが楽しかったです。土器片の洗浄も体験させていただき、作業を夢中で行い、高校時代に戻ったような気持ちになりました。



北房小学校6年生の参加（トレンチ3付近）

小学生の参加もありました。自分の子どもと同じ年代の小学生や大学生の方、父親と同じくらいの年代の保存会の方と世代を超えて一緒に活動できて楽しかったです。

今回、3日間とても貴重な体験をさせていただきました。記憶と記録に残り、愛される荒木山西塚古墳に少しですが関われたことを誇りに思える体験でした。

日々の生活のなかで薄れていた学術的なものへの興味を呼び起こしてくださった調査員の先生、参加初日に不安をつぶやくと、そういう目的ですから大丈夫と仰ってくださった振興局の職員の方、そして、経験者でも地元住民でもないのに暖かく迎えてくださった保存会の皆様に心より感謝申し上げます。

●荒木山古墳発掘調査に参加して

保存会員 河相祐子（倉敷市）

還暦を迎える年に、生まれて初めて、埋蔵文化財の発掘調査に参加させていただきました。私は、学生時代に歴史学を学びましたが、日本近世史専攻だったため、もっぱら古文書と格闘していました。古文書とは違い、発掘調査は、実際に土の中から遺物が発見されることで、歴史が蘇る感覚で、胸が高鳴りました。ガリや時に刷毛を使うなどして慎重に土を削り、そのはぎとった土を手箕で受け取りふるいにかけて、またそこに土器片が残っていないか目を凝らす時間は、まさしく宝探しのようなものでした。慎重に掘り進めるたびに、過去と向き合っている実感がありました。暑い夏や寒い冬など季節を問わず行われる発掘作業は、とても過酷ですし、根気が必要な作業です。そうだからこそ、小さくても遺物を発見できたときの感動は大きく、忘れられないものになるのです。この歳になって、歴史を肌で感じられるこのような貴重な体験をさせていただけたことを大変うれしく思います。



トレンチ4の掘り下げ作業

今回の発掘調査は、住民参画で行われた全国初の取り組みとお聞きしました。北房地域の皆さんの「荒木山の古墳」を想う情熱と行動力に敬服します。「西の明日香村」構想が構想でなくなる日も近いと思います。影ながら応援しています。

●荒木山西塚古墳の発掘調査に参加して～まさに、令和の「月の輪古墳」～

保存会員 網本善光(笠岡市)

個人的な思い出からお話します。

私は大学で考古学を専攻いたしました。大学2年生の夏、アルバイトで岡山県教育委員会が実施していた発掘調査に参加しました。総社市の「殿山古墳群」という遺跡です。そして、その調査を担当されていたのが、平井勝さん(P4注記参照)。その後もいくつかの遺跡で平井さんにはお世話になりました。けれども、卒業後の私は考古学の道と離れていました。

そんなある日、岡山駅でばったり平井さんにお会いしました。その時教えていただいたのが「大谷1号墳」の調査のこと。特に、その被葬者が「吉備大宰」と考えられることでした。電車の中の短い時間でしたが、「北房」という地名が私の中に刻まれました。

その平井さんが亡くなられ、私の中では「北房」という地域は、特別な存在であり続けています。今も、です。ですから、「北房で古墳の調査が行われている」、しかも「住民団体が中心となっている」、さらに「一般参加も可能」と聞き、保存会に連絡を差し上げたのです。

第2次発掘調査からの参加となりましたが、私には驚きの連続でした。

まず、調査する遺跡のすばらしさ。荒木山西塚古墳は見事な前方後円墳です。形といい、大きさといい、まさに「首長墓」です。この古墳を地域の歴史にどう位置づけるか？ワクワクしました。

そして、調査体制のきめ細やかさ。教育委員会、大学、そして保存会の皆さんがそれぞれに役割をもって主体的に調査に参加されていました。古墳の調査を通して、地域の歴史を解明してやろう！という意気込みを強く感じました。

さらに、調査成果がフォーラムの中での展示や映像資料として、また調査報告書として発表され、深められていることに敬意を感じずにはいられません。



トレンチ3の掘り下げ作業



令和6年3月2日 現地説明会 トレンチ4の説明

なにしろ、地域の歴史を大学や教育委員会の指導を受けながら、地域住民自らが文字どおり「掘り起こす」のです。こうした取り組みは、令和の現代では全国的にも例がないと 생각합니다。このことは、誇るべきことであり、胸を張って全国に発信してよいものです。

振り返れば、岡山県では、戦後の昭和28年に「地域考古学の原点」とも言われる「月の輪古墳」(美咲町)の発掘調査が行われました。研究者と地元住民・児童生徒が力を合わせて古墳を発掘し、地域の

歴史を自らの手で明らかにした「月の輪の心」が、令和の時代に真庭市北房地によりみがえったのではないのでしょうか。

発掘調査自体は終わりましたが、荒木山西塚古墳の調査結果の検討を基にした地域の歴史の解明はまさにこれからです。ですから、真庭市北房地域で進められている新たな取り組みに関わらせていただいていることに、私は大きな喜びを感じています。そして、私にできることがあるとすれば、こうした取り組みの成果を文章にして、発表・発信することではないかと考えています。

故平井勝さんへの感謝も込めて。

参考文献：近藤義郎・中村常定『地域考古学の原点 月の輪古墳』新泉社、2008

●古墳発掘調査に参加して

一般参加者 原田益美(真庭市)

「このチラシをどうぞ」

歴史番組について雑談をした北房文化遺産保存会の方から、古墳発掘調査一般参加者募集の案内をいただいた。古墳や発掘作業について、知識がない私でも参加できる、それも遠方へ足を運ばなくても地元で。これもなにかのご縁と思い申し込みました。

第1次発掘調査は11月に一日のみ参加しました。初めての参加者にはまず古墳や発掘作業についてのガイダンスがあり、その後作業にとりかかりました。

トレンチの掘り下げや木の根の処理、排土のふりかけなど、どの作業も思っていたより体力と根気が必要なものでした。土器片にはなかなかお目にかかれなけれど、もしかして土器片？と期待しながらの作業は楽しく、あっという間に時間が過ぎていきました。



トレンチ3の掘り下げ作業

第2次発掘調査は、12月と2月に一日ずつ参加できました。恐る恐る作業していた1次調査に比べれば、多少要領よく作業できたでしょうか。作業中、調査員や保存会の方から作業の仕方を教えていただいたり、様々な話を聞くことができたのも楽しかったことの一つです。

古墳前部（トレンチ3）の作業では、土に埋まった状態の土器片やずらりと並べられた白色の石を見ることができました。作業にはかなりの体力が必要でしたが、この光景を目にすると疲れも吹き飛びました。古墳がこの地に作られたいきさつや、当時の人たちがどのように古墳を作り上げていたのかなど、想像が広がっていきました。



発掘作業以外にも、深く一礼して敷地に立ち入る中学生の姿や、昼食時に他の参加者と会話が弾んで楽しかったことなどが思い出されます。参加者は年齢も様々でしたが、皆さん古墳に馴染みがあるようで、古墳に詳しく古墳愛の深さを感じました。作業中、落ち葉を取りに来られた近隣の方にお会いしたり、保存会の方から荒木山東塚古墳には社が祀られていることも教えていただいたりしました。古墳ではあるけれど、日常生活の場所としてずっと利用され続けているのだと改めて感じました。

発掘調査に参加したことで、古墳に実際に”触れる”という貴重な体験をするとともに、1500年以上前に作られたものと向き合っているという”不思議な感覚”を味わうことができました。荒木山の古墳に限らず、自分が住んでいる地域について知らないことがたくさんあることに気付かされ、もっと地域に目を向け大切にしていきたいと感じました。それが日々の生活を楽しくすることに繋がっていくならば、幸いだと思います。

●未来は明るい

保存会員 山本 肇

あざえ
皆部小学校に赴任し、6年生を担当した時の記憶に、夏休みの宿題の中で当時の北房町の古墳巡りをした子ども達がいたことを思い出しました。確か3人の子ども達が、古墳と言うよりは古代の歴史全般についてビックリするくらい丁寧に、何枚もの模造紙に描いたものが今も残っています。あとで聞いたのですが、中には大学もその方向を目指した子がいたとか。

こんなこともありました。ある時、私が日帰り吉野ヶ里遺跡見学を計画し、そのことを子ども達に紹介すると、「僕も私も行きたい。」という声があり、「家に帰って相談してからにしよう。」とその場は終わったのですが、次の日には「家の人が行ってもいいと言ったよ。」という声が多くあり、計画を進めることにしました。暗いうちに高梁^{たかはし}駅を出発し、帰って来るのは暗くなるので家族の方の協力なしではできないと考えました。途中、鳥栖^{とす}の駅ではトイレ以外動き回らないようにさせ



トレンチ3の埋め戻し作業

ました。吉野ヶ里遺跡に着いてから、ガイドさんに色々^{たず}尋ねられ、今朝、高梁を出発し、夕方には高梁に帰ることを伝えるとビックリしていたのを覚えています。環濠集落や朱塗りの棺等について説明をしっかりと聞きました。参加した子ども達を書いた文章を中心に、記念冊子を作成しました。残念ながらその冊子を見つけることはできませんでした。当時の校長先生には大変お骨折りいただきました。

また、当時の教頭先生から言われた、「君は北房出身というだけで、北房のことは知らんなあ」という言葉を覚えています。私自身も本当に知らなさ過ぎると思いました。中津井の金比羅神社の屏風岩、



トレンチ4 水掻き作業

佐井田城、高岡神社、大谷・定古墳群、中津井小学校のせんだんの木、北房ふるさとセンター等沢山ありました。北房文化センターにもいろいろな資料が展示されています。展示の説明書きをゆっくり読み込むことはできないのですが、新しい発見が沢山あります。

そうこうしているうちに、荒木山西塚古墳の発掘の話が持ち上がりました。北房について少しでも知りたいと思っていた私にはうってつけの話でした。ドローン撮影について知ることができたり、著名な先生方のお話を聞くこともできました。発掘と言っても指示された通りに掘る作業が中心で、一緒に活動している先輩方の話を聞きながら、時には津村先生に質問しながらの作業でした。直接発掘に携われる機会にはそんなにはありません。

さて、令和7年2月に開催された「西の明日香村北房フォーラム」

に参加しましたが、北房小学校の児童が作成した「荒木山新聞」「荒木山古墳に関する記事集」「北房ウォークラリー」「北房の古墳図鑑」は参考になりました。ウォークラリーの古墳クイズ10問では、悩む問題もありましたが8問正解でした。手作りの参加賞ありがとうございました。北房の古墳の基礎的なことも知らない自分に気づきました。数々の記事を興味深く読ませていただきました。北房中学校では同志社大学生との生きた交流活動（5つの取り組み：クイズラリー、音声メディア、動画、スイーツ、カレンダー）。また、「きょうカフェ」の店長さんにお世話になったのスイーツ作り、津村先生や北房小・中学校の先生方そして、大学生の皆さん、説明等でお世話になった保存会のみなさん本当にありがとうございました。

北房が好きになっていく子ども達は着実に育っていると思います。北房のPRは、北房地域の住民によってなされていくのがよいと思います。外から多くの方が北房の古墳等の見学に来られることはもちろんのこと、北房地域の多くの方に北房の古墳等について理解していただき、よき愛好者になっていただければこれ以上のことはないと思います。北房の古墳等が宝の持ち腐れにならないよう、日夜頑張っておられる愛好家のみなさんがおられることを忘れないでほしいと思います。「西の明日香村」構想、大いに頑張してほしいと思います。定期的な説明会、見学会、講演会等これからも楽しみにしています。

●発掘の先に見えたもの ～北房での学びと気づき～ 保存会員 山崎弘大(倉敷市)

岡山高校1年生の山崎弘大です。私は中学1年生の頃から北房文化遺産保存会の一員として活動し、これまで二度の発掘調査に携わってきました。今回は、第2次発掘調査での経験や感じたことをお伝えしたいと思います。拙い文章ですが、最後までお読みいただけると嬉しいです。



トレンチ3の掘り下げ作業

私は、中学二年生のときに第2次発掘に参加し、主にトレンチ調査を行いました。トレンチからは多くの遺物が出土しましたが、それらのほとんどは古墳に伴う土器ではなく、中世の青磁器や弥生土器、あるいは石ころや木の根っこ、さらにはミミズやゴキブリまで出てきました。それでも、一つ一つがまるで宝物のように見え、とても楽しく感じました。

中でも特に印象に残ったのは、西塚古墳の北で新たに発見された古墳と思われる発掘です。「主体部を発掘している」という期待感の中、新たな遺物を探す時間は、まるでインディ・ジョーンズになったような気分でした（笑）。結局、古墳に関係する発見はありませんでしたがそれでも、非常に記憶に残る発掘となりました。

それだけでなく、現地説明会もとても印象に残っています。来訪者に向けて発掘の成果をわかりやすく説明する会員の方々に憧れを抱きました。自分もいつか、あのように自信を持って古墳について語れるようになりたいと感じました。



古墳の発見？ トレンチ2拡張部

さらに、来訪者の方々に「ありがとうございました」とお礼を伝えると、皆さんが笑顔で「お疲れさま」「とても興味深かったよ」と声をかけてくださり、とても嬉しくなりました。自分たちの調査が誰かの学びや楽しみにつながっていることを実感し、やりがいを感じた瞬間でした。また、今回の調査を振り

返ると、特に強く印象に残ったことが2つあります。

1つ目は、北房が歴史とロマンに満ちた街であることです。私はこれまで北房にはほとんど行ったことがなく、「蒜山に行くときに通る街」程度の認識しかありませんでした。古墳があることは知っていましたが、それほど重要なものではないだろうと考えていました。しかし、調査を進める中で貴重な遺物が次々と発見され、「北房ってすごい!」と驚かされました。まさに「西の明日香村」と呼ぶにふさわしい場所だと感じました。その印象を強くしたのは、荒木山西塚だけではなく、弥生時代からの大規模集落である谷尻遺跡^{たにじり}、終末期古墳の大谷・定古墳群^{おおやさだ}、さらに英賀廃寺^{あが}など数々の文化遺産が点在していることを知り、北房の歴史の奥深さに改めて感銘を受けました。



トレンチ3のふるい掛け作業

2つ目は、北房の方々の地域に対する愛です。私は倉敷の水島で生まれ育ちましたが、水島では地域の歴史に深く触れる機会はありませんでした。しかし、今回の調査を通して、北房の方々が土地の歴史を大切にし、それを次の世代に伝えようとする思いの強さに驚きました。調査をしていると、地元の方が気さくに声をかけてくださり、昔の貴重な話を教えてくれました。古墳や文化遺産のこと、地域の伝承や伝統について丁寧に話してくださる姿が、とても印象的でした。水島では、日々の生活の中で地域の歴史に意識を向けることはありません。北房の人々が当たり前のように歴史を語り、誇りを持っている姿を見て、「自分の住む町にも、まだ知らない歴史があるのでは?」と思うようになりました。この調査を通して、地域の歴史を学ぶことの大切さに気づくことができました。

今回の発掘調査を通じて、私は北房の歴史の奥深さと、それを大切にする地域の方々の思いに触れることができました。遺物の発見や現地説明会での経験はもちろんのこと、自分自身の視点が変わったことも大きな学びです。これまで何気なく通り過ぎていた場所にも、たくさんの歴史や物語が息づいていることを実感しました。今回の経験をきっかけに、これからも地域の歴史に関心を持ち、古墳や歴史の魅力をもっと知りたいと思います。

●古墳の発掘に参加して

一般参加者 畦田悠正

ぼくは、家族みんなで発掘に参加しました。発掘作業をしたのは、前方部のトレンチ3です。はじめにしたのは、掘った土のふるい掛けです。母と姉と三人でしました。ふるいをゆすって入れた土を落とし、



トレンチ3の掘り下げ作業

残った中から土器などのかけらをさがします。なかなか見つかりませんでしたが、見つけた時は小さかったけれど思わず声が出るくらいうれしかったです。初め簡単そうに思えたふるいがけでしたがやってみるととても重くてむずかしかったです。つかれました。

次に、平たく掘られた中に入って、先が三角のようになったガリで掘り下げました。同じところばかりかかず、平たくかいていき、かいた土をオレンジ

色のテミに入れました。テミの土はふるいのところに持って行きます。ずっとしゃがんで掘るので腰が痛かったです。トレンチのはしの方には石がたくさんありました。

発掘から帰って、古墳を発掘していろんなものを掘り出すゲームをつくってみました。土器のはへんやハニワを見つけるとポイントが上がります。土やゴミなどは外れでポイントは上がらず、逆に下がったりします。ゲットしたポイントでいろいろなアイテム（ケーキやスコップなど）を買って作業効率を上げたりステージを変えたりできます。祖父には、少ししてもらいましたが、しばらくして途中でゲームづくりはストップしてしまいました。古墳をあまり知らない人に興味をもってもらうにはゲームのようなものもいいのかなと思います。

●古墳の発掘に参加して

一般参加者 畦田真理

今日（2月18日）は、荒木山西塚古墳の発掘調査がありました。私は、家族と参加しました。

初めはトレンチ3のふるい掛けでした。母と弟としました。掘られた土をふるいに入れてガサガサゆすりしました。すごく力が入りました。茶色の土器っぽい破片があり、土器だったらいいなと思って聞きました。「土です。」と言われてちょっとがっかりしました。しかし、その後なんと土器の破片も見つかり、出た土器を置くところに置きました。とてもうれしかったです。

ふるいがけの次は、トレンチの掘り下げをしました。昨日、トレンチ3から土器がたくさん出たとのことで、期待しながらガリで掘り始めました。白い大きな石がたくさんうまっていました。「これは何なのですか。」と保



トレンチ3のふるい掛け作業

存会の人に聞くと、「おそらく昔の人がやったんじゃないかと思うけどなあ。」と言われました。石の近くを掘っていると、5 cmくらいの灰色っぽい大きな土器の破片が見つかりました。大きいし、形が少しまがっていたので、「つぼとかの破片じゃろう。」と弟が言っていました。こんな土器は見たことがなかったので、私はとてもびっくりしました。



トレンチ3の掘り下げ作業

他の人が掘っていたトレンチ2からは、去年の発掘調査の時、鉄器が出てきたそうです。おのだったそうです。見ることはできませんでしたがすごいと思いました。今日の発掘体験で、私は昔の人の生活にふれることができてとてもうれしかったです。これからも発掘に参加したり、北房の古墳を守ったりしていきたいと思います。

●そして、保存会は踏ん張った

保存会員 平城 元

発掘作業が開始される2年3ヵ月程前に「市長と話そう！」があり、その後、発掘調査が本当に実現しそうだとの話が出始めた頃から、文化庁監修の『定本 発掘調査の手びき』や文化庁文化財部の『埋蔵文化財 発掘調査の手びき』の他、発掘作業に関連する書籍を何冊か手に入れて読み始めた。これらに共通していたのは、発掘技法等に関する詳細説明の前に、発掘調査の基本的な認識、取り組み姿勢が書かれていたことである。

「保存目的の調査であっても、遺跡を解体することは避けられない。したがって、調査対象範囲を適切に設定し、精度の高い発掘調査をおこなって、最大限の情報を抽出することが重要である。」「学術調査、緊急発掘調査のいずれであろうと調査者自身は学術研究の方法からそれることなく行うよう努めるべきである。」「遺跡がそこにあるから掘るといった興味本位の発掘や実習のための発掘は単なる破壊行為に過ぎないことを強く認識する必要がある。」「遺跡は一度発掘されれば決して元の状態には復元できず、その遺跡が長年保ってきた様々な情報を一挙に破壊してしまうため、発掘調査はきわめて高い問題意識が必要な作業として位置づけなければならない。」「発掘調査はその遺跡に対する一回だけの、そして最後の行為と考えて取り組まなければならない。」等々、非常に厳格な、思わず身構えるような言葉が並んでいた。

さらに、「一般に古墳の発掘調査は、他の埋蔵文化財の中でも特に高度の調査技術と現場管理能力が求められる。」という一文を目にした時、漠然とではあるが、これから大変なことをしようとしているという思いが強くなった。もちろん、私たち保存会員は調査員の指示にしたがって、掘り下げ作業を行うわけであり、そこまで過剰な心配は必要ないとも思った。しかし、調査員が指示する内容や意図を正確に理解できる知識と、期待どおりの掘り下げ作業ができる技量があるのかと自問すれば、当然のことながらまったくなかった。とにかく、発掘調査が始まるまでに、発掘作業に関する用語の理解や発掘技法の基本等について、勉強だけはしておくことにした。

発掘調査の概要が少しずつ分かりかけてきた頃、ある打合資料に、「体制を含めた発掘調査の質の担保」に関する問題提起的な文言が記されていた。このことは今回の発掘調査において、最大のポイントのひとつであると私も考えていた。ただ、その頃（令和4年の春頃）気になっていたのは、難度の高い古墳の発掘調査を、地元の保存会という発掘に関してはまったくの素人集団が主体となって発掘作業を行うという、誤解を招くような風説であった。この問題提起的な文言もこのようなことが背景にあったのかもしれない。しかし当時、市教委が作成した資料には、「発掘調査は実施主体の教育委員会が責任者となり、地域住民が主体的に参画し実施する。」とあるように、保存会が主体（中心）となって保存会の判断で発掘作業を行うわけでは決してなく、保存会は主体的に参加し、発掘現場の調査員の指示によって、作業する上での主力となる形態である。この点、これ以上誤解が拡大しないよう表現には注意しよう、ということを会議で提案した記憶がある。

もちろんそうした誤解を除いたとしても、“質の担保”を図るために発掘体制をどう構築するかということが、極めて重要な課題であったことに間違いはない。市教委もこの点、かなり苦労されたと思うが、最終的には資料28の組織体制になった。官・民・学からなるコンソーシアムに、考古学の専門家等からなる発掘調査サポーターおよび専門的見地から発掘調査の検討・計画・指導助言をするワーキンググループを加えた重厚な体制ができたと思う。

発掘班リーダーということもあってか、ワーキンググループの会議を初回から傍聴する機会を得た。提案されたトレンチ位置・大きさの妥当性、トレンチ規模に対する計画期間（実働数）・配置人員の妥当性、またトレンチでは何に注目し、注意すべきか、あるいは想定される課題（例えば、断ち割りの要否）、さらには安全確保のための養生作業に至るまで詳細に審議された。前述の「調査対象範囲を適切に設定し、精度の高い発掘調査をおこなって、最大限の情報を抽出する」という、簡潔すぎて読み過ぎするような内容を、真に実



トレンチ1 墳丘裾付近の掘り下げ作業



作業終了後の成果報告会（駒澤大学 寺前教授の説明）

土課程の鈴木さんにマンツーマンの指導を受けながら、作業道具の使い分け方と掘り下げ方、そして道具の片付けに至るまでの基本に加え、トレンチのセクション（断面）の見方等を多少なりとも学べたことは大変ありがたかった。さらに、作業後は当日の成果報告会がトレンチごとにあった。この報告会も非常に勉強になった。こうして、限られた時間ではあったが、知識面と現場での作業をある程度事前学習できた上で一般作業者を迎えることができた。

作業期間中に心がけていたことは、「この発掘調査は失敗だった」という評価には絶対にならないよう、安全面も含め気を抜かないということであった。

今回の発掘調査が語られる際に必ず出てくるのは、美咲町飯岡の月の輪古墳の発掘調査である。昭和28年（1953年）、岡山大学の近藤義郎助手（当時）を中心として地元住民や教師、学生らが参加した。この活動・調査は「月の輪方式」と呼ばれた。当時、どのような組織体制で実施されていたのかは明確ではないが、今回のような官・民・学を中心としたコンソーシアム体制のもと、県内から一般参加者を募り、地元の小・中学生も参加して発掘作業を実施するという方式はおそらく国内初であろう。令和6年（2024年）3月に北房文化センターで開催された「西の明日香村フォーラム」に出席された海外における発掘調査にも明るい早稲田大学の田畑幸嗣教授からは、「（この発掘調査の実施内容は）おそらく世界初ではないか」とのコメントがあった。

いずれにしても、過去に例のない方式での発掘調査に対して、少なからず考古学関係者の関心と呼んでいるとするなら、是が非でも成功させなければならなかったと思う。「貴重な古墳が台無しになった」という評価だけは避けたかった。

今回の発掘調査の学術的成果は別にして、こうした方式でも発掘作業はできるというひとつの事例として、広く知ってもらいたいことが、今回の最大の目標であると個人的には考えていた。そのために、発掘現場で一番踏ん張らなければならぬのが、私たち保存会であるとも思っていた。そして、保存会員は本当によく踏ん張った、と思っている。

発掘作業が終わった今、荒木山西塚古墳の歴史的な位置づけとその価値を明らかにして、得られた資料を地域住民の財産とし、かつ地域の過去を理解していく上で欠くことのできないものとして、保存・活用していく必要がある。そのためにはどうすればよいのかを考えていかなければならない。それが私たちの推進する「西の明日香村づくり」につながる道でもある。

いつか日本のどこかで、かつて北房で行われた事例を参考にしながら、一歩も二歩も進んだ発掘調査が行なわれることを期待している。

現するための検討がなされた。発掘調査をする上で、当然のステップなのかもしれないが、精度の高い発掘調査を行うためには、専門知識と幅広い見識および豊富な経験がいかに必要であるかということ、ワーキンググループの審議を通して強く感じた。

そして、発掘作業がスタートした。分からないことも多い中で、一般参加者が来るまでの約1週間、駒澤大学大学院博士課程の鈴木さんにマンツーマンの指導を受けながら、作業道具の使い分け方と掘り下げ方、そして道具の片付けに至るまでの基本に加え、トレンチのセクション（断面）の見方等を多少なりとも学べたことは大変ありがたかった。さらに、作業後は当日の成果報告会がトレンチごとにあった。この報告会も非常に勉強になった。こうして、限られた時間ではあったが、知識面と現場での作業をある程度事前学習できた上で一般作業者を迎えることができた。



早稲田大学 田畑教授

●発掘作業の総括として

保存会員 畦田正博

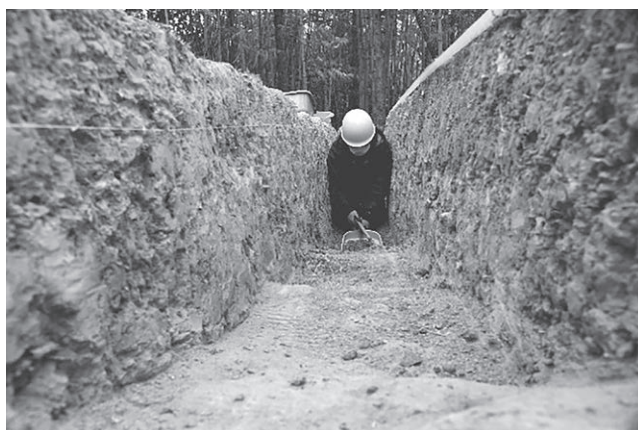
令和5年1月28日、北房文化遺産保存会の令和5年度総会があった。そこで、久松会長から会長の座を受け継ぐこととなった。自動的に発掘調査において市民参加・活動の受託責任者となり、保存会関係の統括として、発掘、記録・広報などの班を取りまとめ、連絡調整などに当たる。それに伴い、班の担当者も一部変更した。とはいえ、限られたメンバーであり、生活・安全班の補佐も行った。2年次でもあり、1年次の活動をもとに改良も加えており、運営もスムーズに行われ、特に統括として頭を悩ますようなこともなかった。役員・会員がそれぞれに協力し熱心に取り組んでくれたおかげと感謝している。

(3)報道機関記者・大学・真庭市職員・サポーター寄稿

山陽新聞真庭支局支局長 小谷章浩

真庭市北房地域を代表する荒木山西塚古墳の発掘調査の取材に当たった。紙面では持続可能な郷土づくりに光を当てる山陽新聞社の「吉備の環アクション」として報じ、専門家の視察や地元児童生徒の体験、成果報告会までつぶさに追った。

特に充実した成果に驚かされた。表土の状況などから大きな発見は難しいのではとの見方もあったが、初年から後円部の墳裾や斜面を巡る石列、珍しい壺形土器などの遺構・遺物が相次いで出土。2年目には東塚古墳との間から新たな古墳の痕跡も見つかり、学術的価値をぐっと高めた。



北房文化遺産保存会を中心とした住民の努力と熱意にも感心させられた。いつも生き生きと発掘作業に当たる皆さんの姿が印象深かった。その思いに触れたくて、私自身も2年目に一般参加者とともに発掘作業を体験させてもらった。

平成30年（2018年）の改正文化財保護法で文化財の活用が重視されるようになった。今回の取り組みは古墳活用に向けた新たなモデルになることは間違いない。そんな可能性を感じさせられた2年間だった。

●真摯な熱意を刻む一レンズ越しに辿る古墳の記憶

真庭いきいきテレビ 報道制作課 鈴木健司

今日はどんな発見があるだろうか。取材を重ねる度に期待感が高まってきました。記録映像の制作が、現場に足を運ぶきっかけでした。私は、少なくとも30回は発掘現場に向かいましたが、皆さんが使っていたガリやバチに触れることは一度もありません。撮影に徹するためであり、何より皆さんの手で歴史を掘り当てる光景にこそ、真の意義があると考えたからです。



いつ発見があるかは分かりません。だからこそありのままを記録しようと、カメラを回し続けました。次第に自分も一緒に発掘しているような感覚になり、欠片が見つかった瞬間の喜びを共有できたことは、私の中に残り続ける財産です。この体験そのものが「文化遺産」に値するとさえ感じています。

地域に眠る古墳の記憶を辿る今回のプロジェクトは、10年来の付き合いとなる皆様との絆を再確認する場でもありました。レンズ越しに見つめた真摯な熱意を映像に刻み、この地の誇りとして未来へ繋ぐことが、私の果たすべき役割だと願っています。

●荒木山西塚古墳の発掘調査を通して

西村航希(松江市埋蔵文化財調査課)

私は、駒澤大学大学院に在学中に、幸運なことに未発掘の前方後円墳である荒木山西塚古墳の発掘調査に参加することができた。

この発掘調査は、行政、市民、大学が連携して実施するという全国的にも珍しい調査であり、専門的な知識を活かし、正確な調査をする事はもとより、市民の方々と交流しながら考古学や古墳の魅力を発信していくことを個人的な目標として、調査に参加させていただいた。調査の成果としては、墳裾の確定、基底石の確認など古墳の規模を確定させる要素を確認できたことが挙げられる。

宿泊先では、およそ10名で生活していたが、地元の食材を使って、夕食を作るなど合宿しながらの光景となった。コロナ禍で大学の泊まり込みの発掘調査が無くなった我々にとっては、ありがたい体験であり、楽しませていただいた。

食事の際には学生のみならず、寺前先生にもフライパンを振っていただくなど珍しい経験をしつつ、地元の食材を堪能した。また、調査時は、サッカーのワールドカップが行われており、早朝の寒い中、目を擦りながら宿舎でサッカー観戦したことも記憶に新しい。

荒木山西塚古墳は、古墳の規模から有力な首長墓であることが想定される。主体部には、盗掘坑があるものの、未盗掘と考えられる。今後さらなる調査を行政、市民、大学で行うことを望み、私も引き続き携われればと思う。



●荒木山西塚古墳の発掘調査を通して

真庭市落合振興局長 大塚清文



私が北房振興局に配属されたのは令和4年、初めての北房の地へ、ましてや初めて振興局長としての勤務でした。その年の冬には、保存会・CKSCH・市教委と振興局が連携して進めてきた「西の明日香村コンソーシアム」による荒木山西塚古墳発掘調査が決まっていると聞きました。北房地域の隣町出身の私は、この地域に数々の古墳群や文化財があることは知っていましたが、知識も浅く、当初振興局長として何ができるのか不安と焦りを感じました。

しかしながら、ここまで何年もかけて会議や調査など入念

な段取りが行われてきたこと、また長年にわたって北房地域の文化財保護に尽力されてきた保存会の献身的な活動を通じて、地域の文化を誇りとして受け継ぎ、次代へとつなぎたいという熱い思いが伝わってきたこと、さらに若い頃から北房地域に根差した文化財保護活動をしてこられた津村先生の、この地域への熱い思いを知ったときに、何か安心した気持ちになったと同時に、市教委と振興局もコンソーシアムとして一緒に取り組んできた流れをきっちり進めていかなければと思いました。

今回の発掘調査は一般の方も参加して行う全国的にも稀な調査であり、予想を大きく上回る多くの方々の参加がありうれしい悲鳴でした。いざ調査が開始するまでに、枯れ葉などの掃除や道具の調達・運搬にも保存会の皆さんの積極的な関わりや、CKSCHの先生方、市教委職員等との入念な打ち合わせがあつてからこそスタートできたと思います。また、コンソーシアムに発掘調査ワーキンググループが設置され、古墳発掘サポーターとして諸大学の専門家の皆様の力強いご支援とご協力をいただくことで、さらにパワーアップできたと感じており、多くの関係者の皆様のご協力のおかげで調査ができたことに感謝でした。

保存会の皆様は、一般参加者への指導は自分たちがという高い意識を持たれ、その思いを胸に、発掘班や広報班、庶務班などを担い、参加者を温かく迎え入れ、発掘調査全般に一生懸命取り組まれている姿を見て胸が熱くなりました。また、北房女性の会の皆様が、おもてなしの気持ちで、参加者に豚汁を振舞ってくださったことも決して忘れません。私自身が今回の発掘調査における一助となれたかどうかわかりませんが、この事業に関わり、北房地域が育んできた文化の深さと地域の人たちの温かさを改めて実感させられた思いです。この地域が今後ますます西の明日香村として発展しますことをお祈りします。

●わかったことと新たな課題

ワーキンググループ委員・保存会員 行田裕美(元津山市生涯学習部長)

現在、岡山市の造山古墳、総社市の作山古墳で発掘調査が行われている。これらの調査は言うまでもなく、墳丘規模の確認や埴輪・葺石等に代表される外表施設の情報を正確に把握することを目的として行われている。

荒木山西塚古墳の調査も同様の趣旨で実施され、現存長約64m、後円部径40m、2段あるいは3段築成の前方後円墳であることが判明した。築造時期は4世紀後半頃と推定されている。墳端を中心とした小規模な調査であり、多くの成果は期待できないもののそれなりの成果はあったように思われる。

その一方で新たな課題もいくつか浮上した。以下、特徴的なものをあげてみる。

第1点は埴輪部から出土した口縁部を欠いた頸の長い壺形土器である。今回出土した土器の中で最大のものである。これまでこの種の土器の出土例は知られておらず、この土器をもって古墳の時期を特定するにはいたらなかった。

第2点目は前方部埴輪の平坦面から出土した瓦質系土器の所属年代がいつかということである。この土器の外表面は斜方向の並行叩き目文、内面は無文当て具である。幾人かの先達に見ていただいたが、統一見解を得るまでにはいたっていない。前方部前面は若干削平を受けていた。その時期がこの土器の年代と推定されるのであるのが。

第3点目は東塚古墳と西塚古墳の間の小規模な高まりの存在である。従来は自然地形と考えられていたが、中心付近に墓壙が確認され赤色顔料が出土したことから墓であることは



間違いない。墓壙の上位からは板状鉄斧が出土した。この鉄斧が墓壙に伴うものであるとすれば、古墳時代前期頃の方墳と考えられる。他方、墓の形状が隅丸長方形を呈していること、盛土は墓壙を覆うだけの小規模なもので、隣接の東塚と西塚古墳のような本格的な盛土が行われていないなどから弥生時代の墳丘墓の可能性もないわけではない。

埋蔵文化財発掘調査件数の増加により多くの資料が蓄積され、出土遺物の大半は解るようになってきた。しかし、それでもわからないことも間々あるのがこの世界である。

●北房にパブリックアーケオロジの最前線が

サポーター 松田 陽(東京大学大学院人文社会系研究科 准教授)

荒木山西塚古墳の発掘調査は、パブリックアーケオロジの最前線を切り拓いています。パブリックアーケオロジは私が専門とする研究領域で、考古学と現代社会との関係について調べます。地域住民、研究者、行政が一体となって進める荒木山西塚古墳発掘調査は、日本におけるパブリックアーケオロジの理想形を追求するものです。

荒木山西塚古墳発掘調査の醍醐味を私に痛感させてくれたのは、令和7年(2025年)2月21,22日に開催された「西の明日香村フォーラム」でした。地元の小学生・中学生たちが全力で準備した成果発表、そしてそれに応える同志社大学の大学生たちからのエール。考古学が、異なる年齢の次世代の若者たちをつなげる様は圧巻でした。



そして、「西の明日香村」を標榜する北房に、なんと本家・奈良県明日香村より使者を招くという仕掛け。仰天の発想力と行動力に、舌を巻きました。

二日間を通して、フォーラムが「楽しさ」に満ちあふれていたことが何よりも印象に残っています。楽しさこそが、パブリックアーケオロジの究極の姿です。

北房の未来は明るい。これからも荒木山西塚古墳発掘調査を核として、とことん楽しんでください。

●地域主体の市民参加型考古学の発展に期待

サポーター 松本直子(岡山大学文明動態学研究所教授)

荒木山西塚古墳の発掘調査は、地方自治体の文化財行政が中心となり、地域の市民や協力大学と一体となって歴史の解明に取り組む、革新的な市民参画型考古学のモデルとなるものと思います。私が委員を務める日本学術会議史学委員会文化財の保護と活用に関する分科会で、公開シンポジウム「文化財保護に未来はあるかー日本の文化財のこれからを考えるー」(令和4年12月11日にオンラインで開催)を企画した際に、新谷俊典さんに「地域主体の文化遺産保存活用ー岡山県真庭市の取り組みからー」というタイトルでご報告をいただけたのは大変ありがたいことでした。

地域の文化財は、頻発する自然災害や人口減少による担い手不足といった課題に直面しています。この危機的な状況において、地域における文化財に対する関心や理解を深め、保護と活用に関わる人材を育てることにつながる真庭市の試みは、新しい可能性を拓くものとして注目されました。市民参加型、組織連携型の試みは、地域の文化財を研究・保存・活用するひとつのグッド・プラクティスとして広く知られるべきであると思います。

この活動記録集も、その歩みを記録し、伝える貴重な媒体となると思います。この活動が地域の歴史文化理解の深化に寄与し、また未来世代にとっての学びと誇りの礎となることを心から期待しています。

(4) 作業参加日誌より

1日の作業終了後に、保存会員、一般参加者および関係者に作業参加日誌（資料37）をお願いした。

その作業参加日誌に記載された作業感想を抜粋する。なお、[] 内に一般参加者は、[一般・女性]等で示した。[] のない感想は保存会員である。



【令和5年（2023年）11月25日】（資料44、報道記事28）

- ・機材運びの後、いよいよ発掘作業がスタートした。皆さん熱心に取り組んでくれ有難かった。
- ・午前中は機材の運搬で厳しかった。午後から発掘作業。思い出しながら進めた。

【11月26日】

- ・人数が少なかったので作業がきつかった。

【11月27日】

- ・人生初の発掘に参加させていただきました。何となくご苦労は感じていましたが、気の遠くなるような作業でした。ほんの一部ですが関わらせていただきありがとうございました。[一般・女性]
- ・何かあった！と思ったら、木の根っこでした。残念。あっという間の一日。楽しかったです。[一般・女性]
- ・木の根にてこずりましたが頑張りました。
- ・斜面きつい。
- ・トレンチ4で5～10cm掘下げ。トレンチの形らしくなってきた。



機材運搬作業

【11月28日】

- ・いくつか土器片を見つけ、感激でした。発掘の魅力が少し理解できたような気がしました。ありがとうございました。[一般・女性]
- ・丁寧に教えていただき、とても楽しかったです。また、2月によろしくお願いします。[一般・女性]
- ・トレンチ4の掘り下げ。地山が出たかなと思ったが、墳丘から離れるにつれ深くなっているようだ。大変。

【11月30日】

- ・古代の人が、どんな目的でこんな古墳を造ったのか想像しながら掘るのは楽しい。[一般・男性]
- ・歴史に触れることができ感動しています。[一般・男性]
- ・トレンチ3で石列が出てきた。墳丘から流れ落ちてきた石か？思いをめぐらせる。

- ・トレンチ3の石は、今後どのような並び方で出てくるのか楽しみである。

【12月1日】

- ・初めての発掘作業。大変だったけど楽しかったです。昼食時のおもてなし有難かったです。[一般・女性]
- ・トレンチ4は深い掘り下げとなり、ふるい掛けも大変な作業となった。
- ・地山の確認は難しい。



【12月2日】

- ・発掘調査の意味は、副葬品や埴輪などの歴史的価値のあるものが出土することだと思っていた。しかし、地山まで掘り下げること、古墳の規模や構造を把握することも調査する目的に含まれていることを聞いた。掘り下げ作業して良かった。[一般・女性]
- ・初めてやってみて、すごく楽しかったです。保存会の皆さんも良い方ばかりで、たくさんお話しできました。明日も頑張りたいです。[一般・女性]
- ・思ったより体力を使うことが分かりました。あっという間に時間が過ぎてしまいましたが、貴重な体験ができて良かったです。[一般・女性]
- ・トレンチ4はまだ地山が出ない。深い掘り下げになりそう。
- ・トレンチ3の場所は風が吹いて寒い。



トレンチ4の掘り下げ作業

【12月3日】

- ・思ったよりも土が硬くてびっくりしました。発掘の大変さを知りました。[一般・男性]
- ・粘土層が硬く、力仕事を痛感しましたが、1 cmでも掘るごとに古墳時代の層に近づいていると思うと大きなロマンを感じ、やりがい十分です。[一般・男性]
- ・発掘調査の意義について実感することができた。故郷の誇りを感じられる貴重ですばらしい体験をすることができて良かった。今後の研究の成果が楽しみで、また参加したいと思った。子供にも体験させることができ、本当に良かった。ありがとうございました。[一般・女性]
- ・普段はできない特別な体験をすることができて感謝でいっぱいです。技術面でも保存会の方々の手厚いサポートのおかげで、何不自由なく2日間を終えることができました。是非、これからも官・民・学連携の活動を続けていって欲しいです。そして、いつか私も携われるように頑張ります。ありがとうございました。[一般・男性]
- ・トレンチ4の掘り下げは重労働。

【12月4日 北房中学校2年生のインタビュー】（報道記事29）

- ・午前中は中学生のインタビューを受けた。血液型や星座まで。
- ・中学生のインタビューでは思いもよらないことまで聞かれ楽しかった。
- ・トレンチ4の掘り下げ作業で、最初、石か金属片か…と思っていたら土器片だった。苦節9日目、やっと探し当てたぞ！



中学生のインタビュー

【12月9日】

- ・寺前先生の話に興味深く聞く。木しか見ていない。森も見なさい。
- ・土器片が多数出土。楽しかった。
- ・トレンチ3から大きな土器片が出て楽しかった。石灰岩の出方で、古墳をどう見るかが学べて面白かった。
- ・周囲の状況、地形の成り立ちから発掘作業の成果を見定めることができ、作業の醍醐味を感じることができた。

【12月10日】

- ・寺前先生の”地形を見て判断を”という言葉に感銘。
- ・トレンチ4、なかなか地山に到達しない。

【12月11日】

- ・土嚢袋、残り一束。よく掘った。
- ・トレンチ4の墳丘側の掘り下げ。斜面の壁がボロボロ崩れる。難しい。

【令和6年（2024年）2月16日 北房小学校6年生参加】

- ・かなり力を使わないといけなくて大変だった。作業のやり方をやさしく教えてくださいってうれしかった。[小学生・女子]
- ・初めての古墳発掘でしたが、いろいろな作業を経験させていただき大変勉強になりました。実際に土器片が出るのを見ることができて大感動でした。[一般・男性]
- ・トレンチ3の石列？の下側から土器片出土。小学生の笑顔が印象的。
- ・昨年度の小学6年生の参加時と比べ、今年度は土器片などが見つかる場所と時期が良かった。
- ・トレンチ3からの土器片出土、ここは祭祀場所だったのか？今後の調査が楽しみ。

【2月17日】

- ・豚汁がとてもおいしかったです。「北房女性の会」の方、本当にありがとうございました。[一般・女性]
- ・珍しい土器片が毎日出土。驚き。
- ・とても珍しい土器片の出土に立ち会えてラッキーでした。
- ・韓式土器が出た。感動した。
- ・出土した軟質土器に興味がふくらむ。



トレンチ3から出土した土器片

【2月18日】

- ・前に来た時よりもたくさんの土器片が出て、びっくりしました。見たことのない土器片などもあって楽しかった。[一般・女性]
- ・土器片がたくさん出てきて良かったです。北房の古代のロマンを感じた一日でした。[一般・男性]
- ・親子で参加させていただきました。土器片が出た！と子供たちと一喜一憂。ドキドキワクワクを味わいました。自分もこのプロジェクトの一員になることができて嬉しかったです。北房の歴史を保存する方々への敬意と誇りを感じました。ありがとうございました。[一般・女性]
- ・トレンチ2、昨年度埋め戻した箇所を再度掘り返す。わずか1年でそこに根を張っていたのには驚いた。

【2月24日】

- ・初めて古墳発掘作業に参加できてとても良かった。土器片を見つけた感動は大きかった。指導していただいた方も、実に親切に教えてくれた。この経験は、おそらく一生心に残ることでしょう。古代の人が、どのような生活をしていたかを想像しながら作業を進めていくのも実に楽しかった。[一般・男性]
- ・トレンチ5は傾斜部で、階段の上り下りの作業。足が厳しかった。

【2月25日】

- ・2回目でした。これから後の作業が良い結果になることを願っています。大変お世話になりました。良い思い出になりました。[一般・男性]
- ・午前中が雨だったためぬかるんで、歩くのも大変だった。

【2月26日】

- ・今日が最後の参加となりました。保存会の皆さん、お世話になりました。[一般・男性]
- ・寒い一日だった。
- ・トレンチ2の拡張部は古墳だったとのこと。どのような形だったのか。

【2月27日】

- ・参加人数が少なく、ふるいが渋滞。大変だった。
- ・新しい古墳が発見されたトレンチ2の拡張部、今後が楽しみ。

【2月29日】

- ・トレンチ2でピンクの塗料のようなものが出てきたことにびっくりです。[一般・男性]
- ・朱と思われるものが出た。鮮やかな色でした。

【3月2日】現地説明会（資料45、46 報道記事30）

【3月3日】

- ・トレンチ6の掘り下げ。地山が出そうでなかなか出ません。もう少しです。
- ・トレンチ5、斜面がきつい。
- ・トレンチ2の拡張部、大刀が出ないかと掘ったが出なかった。



赤色顔料の出土

【3月4日】

- ・トレンチ2の拡張部が面白くなっている。

【3月7日】

- ・トレンチ5から土器片出土。トレンチ5と6は掘り下げが続く見込み。

【3月8日】

- ・トレンチ2の埋め戻しは、面積も広くて大変だった。

【3月9日】

- ・何日もかけて掘り、埋めるのは半日。あっけない。
- ・埋め戻しは大切な作業。

【3月10日】

- ・トレンチ3と4の埋め戻しはかなり進んだ。
- ・埋め戻しは力のいる作業だったが、特に墳丘斜面は大変だった。いい勉強になった。

4. 真庭市立北房小学校・北房中学校郷育事業(1)

本事業は、第1章で述べた平成29年（2017年）の講演「文化遺産を活用した人づくり・地域づくり」、そこから引き続く、平成30年～令和2年の「まに大」の各講座とプロジェクトA・A2（講座受講生と住民による測量・探査調査）、さらに令和2年（2020年）8月開催の「市長と話そう！」で、顕彰する会が太田市長と面談、真庭市と同志社大学合同で荒木山の古墳の発掘調査準備を進める方向性が示される中で、古墳を中心とした郷育の現状を改善するべく、市教委とCKSCHが実施した。「まに大」の講座で示したとおり、受講生にも、行政、大学にも、既に“古墳は地域のほかの有形・無形の文化財よりも、人や知識の「関係を媒介する装置」として弱い”ことが学術的にも定量的に評価されており、その限界を打破する必然があった。

本事業における小・中学校との総合的学習の連携は、従来の単なる地域学習ではなく、地域主体形成を目的とした郷育実践である。デューイが述べたように、教育とは「経験の再構成」であり、知識の伝達ではなく、行為を通じた意味生成の過程である。本授業では大学生と小・中学生が複数年にわたり協働し、発掘や展示構想、地域資源の再解釈をグループワークで行う。これはブルーナーの「発見学習」やヴィゴツキーの「最近接発達領域」における協働的学習理論とも合致する。異年齢・異主体の対話は認知的葛藤を生み、地域を外在的対象ではなく、自己の関与する構造として理解させる。さらにフレイレの「批判的教育論」の観点からも、学習者が受動的に歴史を受け取るのではなく、自ら問い、語り、再構成する主体へと転換する点に意義がある。郷育は知識獲得ではなく、地域を説明できる人格の形成を目指す教育実践である。

位置づけを明確にするために、基礎からこの事業の理論的背景を整理しておきたい。なぜなら、現在に至るまで、“なぜ大学生と一緒に地域の古墳や魅力の学習が必要なのか”が、実は、教育現場に殆ど共有されない状況が続いていることが背景にあるからだ。[大学生が来て北房の魅力を一緒に発掘する]という一見の“キャッチ”は、表面上誤りではない。しかし、事業主体である市教委、学校現場、大学のスタッフ、生徒・児童の父母、関係者が“その理解のまま”事業を継続することは、本事業で目指す郷育実践にはならない。そのため、あえて、学術・理論的な位置づけを再度文字化しておこうと思う。

デューイ^{15,16}は、教育を知識の伝達ではなく経験の再構成と捉えた。人は日常生活の中でさまざまな

15 Dewey, J. (1975). 松野安男（訳）. 『民主主義と教育』. 岩波書店. (原著1916年)

16 Dewey, J. (2004). 松野安男（訳）. 『経験と教育』. 岩波書店. (原著1938年)

経験をしているが、それらは断片的で無秩序である。教育とは、その経験を振り返り、意味づけし、他の経験と結びつけて再編成する過程である。重要なのは活動そのものではなく、活動を通して得られた経験が次の行為へとつながる連続性と相互作用である。学びは教室の外の生活世界と切り離されてはならず、地域での調査や対話、展示づくりを通じて、自分の経験を地域の歴史や社会と結び直す郷育の実践は、まさにこの経験の再構成の思想に基づいている。

ブルナー^{17, 18}は、学習とは既存の知識を受動的に受け取るのではなく、学習者自身が問題に直面し、仮説を立て、検証しながら概念構造を発見していく過程であるとした。重要なのは正解の提示ではなく、問いの設定と探究のプロセスである。知識は結果ではなく構造として理解されるべきであり、教師は答えを与える者ではなく、思考を支える足場を用意する存在となる。この理論は、地域資源を調べ、議論し、展示を設計する郷育実践と親和性が高い。地域を教わるのではなく、構造を見出す過程こそが学びである。

ヴィゴツキー^{19, 20}は、学習は個人の内部だけで完結するものではなく、他者との相互作用の中で発達すると考えた。現在一人では達成できないが、支援があれば到達可能な領域を最近接発達領域と呼ぶ。熟達者や仲間との対話、共同作業を通じて、子どもはより高次の理解へと引き上げられる。学習とは社会的過程であり、言語的交流が認知発達を促進する。大学生と小・中学生が協働しながら地域を再解釈する郷育実践は、まさにこの理論に基づく。異なる発達段階の対話が、理解の跳躍を生み出すと予測される。

フレイレは^{21, 22}、教育を銀行型教育と問題提起型教育に区別した。銀行型教育とは、教師が知識を預け入れ、学習者が受動的に受け取る一方向的な教育である。これに対し、問題提起型教育は、学習者が現実の社会的状況を問い直し、対話を通じて意味を再構成していく過程を重視する。教育は中立ではなく、常に社会構造や権力関係と結びついている。学習者は教えられる存在ではなく、自ら世界を読み替える主体へと成長する。郷育において地域を受け身で学ぶのではなく、なぜそう語られているのか、他に語り方はないのか、と問い続ける態度は、この批判的教育論と深く響き合う。

この四つの理論は独立しているわけではない。経験の再構成が発見を促し、発見は協働によって深まり、協働は批判的対話によって社会的意味を獲得する。郷育とは、地域を舞台にこの循環を起動させる教育モデルでもある。知識を覚えることではなく、地域を説明できる人格を育てることであり、遺産を学ぶことではなく、遺産を語り直せる主体を育てることである。本事業では、これを郷育の教育理論フレームとして整理している。

こうした郷育の教育理論フレームを小・中学校現場に展開する最も明確な背景は、単なる地域学習の強化や拡張が必要だからではない。それは、地域主体を将来にわたって持続可能にするための構造的投資と位置づけるべきだろう。文化遺産を創造し、連結し、可視化し、資源化し、経営し、制度の中で運用していくためには、最終的にそれを担う主体が必要である。その主体は、決して突然現れるのではなく、地域で育てられるものとする。これに対し、行政が採用する「地域おこし協力隊」などの外部人材投入型施策は、異なる前提に立っている。そこでは地域の課題は人材不足や担い手不在と理解され、外部から即戦力を投入することで解決を図ろうとする。短期的な活性化、事業立ち上げ、情報発信などを期待する政策である。

17 Bruner, J.S. (1963). 鈴木祥蔵 (訳). 『教育の過程』. 岩波書店. (原著1960年)

18 Bruner, J.S. (1976). 田中一彦 (訳). 『教授理論の構造』. 明治図書. (原著1966年)

19 Vygotsky, L.S. (1962). 柴田義松 (訳). 『思考と言語』. 明治図書. (原著1934年)

20 Vygotsky, L.S. (2001). 柴田義松ほか (訳). 『発達の最近接領域の理論』. 新読書社. (原著1978年編集版)

21 Freire, P. (1979). 小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄 (訳). 『被抑圧者の教育学』. 亜紀書房. (原著1970年)

22 Freire, P. (2011). 里見実 (訳). 『希望の教育学』. 太郎次郎社.

両者の矛盾は、時間軸と主体形成の理解にある。北房における郷育モデルは、地域主体は育成されるものであり、複数年にわたる経験の再構成と協働によって形成されると考える。これはデューイの連続性の思想に立脚している。主体は外から与えられるのではなく、地域内部の関係構造の中で成立させる。一方、外部人材投入型施策は、主体を機能として捉える傾向が強く、プロジェクトを動かす人、SNSを発信する人、商品開発を行う人を配置する。この場合、主体は人格ではなく役割といえる。主体が役割の場合、その役割（契約期間）が終われば離脱する。

知の蓄積の所在にも矛盾を生じる。郷育モデルでは、地域知は地域内部で再構成され、共有されることが前提である。調査や展示、議論を通じて知は構造化され、世代を越えて蓄積される、いわば知の所有者は地域である。一方、外部人材施策では、知やノウハウが個人に帰属しやすくその場合、担当者が交代すれば、知も移動する。これは組織論でいう暗黙知の外部化が進まない構造である。短期契約の中で知の内部化は難しい。

そして最大の矛盾と言える点が、正統性の源泉である。北房における郷育モデルでは、正統性は地域内部の合意と倫理から生まれる。文化遺産を扱う責任は、活用を前提とする倫理によって正当化されている。一方、外部人材施策では、その正統性は行政制度と予算によって確約される。法的には正当であっても、地域内部の合意と乖離する。時に外から来た人が地域を動かしているという感覚が、潜在的な反発を生む。とはいえ、外部人材の投入が常に否定されるわけではない。北房における郷育モデルの観点から言えば、問題は外部か内部かではなく、構造に組み込まれているか、である。

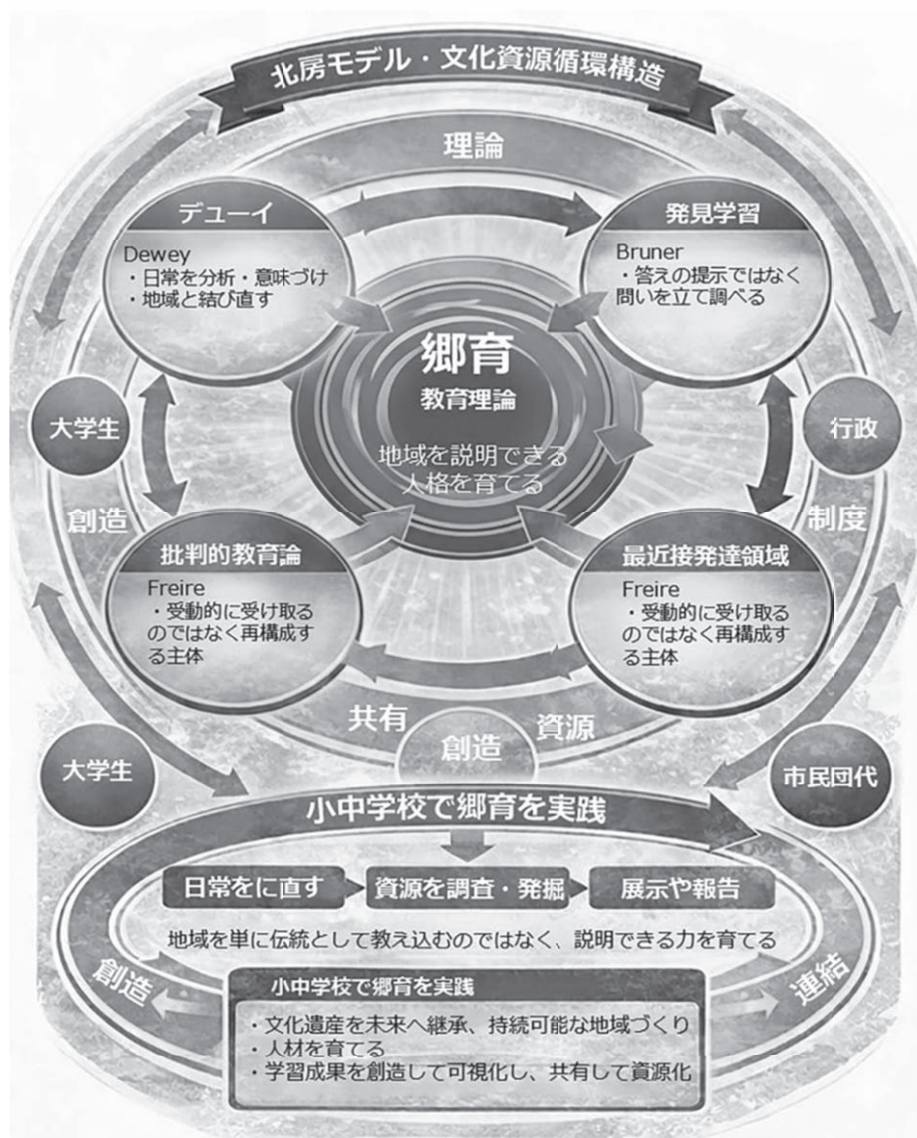
もし外部人材が、郷育の循環構造の中に位置づけられ、地域内部の知の再構成を支援し、短期的成果ではなく長期的主体形成を目的とするならば、矛盾は緩和される。反面、短期成果・数値目標・イベント実績を優先する限り、郷育モデルとの緊張は解消しない。行政施策が外部人材投入に傾きすぎるとき、構造的な不整合が生じる。地域主体の形成と、外部依存型活性化のあいだには、時間軸と倫理の断絶が存在することになるだろう。郷育モデルは「内部からの持続可能性」を前提とし、外部人材投入型政策は「外部からの加速」を前提とする。持続と加速は並立するが、前提が異なり、その違いを自覚せずに併用すると、地域の主体形成は不安定になるだろう。

ここでは、令和4年（2022年）以降、具体的に同志社大学文化情報学部時空間情報科学研究室の学生、真庭市立北房小学校児童、真庭市立北房中学校生徒がグループワークを実践した事例を報告する。なお、事業のアレンジはCKSCHスタッフがおこない、実施には保存会、農事組合法人清藤、北房振興局、カフェうたたね、Restaurant AQUA 関係者の協力を受けた。

郷育実践のスケジュール

同志社大学学生と北房小学校児童、北房中学校生徒の総合的学習の時間での実践は、令和4年（2022年）から始まり、令和7年（2025年）の現在も継続している。年度単位で、到達目標を定め、まず大学生（外部人材）と児童・生徒を連結し、学習成果を創造して可視化し、それを共有して資源化している。年度でのスケジュールは下記の通りである。

令和4年度	発掘調査時	小学校	発掘現場体験
		中学校	荒木山西塚古墳墳頂部探査調査体験
令和5年度		小学校	発掘現場体験
		中学校	荒木山西塚古墳発掘調査の魅力発信（グループワーク）
令和6年度		小学校	北房の魅力発信（グループワーク）
		中学校	北房の魅力発信（グループワーク）
令和7年度		小学校	【実施見送り】
		中学校	動画作成で北房の魅力発信（グループワーク）



真庭市立北房小学校・北房中学校郷育事業の位置づけ

令和4年度の小学校・中学校の郷育実践

令和4年度には、保存会、市教委、同志社大学が民官学連携主体で、荒木山西塚古墳第1次発掘調査が実施された。

これに合わせ、北房小学校6年生、北房中学校2年生を対象に、発掘調査期間中の調査参加を実施した。残念ながら、小学校6年生の当初予定日が大雪となり総合的学習の授業としての位置づけは延期されたが、後にPTAが中心となり、児童の発掘体験をサポートした。令和5年（2023年）に入り、2月27日、改めて授業として発掘体験が実施された。

中学2年生は令和4年12月22日、午前の授業時間で約40名の発掘調査ならびに探査調査補助を実施した。また別に12月6日、CKSCHセンター長である津村が同じく総合的学習の時間に北房中学校において座学での授業を実施し、あらかじめ、荒木山西塚古墳の歴史的位置づけ、北房という場所の地誌的評価、発掘調査と考古学、文化遺産と文化経営学について、予備知識をもって調査に参画している。なお、いずれもCKSCH研究員が調査現場では連携し、中学生については大学生も同時に発掘体験を経験する中で郷育実践に務めた。調査成果については、3月に北房中学校にて報告会も併せて実施した。

令和5年度の小学校・中学校の郷育実践

令和5年度は、荒木山西塚古墳第2次発掘調査が実施された。小学校では引き続き、小学校6年生の児童が総合的学習の時間を利用して発掘調査体験をおこなった。

一方、中学校では、昨年度の郷育実践の結果、年度当初の打ち合わせでいくつかの課題が中学校現場、発掘調査現場双方から提起された。具体的には、中学校側からは生徒自身が自分事として発掘調査・探査調査に向き合うには、その時期（年末から年明け）や定期試験期間や部活動との重複などから難しい、また、座学1回、現地1回では、通年のカリキュラム編成の中でもどのようにしても“イレギュラー”な位置づけになってしまう、という指摘であった。発掘調査現場からも、2年目（予定最終年）の発掘調査時に、中学生の授業形態に合わせた体験の場を準備することが難しいと言う声も上がった。市教委、CKSCH、北房中学校の調整により、23年度は、1）通年で10コマ、大学生とのジョイントプロジェクトを実施すること、2）グループワークを通じて、大学生と中学生とのより強固な連結を実践すること、3）各グループにはジョイントの成果として、可視化できる成果物を求めること、などが決定した。また、4）発掘調査現場が予定最終年度であるため、その魅力を可視化し、資源化できる成果物とすることを目標に、同志社大学文化情報学部学生6名が現地入りし、ファシリテーターの役割を果たしながら、中学2年生の総合的学習の時間の運営をおこなった。大学生と中学生の闊達な議論が期待された。



北房小学校児童（総合的学習の時間）による発掘調査体験



北房中学校でのジョイントプロジェクト

授業では、まず座学で6班それぞれに昨年度の荒木山西塚古墳発掘調査成果を共有し、その魅力発信を中学生が主担当することを理解してもらうことから進めた。先述の通り、「古墳」は“地域のほかの有形・無形の文化財よりも、人や知識の「関係を媒介する装置」として弱い”という現状を中学生に認知・確認してもらい、地域の主役として、自分たちが、「関係を媒介する装置」としての古墳の新機軸を創生する、という点に各班目的を定めた。また、令和5年度末に予定されている、発掘調査に関するフォーラムにおいて、自分たちの成果物で連結を可視化、その装置発動の推進で、社会資源化をなす、という高次の目標も掲げた。

各班の議論の中で、「関係を媒介する装置」としての古墳を地域内外に知ってもらうために必要なことを検討した結果、どの班も「一生懸命発掘したり、古墳の勉強をしたりしている人そのものにターゲットを当てた魅力発信が一番装置として機能しやすい」という着眼点で統一されたことから、本年度も発掘調査期間に現地に訪問することとした。ただ、発掘調査や探査調査を体験するのではなく、自分たちでインタビュー内容を考え、実際に調査参加している人々にインタビューをし、その内容をまとめて、魅力の詳細を明らかにする、という参与観察とインタビューによる魅力評価をおこなうこととした。

各班の取り組んだプロジェクトは以下の通りである。

- 1班 西村杏優 古墳クッキーやきよとうのケーキがатарカプセルトイ
- 2班 松井拓巳 調査参加おじさん達のLINEスタンプ
- 3班 近藤 桜 インタビュー動画を中心にしたドキュメント映像制作
- 4班 松本碧依 古墳をモチーフにしたおみくじ飲料（地元特産茶ペット飲料）
- 5班 徳峰壮俊 調査参加おじさん達の似顔絵キーホルダー
- 6班 島根七望 北房をモチーフにした創作ベンチ



北房中学校生徒による
発掘調査現場での参与調査とインタビュー

10時間の授業コマ数で足りない場合は、同志社大学学生と北房中学校生徒が、放課後や週末に、CKSCHの分室のある「水風の庭」（真庭市山田2049）に参集し、班ごとに、授業コマ数で終了しなかった作業を分担して実施した。大学生も中学生も、率先して今まで全く関心のなかった古墳について、少なくともそれに興味を持っている人たちの魅力を伝えようとする活動は、従来の国内のどの発掘現場でも見られない、新しい連結である。その成果物は令和6年（2024年）3月に開催された「第1回 西の明日香村フォーラム」で可視化され、フォーラム参加者や同時に開催された荒木山西塚古墳発掘調査現地説明会参加者に対しても社会資源化されたことは、この総合的学習の時間

間が郷育の教育理論フレームの実践として機能したと評価できるだろう（報道記事31、32）。【津村宏臣】



現地説明会の現場で
カプセルトイ実演する中学生と大学生



発掘調査を主導する
「北房文化遺産保存会」
アベンジャーズ
キーホルダー

第4章・「西の明日香村」北房に向けて

1. 北房文化遺産保存会「西の明日香村づくり」

(1) 西の明日香村検討委員会

第2次発掘調査の作業が始まった令和5年（2023年）11月頃から、保存会は発掘調査作業終了後の活動について検討を開始していた。そして、令和6年度の保存会総会（令和6年1月）において、今後の活動方針、中期計画等を策定する「西の明日香村づくり活動計画策定事業」が決定した。

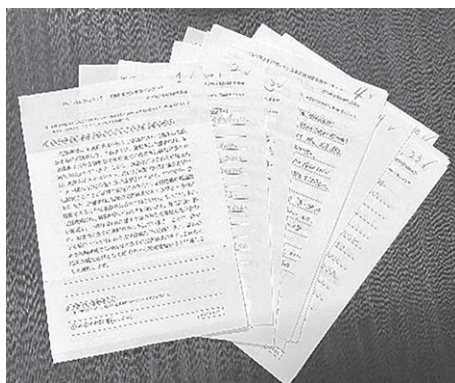
具体的には、保存会は北房の文化遺産を保存・活用・研究すること等によって、①近未来の「西の明日香村」北房がどのようなまちになることを望むのかという「ビジョン・目標」の明確化をおこない、②その目指すべき「西の明日香村」北房を創り上げるためには、どのような活動が必要になるのかという、「目標達成のための手段・方策」を検討し、③その活動を推進していくための具体的計画を「（3年間の）中期計画および年度計画」としてまとめる、というものである。これは、保存会における今後の活動の方向性を決める、極めて重要なテーマである。

そして、本事業を推進する会議体「西の明日香村検討委員会」（以下、検討委員会）が組織された。委員は、以下の14名である。

委員長：畦田正博 副委員長：平城 元 庶務：三輪能章

委員：奥田健治、久松秀雄、志田浩一、梶上 守、小林展弘、上谷仁志、原田重隆
伊藤義則、南條 靖、延原 泉、網本善光

畦田会長が委員長となり検討を開始した。令和6年（2024年）3～4月、上記①・②に関する第1回アンケートを全会員に向けて行った。①「あなたの考える西の明日香村について（イメージ像、北房の未来図）」、②「北房の文化遺産の活用法」、③「西の明日香村について、その他ご意見等があれば」という質問である。締切日までに36通の回答（回収率49%）を得た。



回収された第1回アンケートの一部

その後、寄せられた意見・提案等の全文をまとめた。そして、このまとめを全会員に送るとともに、第2回アンケートも行った。この目的は主に3つあり、①他の会員がどのような意見、提案を出しているのかを知ってもらうことで、情報の共有化を図ること。②共感する意見・提案はどのような内容が多いかを確認すること。そして、③ブレインストーミング的に他の会員の提案から新たに思いついたアイデアを募ることであった。第2回アンケートでは18通の回答（回収率25%）を得た。②に関しては、「どれも素晴らしい内容である」、「全てに共感する」といった回答が多く、③は新たに10件の提案があった。

今回のような記述式アンケートは、一般に非常に回収率が低いと言われている。第1回アンケートではこの点を危惧していたが、予想に反して会員の約半数から回答を得た。熱のこもった長文も多く、中には質問に関係なく思いを綴ったものもあった。そうした文章も含め、ピックアップすべき部分をできる限り漏らさないよう読み進めた。このため、会員の意見・提案をまとめ、さらに分類する作業は予想以上に時間を要したが、この貴重なアンケートをもとに、検討委員会で議論を重ね、以下のとおり整理した（資料49、50）。

1. ビジョン（私たちが目指すまち「西の明日香村」）は、全体像として「美しい自然の中に歴史ロマンがあふれ、多くのひとが訪れる活気あるまち」である。会員の意見をまとめると、まさに奈良県の明日香村が浮かんでくる。しかし、この全体的雰囲気を出し、より具体的なまちの姿は明日香村とは異なる。そのひとつが、「文化遺産を地域の財産として保存・活用し、次世代へ継承するために努力しているまち」であり、2つ目が「他地域の支援者とともに「学び」と「西の明日香村を体験できる」イベントを継続開催するまち」である。なお、ここでいう他地域の支援者とは、定住はしていないが、地域や地域の人と継続的に、また多様に関わり続ける人のことで、一般に「関係人口」と呼ばれている。このことは、換言すれば「西の明日香村づくり」の持続可能な活動のためには、関係人口なくしては達成が難しいという危機感があるといえよう。したがって、例えばイベント開催をする際に、「西の明日香村」北房を多くの人に知っていただくという目的他に、イベントを通じて関係人口を増やす努力も目的の一つとした。
2. そして、私たちが目指す「西の明日香村」という目標を達成するための手段・方策に関する提案は、大きく7つに分類できた。「情報発信・PR」、「サービス・利便性」、「シンボル」、「イベント」、「保存」、「施設等」、「その他」である。もちろん、それぞれに会員の具体的な提案があり、同じ提案も含めると、合計257件に及んだ。

これらの提案はさらに、(i) 保存会単独でも実施可能と思われる事業、(ii) 他の団体・組織・事業者との連携または要請が必要な事業、(iii) 真庭市との連携あるいは真庭市の事業（この場合は保存会から市に要請するということになる）、と3つに区分できた。

このように多岐にわたる提案の採用可否については何を優先すべきか、ということはもちろんあるが、その他にも、(ア) 保存会単独では不可能な事業案の取り扱いと進め方、またはその実現可能性、(イ) 事業予算規模のイメージとその事業費確保の実現可能性、(ウ) 実施可能な人的体制（マンパワー）確保が可能か、(エ) 実施可能なスキルを持つ人材の有無、(オ) 継続的な維持管理が可能か、などの検討

が必要になる。

こうした前提条件、制約条件を踏まえ、第1次中期計画・単年度事業計画を策定した。

令和7年（2025年）1月に開催された総会において、検討委員会でまとめたビジョンおよびその達成のための手段・方策をもとに



令和6年10月17日の検討委員会（北房ふるさとセンター）

策定した第1次中期計画・単年度事業計画の企画立案、実行を目的とした「西の明日香村実行委員会」（以下、実行委員会）の設置を決定した。

(2) 西の明日香村実行委員会

第1回実行委員会を令和7年（2025年）2月に開催した。実行委員会の運営については、原則月1回の開催とし、会議時間は2時間以内で終了する。また、班長、レジュメ・議事録作成者、取組事業ごと

のを担当を決めた。なお、班別協議は1時間30分、残り30分を全体会議とし、各班の協議内容の報告と質疑応答の時間とした。そして、昨年度の検討委員を主体に、新たに4名を加えた17名の実行委員を、下記のとおり「広報班」、「サービス班」、「イベント班」の3班に分けた。

広報班は「西の明日香村」北房を全国的に知ってもらうための情報発信、PRおよび保存会のシンボルとなるキャラクター制作などを、サービス班は北房を訪れる人へのサービスや利便性の向上を、イベント班は各種のイベントを、それぞれ企画立案し、実行の主体を担う体制とした。

委員長：畦田正博 副委員長：平城 元 庶務：三輪能章

広報班：伊藤義則、平城 元、小林展弘、小田裕章、嶋田有一郎

サービス班：畦田正博、三輪能章、上谷仁志、梶上 守、南條 靖、宮宗正孝、宮宗久美子

イベント班：奥田健治、志田浩一、原田重隆、延原 泉、網本善光

なお、文化遺産の保存や展示施設に関する真庭市への要望等については、実行委員全員で検討することとした。

検討委員会で策定した第1次中期計画、令和7年度事業計画は、以下のとおりである（資料51）。

1. 第1次中期計画

中期計画は原則3年とする。スタートとなる令和7年度からの中期計画は、「第1次中期計画」とし、令和7年度～令和9年度までの3年とする。

第1次中期計画は、優先すべき事業であり、かつ保存会単独で実施可能と思われる事業を主体に計画した。



令和7年2月28日の第1回実行委員会(北房文化センター)
3班の班別協議

(1) 情報発信・PR

① 「西の明日香村」全国への発信・PR

SNS・ホームページ等のメディア活用により、全国に向けて「西の明日香村」北房の情報発信、PRを可能にする。

② 「荒木山通信」の広域配布

市外の公共施設（図書館・博物館・資料館）等へ依頼・配布。3年間の継続活動で、より広範囲に情報発信・PRをおこなう。

(2) サービス・利便性

③ パンフレット「(仮) 西の明日香村」発行

文化遺産の説明を中心とし、見学コース等も入れたパンフレット。

これにより、SNS・ホームページ等による情報発信・PR、看板、あるいは今後の事業計画に、QRコードによる文化遺産解説事業を実施となった場合、このパンフレット内容の文言・写真等が活用できる。

④ 荒木山東塚・西塚古墳説明看板設置

駐車場付近に概略地図、出土品写真、説明文等を盛り込んだ大型看板を設置する。

(3) シンボル

⑤ キャラクター制作

保存会シンボルとなる”マスコットキャラクタ”、または「西の明日香村」の”イメージキャラクタ”の制作により、「荒木山通信」、パンフレット、イベント開催チラシ、看板、その他多くの場面での利活用が可能となる。

(4) イベント

⑥ イベントの定例化

学びのイベント（講演会、シンポジウム等）、ウォークイベント（ガイド付きウォーキング、ウォークラリー、スタンプラリー等）、ワークショップ（体験イベント）等、大人から子供まで参加できるイベントを、少なくとも1年に1回は企画・開催することで定例化し、より多くの人に「西の明日香村」を知っていただくと同時に、イベントを通じて支援者（関係人口）を増やしていくことも目的の一つとする。

⑦ ガイド養成事業（継続）

(7) 保存

⑧ 荒木山清掃（継続）

2. 令和7年度事業計画

上記の中期計画達成のための単年度計画は、班ごとに次のとおりとした。

(1) 「西の明日香村」情報発信・PR事業〈検討〉[広報班]

(2) 「荒木山通信」広域配布事業〈検討・実施〉[広報班]

(3) キャラクター制作事業〈検討〉[広報班]

(4) パンフレット「(仮)西の明日香村」制作事業〈検討〉[サービス班]

(5) 「西の明日香村」見学コース設定事業[サービス班]

例えば、歴史ルート（古代・中世・近世）、遺跡種別コース（古墳・寺社等）、時間別コース（2時間コース、4時間コース等）などが考えられる。今後、看板、リーフレット等の事業計画があれば、活用できる。

(6) 荒木山東塚・西塚古墳説明看板設置事業〈検討〉[サービス班]

(7) ガイド養成事業[イベント班]

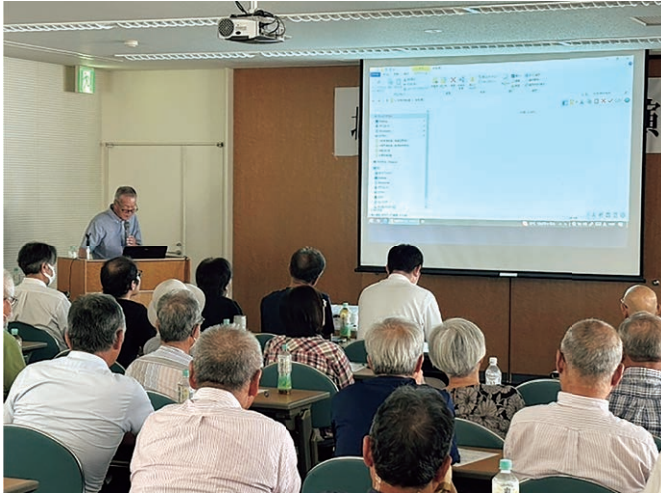
現地講習会実施（定古墳群 第1期生養成）

研修修了者は不定期ではあるが、古墳等の見学者のガイド依頼に対応する。

(8) 「(仮)第1回西の明日香村ウォーキング」事業 ガイド付とする。[イベント班]

各班で上記事業の内容について審議を重ね、実行に移していった。

実行委員会で企画・実施された初年度の主な事業



講演会「倭城の話」行田裕美氏(元津山市生涯学習部長)



荒木山の古墳付近の案内板付け替え



←大谷1号墳清掃

定東・西塚古墳清掃→



←第5回北房文化遺産
ガイド養成講座
定東・西塚古墳

大谷3号墳の清掃→



国指定史跡を巡るウォーキング 大谷1号墳→大谷3号墳→定東塚・西塚古墳

保存会は、「北房地域における文化遺産の保存・活用・研究を通じて地域の振興に寄与するとともに、文化遺産を次世代に継承すること」を目的としている。この目的をひと言で表した言葉が「西の明日香村づくり」である。

それは、文化遺産を地域の財産として保存・活用し、次世代へ継承するために努力しているまち、そして他地域の支援者とともに「学び」と「西の明日香村を体験できる」イベントを継続開催するまちを目指すことである。

こうしたまちづくりの活動を通じて創出される、美しい自然の中に歴史ロマンがあふれ、多くのひとが訪れる活気あるまち北房を、私たち保存会は「西の明日香村」とした。

実現のためには、ベクトルを合わせた官・民・学の連携も当然必要となる。継続した努力を重ねていきたい。【平城 元】

2. 西の明日香村コンソーシアムの取り組み

(1) 西の明日香村づくりと郷育

文化遺産の活用という面において、地域で育んだ価値を次世代への継承することが必要不可欠である。北房文化遺産保存会の現存メンバーは、いつか、今のように活動が続けることはできなくなってしまう。

そこで、西の明日香村コンソーシアムでは次世代への「郷育^{きょういく}」についても注力してきた。

「郷育」は真庭市教育大綱にうたわれている言葉であり、「ふるさとを知り、ふるさとへの思いを育てる」ことであり、身近にある豊かな自然と、それに由来する文化、歴史、産業などに興味をもち、知ることを出発点としている。要するに真庭市の自然や風土の中での体験や経験を通じて、ふるさに対する愛情と誇りを育てるという概念である。

西の明日香村コンソーシアム発足以前にも同志社大学文化遺産情報科学調査研究センターの働きかけにより地域の郷土料理を後世に伝えるための「奥きびの会」が発足している。当会は郷土料理を後世に伝え、もって地域活性化を図ることを目的としており、現在でも公民館講座の中でもちつき体験開催を担っている。

北房

郷土料理で地域活性化

大学生のアドバイス受け企画

地域の郷土料理を後世に伝えて地域活性化
地域の70～80歳代の女性



会の運営について決めるメンバー(左奥3人は大学生)

性15人は11月26日、活動グループ「奥きびの里」を立ち上げ、サポートする大学生と一緒に、今後の活動内容などを決めた。

郷土料理について研究している、同志社大学文化情報学部3年、竜玉みやびさん(21)、土江華さん(21)、辻恵里菜さん(21)の3人が調整役となり、地域の女性にアンケートや調査を実施。北房の郷土料理やメンバーの得意料理、特産品などを調査し、郷土料理を使った活動内容などを検討した。

会では以前、地域で栽培されていた雑穀「たかきび」に着目。最近栽培されなくなり、味を知らない子どもたちにも知ってもらいたい。

参加したメンバーの谷口恵子さん(80)は「真庭市下幹部」は「山菜おこわを作るのが得意なので、孫やひ孫が来るたびに白樺の料理として作っている。グループの活動を通じて郷土料理を次の世代に伝えていきたい」と話していた。

会では、年間を通じて季節ごとの料理を参加者と一緒に作り、地域のつながりを深めたいとしている。

1月には、会場の北房文化センターでリハールを行う予定にしており、本番に向けて、子どもたちの参加を募る。

来年2月15日(土)に行うことを計画した。

真庭タイムス 令和元年12月14日

令和元年（2019年）12月には津村宏臣氏及び奥田健治氏による小学校への出前授業も行われた。郷育である。「プロジェクトA」の一環として両名は北房小学校でVR体験を実施した。

その後、荒木山西塚古墳発掘調査のため西の明日香村コンソーシアムが結成され、発掘調査と同時進行的に郷育も継続されてきた。

令和2年度には、これまで北房の地域活性化に関わってきた岡山商科大学を卒業した橋高七海氏が地域おこし協力隊として真庭市に採用され、北房ふるさとセンターを中心に土器づくりワークショップなどのイベントを展開した。これにより北房ふるさとセンターを訪れる子どもたちが大幅に増えた。橋高氏は任期満了の令和4年度まで同センターの活用大きく貢献してきた。

郷育という点で、CKSCHの活動は記しておかなければならない。CKSCHは、令和4年（2022年）11月に分室となる空き家を活用した拠点「水風^{みずなぎ}の庭^{あらさこ}」を荒迫集落地内に開所した（報道記事16）。

令和5年（2023年）5月には、CKSCHが発案し地元住民が協力した古代米の田植えが企画された。小学校にチラシを配り、5年生の有志、西村校長、当時担任だった安田教諭が現地を訪れ地元農家の指導の下、同志社大学文化遺産情報科学調査研究センターとともに田植えを行った。同年10月には津村氏が讃岐から持ち帰ったサヌカイトでつくられた石包丁で「穂首刈り」による稲刈り体験が開催された。田植えと同様に5年生の有志が参加した。

このときの古代米は後に行われる令和5年度の西の明日香村フォーラムでポン菓子として振る舞われたり、令和6年度の学校給食に活用されたり、令和6年度のフォーラムで奥きびの会によるもちつき体験で活用されたりすることになる。

また、令和6年度に西の明日香村コンソーシアムにより開催された谷尻遺跡発掘調査50周年記念行事「すげーのー、谷尻遺跡」企画展（資料52）で北房ふるさとセンターを訪れた人にも記念品として古代米が配布された。

また同センターの企画として「水風^{みずなぎ}の庭で夏の思い出をつくろう！」が令和5年度から開催されている。この行事では、地域の小中学生が期間内に自由に水風の庭を訪れ、大学生に宿題を教えてもらったり、一緒に遊んだりできる。それだけではなく、津村氏の言葉を借りれば、「同志社大学文化情報学部



古代米の田植え



「すげーのー、谷尻遺跡」で配布された古代米

生が中心となり、地域の子どもたちと一緒に楽しい時間を過ごすことを通じて、地域の未来を担う次の世代のロールモデルとして、大学生が様々な役割を果たす。また、同志社大学は、地域の子どもたちから地域の魅力やルールを学ぶ。そして子どもたちはその中で、地域への目線と誇りを育む。」といったことを狙う仕掛けでもある。津村氏の言葉はこう続く。「そう遠くない将来、子どもたちが、その目線と誇りを引っ提げて、地域に



水風の庭

戻り、地域に根ざした社会生活を営んでくれる未来が訪れることを願っています。真庭市と同志社大学文化遺産情報科学調査研究センターの協定の中核にある「郷育」の花が咲いた未来を、学生とともに喜びたいと思います。」この言葉には我々行政職員も強く勇気づけられた。

(2) 学校現場との協働

発掘調査が行われた令和4年度と令和5年度には、発掘現場に地域の子どもたちが訪れた。荒木山西塚古墳の発掘調査は郷育の大きな機会でもあった。令和4年(2022年)12月5日に同志社大学の津村宏臣准教授が、北房中学校で講義。西塚古墳や古墳時代について2年生の生徒たちが学び、12日には実際に発掘調査に参加し、掘り下げやふるい掛け、レーダ探査などを体験。レーダ探査で得られた成果をもとに、2月24日にフィードバックの授業も行われた。同年



北房中学校と同志社大学文化遺産情報科学調査研究センターの協働による授業

12月18日には、北房小学校のPTA活動として親子が発掘調査に参加した。小雪が舞うとても寒い中、4組9人親子が作業を行った。小学校授業として予定されていた12月2日の発掘調査は天候不良のため中止となったが、子どもたちの「発掘をしたい」という思いに答える形で令和5年(2023年)2月17日に授業での発掘調査参加を実施。6年生児童30人が発掘を体験した。

令和5年度からは、CKSCHと北房中学校との協働による授業を開始した。橋本校長の理解のもと総合的な学習の時間を使うこととなった。本取り組みの大きなポイントは、中学生の班ごとに、大学生がファシリテーターとしてつき、大学生と中学生のグループワークとして「ふるさとの魅力発信」に挑戦するという点だ。中学2年生と同志社大生は発掘調査を行っている中心的存在である保存会のメンバーに着



大学生と中学生の成果物のひとつ北房文化遺産保存会メンバーをモチーフにしたキーホルダー

目し、保存会メンバー写真を使ったLINEスタンプや、同会メンバーの似顔絵キーホルダーが当たるカプセルトイなどの「魅力発信ツール」を考案した。事業時間だけでは完成にいたらず、課外授業として水尻の庭で大学生たちと中学生たちは作業を行うこともあった。前述のLINEスタンプ、カプセルトイに加え、ペットボトルに張り付けるおみくじシール、荒木山発掘調査現場でインタビューした保存会メンバーなどを紹介する動画、ブドウや金銅装双龍環頭大刀をイメージしたイラストが描かれたベンチが完成した。

これらの北房中学校での郷育の成果を地域にフィードバックする場として西の明日香村コンソーシアムは令和6年（2024年）3月2日、古墳発掘調査現地説明会と同日に「西の明日香村フォーラム」を開催した。本イベントは北房文化センターで行われ、北房中学生の魅力発信ツールの展示はもちろん、西の明日香村コンソーシアムの活動記録も展示され、会場には奈良県明日香村の環境協会から借用した古代の衣装を身にまとった西の明日香村コンソーシアムメンバーや大学生の姿があった。

開催が土曜日だったこともあり、中学校としての参加はなかったが部活動へ向かう途中で会場に立ち寄って保存会のメンバーに直接キーホルダーを手渡す中学生や、有志としてイベントに参加してくれた中学生、会場の様子を見に来てくれた教師の姿があった。

本イベントでは成果物の展示だけではなく、津村氏と奥田氏の司会によるパネルディスカッションや講演も行った。パネルディスカッションには有志として参加を名乗り出てくれた地元小中学生4人も登壇し、保存会や市教委職員と意見を交わした。このときのパネルディスカッションは同時に、グラフィックレコーディングにより記録されプロジェクターにより壇上に映し出され可視化されていた（資料47）。パネルディス



西の明日香村フォーラムのパネルディスカッション

カッション後には早稲田大学文化学院の田畑幸嗣教授が登壇し、講評を行った。

また、本イベントは荒木山西塚古墳発掘調査の現地説明会と同日開催であり、フォーラム終了後には荒木山へ向かうバスが保存会により手配された。

(3) 協働の輪試行錯誤

令和6年度も北房中学校との協働「ふるさとの魅力発信」への挑戦は行った。同時に、北房小学校6年生でも総合の時間を活用した「ふるさとの魅力発信」への挑戦を開始した。中学校と同様に小学生の

班ごとに大学生がファシリテートにあたり、大学生と小学生のグループワークとなった。

中学校では、ウォークラリー、ラジオ、動画、スイーツ、カレンダー、北房小学校では、古墳図鑑、スタンプラリー、動画、古墳将棋といった「魅力発信ツール」が完成した。

小学校のスタンプラリーは、1月27日～2月7日に地域内で実施され、34人の参加者あった。2月2日の北房ぶり市では、同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター及び北房振興局により、北房小中学校における「ふるさとの魅力発信郷育」のPRや、西の明日香村フォーラムのPRを行った。開催中の北房小学校スタンプラリーについても、多くの来場者に台紙を渡し、スタンプを押してもらうことができた。

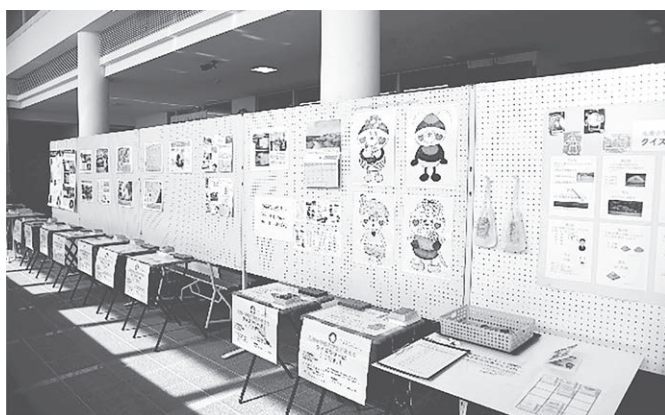
また、同年は奈良県明日香村とも協議を行い、2月に行うイベント「西の明日香村北房フォーラム」（資料53）へ同村の奈良県明日香村教育委員会文化財課職員である西光慎治課長補佐と畑田莉歩主事を迎え、明日香村の世界遺産登録に向けた取り組みを広報することとした。



明日香村職員を招致



小学生の発表にコメントする松田准教授(左)と西村校長(右)



小中学生の成果物展示



もちつき体験

今回のフォーラムは、2月21日と22日の2日にわたって開催し、21日金曜日には北房小学校が参加した。児童による「魅力発信ツール」の発表があり、西村校長やゲストとして迎えた東京大学大学院人文社会系研究科の松田陽准教授からコメントをいただいた。

2日目は、コスモスドームでは、きょうとうカフェと共同開発された「こすもすつき」「ブラウニー」の販売が行われ、ウォークラリーの受付が行われ、荒木山、北房ふるさとセンター、諏訪の穴をめぐるウォークラリーが開催された。現地には保存会がガイドとしてスタンバイし訪れた参加者を案内した。また、ドームでは公民館講座もちつき体験が同時開催された。

北房文化センターでは同志社大生による「ふるさとの魅力発信」への取り組み発表をはじめ、西の明日香村コンソーシアムの活動報告、保存会の活動報告が行われた。松田陽准教授の講演は「文化遺産を活用して〇〇す



令和7年度開催の西の明日香村北房フォーラム

る」といった演題で、「文化遺産とは、はじめからあるものではなく、つくり出すものである」という旨の内容であった。

西の明日香村コンソーシアムで主催した文化遺産関係の行事はこのほかにも、前述の令和6年度の「すげーの一、谷尻遺跡」や、令和7年度の荒木山西塚古墳発掘調査のドキュメンタリー動画「西の明日香村・北房の挑戦」上映会などがある。

令和7年度もまた北房小中学校と共同し「ふるさとの魅力発信」を試みており、取り組みをアウトプットする場として「西の明日香村北房フェス」を開催した。本取り組みは、単なる歴史学習にとどまらず、文化遺産の価値を発信する点に特色がある。今後も継続的な活動を通じて、文化財の継承と地域振興を両立させる持続可能な仕組みを構築していく必要がある。特に、西の明日香村コンソーシアムの構成団体や学校現場だけでなく、広く文化遺産を活用する人材に訴求し、楽しみながら取り組みを続けることができる体制が必要である。 【嶋田有一郎】



「すげーの一、谷尻遺跡」で展示物の説明をする北房文化遺産保存会会員



「すげーの一、谷尻遺跡」記念講演会
元古代吉備文化財センター所長 高畑知功氏

3. 真庭市立北房小学校・北房中学校郷育事業(2)

令和6年度の小学校・中学校の郷育実践

荒木山西塚古墳発掘調査が終了しているため、北房小学校6年生、北房中学校2年生は、それぞれ独自の郷育プログラムを準備することとなった。また、現時点で発掘調査予定はないため、北房モデルとしての郷育の教育理論フレーム、学校現場での実践は、別スキームとして継続する。引き続き、人や知識の「関係を媒介する装置」としての古墳を文化遺産として創造する実践を継続している。

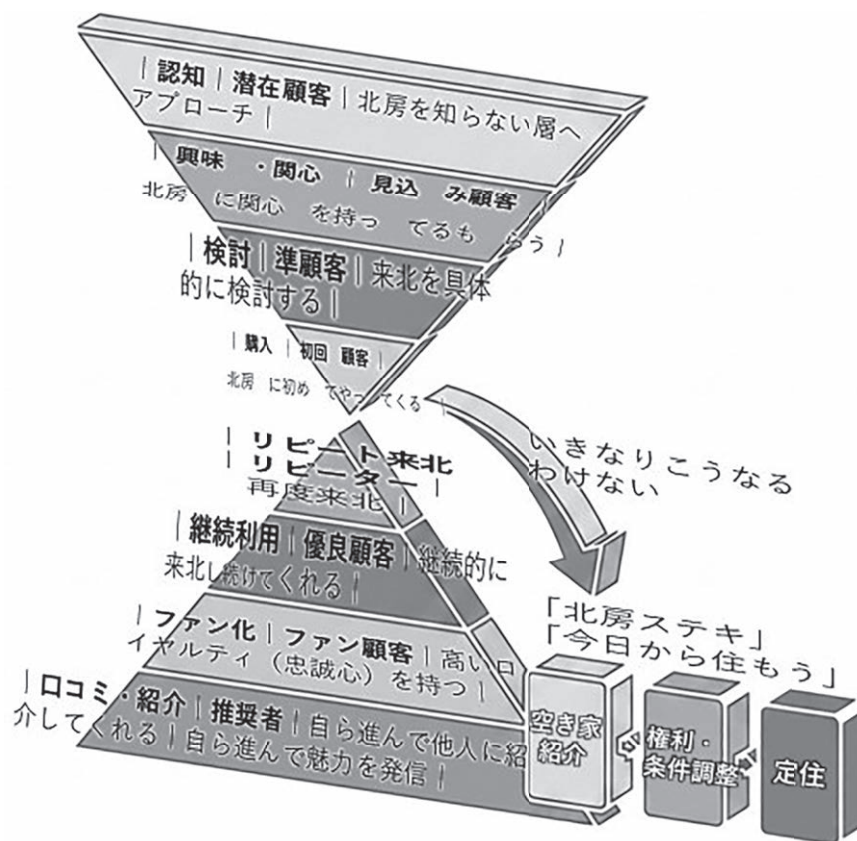
北房小学校6年生では、総合的学習の時間を利用して、地域の魅力再発見とその魅力伝達方法を考え

る授業を実施した。通年の授業で、今年度末の発表会（第2回西の明日香村北房フォーラム）を目指した。独自の郷育プログラムを準備するにあたって、23年度の北房中学校の活動実績を踏まえ、さらに、地域の魅力発信にマーケティングの考え方を丁寧に理解することから始めた。

まず、右図のようなマーケティングのダブルファネル概念²³を説明した。現在、「北房未来づくりネットワーク」（P39参照）でも、空き家紹介等の活動がこなわれ、SNSなどを通じて北房の魅力発信を続けている地域の人々がいる中で、それらを紹介し、そうした活動が、地域ブランディン

グやマーケティングのどの位置づけになるかを概説し、その上で、北房小学校6年生がどこを目指すかをグループワークにより検討してもらった。2クラス42名合同で、大学生5名がファシリテーターとして班に参加し、1年間を通じて班員との成果物作成を目指した。夏休み期間にも独自の宿題を準備し、6年生児童が全力で取り組んでくれていた。各班の取り組んだプロジェクトは以下の通りである。

- | | | |
|----|------------|---------------------------|
| 1班 | 西村杏優 | 古墳図鑑制作 |
| 2班 | 大野ももこ・島根七望 | 北房スタンプラリー at ぶり市（プラ板景品作成） |
| 3班 | 近藤 桜 | 古墳の魅力発信ショート動画制作 |
| 4班 | 松井拓巳 | 古墳将棋 |



北房小学校での活動の位置づけ
自分たちの班はどこを目指すのか？

23 「①商品を買ってもらうまでの流れ」と「②買った後にファンになって広めてもらう流れ」この2つの流れをセットで考えるマーケティングの仕組み。漏斗 (funnel ファネル) の形からのネーミング。



北房小学校 6 年生のグループワーク



スタンプのキャラクター作成

ること、3) 各グループにはジョイントの成果として、可視化できる成果物を求めること、などが決定した。また、新たに、4) 発掘調査だけでなく、それらをより広い受益対象者を想定した検討を進め、5) その際、マーケティングのダブルファネル概念に自分たちの活動を位置づけること、を課題とした。同志社大学文化情報学部学生6名が現地入りし、ファシリテーターの役割を果たしながら、大学生と中学生の闊達な議論が期待された。

1 班から 4 班まで、それぞれ各班で議論し、まずは「北房の古墳学習を 6 年生で実施した」ので、その内容を魅力発信につなげたいということになった。3 班、4 班はファネルの 2 層「北房に興味を持ってもらう」を狙いとし、1 班は 3 層「来北を具体的に検討する準顧客」、2 班は 4 層「北房に初めてやってくる」各層をそれぞれ目指すことを確認した。各班の説明内容や成果物に現れた調べ学習の成果は、それぞれ各ファネル層と対応しており、3、4 班は“古墳がたくさんある”あるいは、“古墳を魅力として地域が推している”ことを広く伝える、1 班は“その古墳はどんな種類でどんな特徴があるか”を伝える、そして 2 班は実際に来北した際に“古墳で楽しめる”ことを目標とした。

北房中学校2年生では、昨年度に引き続いて、総合的学習の時間を利用して、地域の魅力再発見とその魅力伝達方法を考える授業を実施した。通年の授業で、今年度末の発表会（第2回西の明日香村北房フォーラム）を目指した。昨年度に引き続き、1）通年で10コマ、大学生とのジョイントプロジェクトを実施すること、2）グループワークを通じて、大学生と中学生とのより強固な連結を実践す



北房中学校でのジョイントプロジェクト

授業では、まず座学で5班それぞれにマーケティングの概要を説明した。昨年度の総合的学習の成果と課題を整理する中で、発掘現場の人々や知識の「関係を媒介する装置」としての古墳の位置づけをさらに拡張し、地域外の人々への魅力発信を中心に検討することと課題とした。中学生にまずその現状を確認してもらい、自分たちが広報の主役として、「関係を媒介する装置」としての古墳のありかた、他業種（物販や旅行業、観光業）との連携の模索を検討してもらった。また、昨年度同様、年度末のフォーラムにて発表をおこない、自分たちの成果物で人と知識の連結を可視化し、その装置発動の推進で、社会資源化を目指す、高次の目標も掲げた。

各班の取り組んだプロジェクトは以下の通りである。

- 1班 西村杏優 神話ウォークラリー 地域創生神話の創作（地域誌と連結）
- 2班 大野ももこ インターネットラジオ（メディアと連結）
- 3班 近藤 桜 サイクリング動画（観光と連結）
- 4班 松井拓巳 きよとうカフェとのスイーツ開発（産業と連結）
- 5班 島根七望 地域カレンダー作成（伝統と連結）

10時間の授業コマ数で足りない場合は、同志社大学学生と北房中学校生徒が、放課後や週末に「水風の庭」に参集し、班ごとに、授業コマ数で終了しなかった作業を分担して実施した。令和5年度の成果に負けないように、大学生も生徒もそれぞれ切磋琢磨をしていた。その成果物は令和7年2月に開催された「第2回 西の明日香村フォーラム」で可視化され、フォーラム参加者や同時に開催された荒木山西塚古墳発掘調査現地説明会参加者に対しても社会資源化された。昨年度の引き続き郷育の教育理論フレームの実践として機能したと評価できるとともに、新たに、古墳とはこれまで結びつきにくい他業種界との連結を中学生が実践できたことは大きな成果と言える（報道記事35）。



北房中学校生徒が考えた地域創生神話に登場する神々
蛭命 秋桜命 大谷命 諏訪命



音楽室でのラジオ音源収録



きょうカフェオーナーとの
商品コンセプト開発



第2回「西の明日香村北房フォーラム」神話ウォークラリー



サイクリング動画撮影準備状況

令和7年度の中学校の郷育実践

北房小学校の負担も鑑みながら調整をおこない、小学校でのCKSCHによる郷育実践は見送りとなった。内容も含め、精査をし、令和8年度からの再開を期して準備を整えた。

北房中学校では、昨年度に引き続いて、総合的学習の時間を利用して、地域の魅力再発見とその魅力伝達方法を考える授業を実施した。通年の授業で、年度末の発表会(第3回西の明日香村北房フォーラム)を目指した。昨年度に引き続き、1) 通年で10コマ、大学生とのジョイントプロジェクトを実施すること、2) グループワークを通じて、大学生と中学生とのより強固な連結を実践すること、3) 各グループにはジョイントの成果として、可視化できる成果物を求めること、などが決定した。また、令和7年度は北房中学校、北房振興局、CKSCHの三者の協議の結果、4) 各班がすべて動画作成に集中し、複数の魅力発信動画コンテンツを作成すること、とし、5) 昨年度のダブルファネル概念でいう1層目、「北房を知らない層へアプローチ」を中心に、地域と外部との連結となる装置を制作することに集中した。これは、令和5年度、令和6年度と継続している郷育実践の中で、最も訴求力を持つ部分が欠落している、ということが課題としてあげられ、且つ、中学2年生自身の希望も踏まえて、そのような内容となった。

まず、座学では地域の魅力を自ら発見し、発信する実践型郷育について話した。北房の古墳や歴史資源、商品開発、イベントなどを題材に大学生と協働しながらYouTube動画を制作し、地域ブランドを構築することを目指す目標を明確化した。動画広報は視覚・聴覚の双方に訴える媒体であり、認知度向上や信頼構築、エンゲージメント²⁴の拡大に有効であることを学び、単なる情報発信ではなく、ターゲット設定、コンテンツ設計、分析と改善を通じて戦略的に地域の価値を伝えた。北房中学校の2年生、生徒一人ひとりがプロデューサーでありディレクターであるという立場に立ち、地域を説明できる主体として行動する点に重点をおいた。本実践は、文化資源を社会資源へ転換するプロセスを体験的に学ぶ郷育の応用段階に位置づけられる。

年度末のフォーラムにて動画チャンネルを公開し、自分たちの成果物に対するエンゲージメントのあり方や認知度の向上などに関する客観的評価をフィードバックする作業をおこなった。本年度も、同志社大学文化情報学部学生がファシリテーターとして参画し、班ごとのグループワークで複数の動画を制作した。



北房中学校でのジョイントプロジェクト

24 人や企業・ブランドに対して「関わろうとする気持ち」や「つながりの強さ」を表す言葉

各班の取り組んだプロジェクトは以下の通りである。

- | | | |
|-----|-------|--|
| 1 班 | 西村杏優 | 地元産シャインマスカット香水を作ってみた！ |
| 2 班 | 大原真菜美 | きょうとうファームのマスカットがわかるかな？ |
| | 菊池陽万里 | ー先生達に食べ比べてもらおう！ー |
| 3 班 | 大石伸也 | 北房のお店探訪 インタビュー |
| | 林田真奈 | ーAQUA編ー ーほたる庵編ー |
| 4 班 | 西村春陽 | 北房の郷土料理クイズ |
| | 安部くるみ | ー男子・女子どっちが詳しい？ー |
| 5 班 | 松井拓巳 | 刀鍛冶の里 <small>あざえ みず たくにしげ</small> 皆部・水田国重の世界 |
| | 岡村玲生 | |
| | 木下竺芸 | |

従来同様、10時間の授業コマ数で足りない場合は、同志社大学学生と北房中学校生徒が、放課後や週末に「水尻の庭」に参集し、班ごとに、授業コマ数で終了しなかった作業を分担して実施した。また、ICT教育も同時に実施し、オンラインでの共同作業も実施できるよう、専用サーバーを準備して遠隔地での共同作業をサポートした。動画の内容の計画、絵コンテの作成、アイキャッチの設定、動画編集全般はいずれも大学生がサポートしながら、中学生自らが出演、演出、編集をすべておこなっており、地域の魅力発信のための調べ学習を超えた創造的郷育が実践できたことは大きな成果であった。



動画素材撮影から編集作業へ



完成した動画

現在までのまとめ

本事業の到達点は、単なる教育実践の成果報告ではなく、地域政策の再設計に向けた提言である。平成29年（2017年）以降、荒木山古墳を軸とする調査・探査・発掘準備と並行し、小学校・中学校と大学

を接続した郷育実践を継続してきた。その過程で明らかになったのは、文化遺産を「保存対象」として扱う従来型行政モデルでは、地域主体は形成されないという構造的課題である。これは第1章の「まに大」の実践でも述べた。文化財保護法は「保存し、且つ活用を図り」と明示する。しかし実務上は保存中心に傾斜し、活用は二次的課題として扱われることが多い。結果として、発掘や調査は学術成果として蓄積される一方で、地域の主体形成や次世代育成には必ずしも接続されない。本事業は、この断絶を埋めるために、発掘調査と総合的学習の時間を構造的に接続した点に政策的意義がある。

令和4年度以降の小中学校での郷育実践は、発掘体験にとどまらず、参与観察、インタビュー、商品開発、動画制作などへ展開した。特に中学校では、単年度の体験型学習ではなく、通年10コマのジョイントプロジェクトとして再設計し、大学生がファシリテーターとして参画する体制を構築した。この枠組みは、単発イベント型の地域連携とは異なり、学習の連続性を確保し、成果物の社会化までを視野に入れている。政策的に重要なのは、こうした郷育が文化資源の社会資源化と地域主体の形成を同時に実現している点である。生徒は単なる学習者ではなく、プロデューサーやディレクターとして企画・制作・発信に関与した。これは地域を受動的に学ぶのではなく、地域を再解釈し、再構成し、外部に向けて説明する主体へと転換する過程である。教育政策の観点からも、総合的学習の時間の活用事例として、主体的・対話的で深い学びの具体的実装モデルとなり得る。

他方で、地域創生施策として広く採用されている「地域おこし協力隊」などの外部人材投入型政策との関係を整理する必要がある。外部人材は短期的な活性化や広報、商品開発に一定の効果を持つが、任期終了とともに知識やネットワークが地域外へ流出するリスクを抱える。知の所有が個人に帰属し、地域内部での構造化が進まない場合、持続可能性は担保されない。ここで報告した郷育事業は、外部人材である大学生を循環構造の内部に組み込み、知の再構成を地域内部へ還流させるモデルを提示した。ここでは外部か内部かという二項対立ではなく、“構造に組み込まれているか”が鍵となる。短期成果を追う加速型政策ではなく、複数年の経験蓄積を前提とした主体形成型政策への転換が求められる。

さらに、マーケティングのダブルファネル概念を導入した点は、教育と地域政策を接続する実践的手法として評価したい。北房を知らない層へのアプローチから来訪検討層までを想定し、小学校児童や中学校生徒自身が戦略を立案したことは、文化資源経営の初等の段階を教育現場で体験させる試みである。これは将来的に地域産業や観光政策と接続可能な人材育成につながるだろう。

政策提言として、第一に、文化財行政は発掘・保存事業と学校教育を制度的に連結させる仕組みを構築すべきである。発掘は専門家みの行為ではなく、教育と連動する公共事業として位置づける必要がある。第二に、総合的学習の時間を地域主体形成の中核に据え、複数年計画で大学や地域団体と連携する枠組みを制度化することが望ましい。第三に、外部人材施策は郷育の循環構造に組み込む形で再設計されるべきであり、短期成果主義からの脱却が求められる。

最終的に、文化遺産政策の持続可能性は、予算規模や事業数ではなく、“地域を説明できる主体”が地域にどれだけ育っているかによって測られるべきである。本事業は、発掘調査を契機に、小中学校教育を通じてその主体を育てる実証的モデルを示した。保存と活用を同時に達成するためには、制度改正だけでは不十分であり、教育を中核に据えた地域政策の再編が不可欠である。北房における郷育実践は、地方自治体が直面する人口減少・担い手不足という構造的課題に対する、教育政策を基軸とした応答である。文化遺産は過去の遺物ではなく、未来を担う主体を育てる装置である。政策はその装置を活かす方向へと舵を切るべきであり、そのための遺跡発掘は“文化財の破壊”ではなく、“文化遺産の創造”であることを、この北房モデルは理論的・実践的、学術的・政策的・教育的に指向しているのである。

【津村宏臣】

あとがき

本書を通して明らかになるのは、「調べること」と「関わること」が分断されていないという点です。測量機器や3D技術、地中探査といった専門的手法が現場で実践される一方で、それは講座や実習として共有され、地域住民や地域の未来の担い手（小・中学生）が主体的に関与していきます。実際に、調査技術の習得や神話創作、ガイド活動、イベント運営に至るまで、多様な関わり方が生まれていることの記録は、従来の文化財調査報告書ではない、文化遺産創造（過程）活動記録集としての本書の大きな成果の一つです。

プロジェクトでは、その理念的背景としても現実的背景としても、徹頭徹尾、文化財を「保存する対象」にとどめず、「活用される場」として再編します。発掘調査の運営、班編成、地域住民の参加、さらにはガイド養成やウォーキングイベントの実施など、具体的な活動の積み重ねは、地域における文化遺産の位置づけを大きく変化させつつあります。遺跡は過去の事物ではなく、現在進行形の関係の中で意味づけられる存在となっています。

同時に、本書は現実の課題も描出します。プロジェクトの担い手の高齢化や参加者の偏り、運営の負担、継続性の問題など、地域主体の活動には常に現実的な制約が伴います。こうした状況での次世代への接続は、今後の重要な論点です。とはいえ、その実践をここまで継続してきたことは、すべての関係者の“熱意と信念”の賜でしょう。この真庭・北房モデルは、地域創生や文化財活用の本質に「地域が自らをどのように語るか」という問いを一丁目一番地に掲げます。調査で明らかになる過去と、現在の実践の中で紡がれる物語とが重なり合うとき、地域は単なる時空間ではなく、意味を持つ場として再構成されます。そうなることが、文字通りの「圈究」（ある場所をとことん究める）なのであり、フィールドサイエンスや地域研究などという、陳腐な学術用語を超えた、圈究が可能となります。

「荒木山への道」とは、物理的な道であると同時に、地域と人と知が結び直されていくプロセスそのものです。プロセスである以上、まだ、ゴールではない。まさに、「たどり着いたら、そこがスタート」、という世界。樋口了一氏の「1/6の夢旅人」の歌詞そのままです。今後も、この地域のあらゆる「主体」が「たどり着く」と「そこがスタート」を繰り返すそのプロセスを楽しみながら続けていけますように。そして本書が、その道をこれから歩む人びとにとっての一つの指針となり、さらに多様な実践へと展開していく契機となることを期待したいと思います。

最後に、荒木山西塚古墳の発掘調査と本書の作成にご協力いただいたすべての皆さまに、心より深く感謝申し上げます。

【津村宏臣】

編集後記

何度、荒木山への道を往復したでしょうか。早いもので荒木山での発掘作業が終わって2年になります。編集過程で膨大な数の写真としばらく格闘しました。みなさん、ヘルメットにマスク姿。しかも、発掘は下を向いての作業ですから、だれかよく分からない写真が多いのです。あらためて確認してみると、新型コロナウイルスの感染者がピークの頃に発掘作業が行われていました。そんな状況下で、あれだけのことを本当によくやったものだと感じ入りました。

物事を成し遂げるためには熱意が必要です。それは、目標へと突き動かすエネルギーです。何事もそうですが、その熱意は興味を持ち、好きになることから生まれます。あの時、荒木山には思いを同じくした人たちのエネルギーが結集していたのです。

この活動記録集は、「荒木山の古墳を顕彰する会」の誕生からはじまります。顕彰する会の誕生がなければ、おそらく発掘調査はなかったでしょう。久松秀雄という、たった一人の熱意が、共感する仲間の熱意を巻き込んでいき、ついには延べ人数2000人に及ぶ県内各地の人たちを荒木山へと引き寄せました。『荒木山への道』は、このことを凝集したタイトルです。

私たち素人集団が、難易度の高い古墳の発掘調査に参画するということも含めて、様々な課題を抱えながら、それでも一つ一つなんとか解決していきました。そして、最終的にはコンソーシアムという官・民・学の共同体制による全国初の試みに結実しました。その意味では、できる限り詳細な記録集として残しておくべき貴重な出来事だったと思っています。では、そのことを十分に著すことができたかと問われると、残念ながら力量不足は否めません。

それでも、発掘調査の新たな形態例の一つとして、今回の活動を、ぜひ、多くの関係者に知っていただきたいと思っています。また、地方の山間部にあるちっぽけな田舎まちでも、熱意さえあれば、ここまでできることを、多くの人、特に若い人たちに知ってもらいたい、この『荒木山への道』にはそんな思いも込めたつもりです。有志竟成。

【平城 元】

真庭市職員という立場でありながら、故郷である北房の地において「西の明日香村コンソーシアム」の活動に携わる機会を得られ、たいへん意義深い経験となりました。

令和5年度に北房振興局へ異動したとき、第2次荒木山西塚古墳の発掘調査が始まろうとしており、不慣れな点も多い中、北房文化遺産保存会の皆様、同志社大学の関係者の皆様、ならびに教育委員会の皆様から多大なるお力添えを頂き、事業を進めることができました。

現地で共に作業し、対話を重ねる中で、地域に根ざした知見と学術的視点、行政の役割が相互に補完し合う協働の重要性を、改めて実感することができました。本冊子が、これまでの取り組みを記録するとともに、今後の地域づくりの一助となれば幸いです。

本活動に関わってくださったすべての皆様に、心より感謝申し上げます。

【嶋田有一郎】